GetBackers ―奪還屋― Parallel Universe

世紀末ドクター

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ―奪還屋―」と「魔法先生ネギま」のクロスオーバーＳＳです。

原作終了後の美堂蛮、天野銀次。そして、マリーア・ノーチェスの三人が麻帆良に飛ばされます。

以前、Ａｒｃａｄｉａに少しだけ載せてたこともあるんですが、こっちのサイトで連載してみることにしました。

目次

第一話『事のはじまり』 1
第二話『別のセカイ』 16
第三話『麻帆良学園にて』 29
第四話『奪還屋、開業①』 41
第五話『奪還屋、開業②』 54
第六話『カードは拾った　ｂｙ　長谷川千雨』 70
第七話『図書館島へ①』 87
第八話『図書館島へ②』 101
第九話『名前のない怪物』 119
第十話『幽霊の少女』 130
第十一話『名前のなかった怪物』 147
第十二話『桜通りの吸血鬼』 164

第一話『事のはじまり』

――――美堂蛮と天野銀次、

この二人の名前を知っているだろうか。

新宿の路地裏の奥にある「裏新宿」という街で、奪還屋『ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ』という裏稼業を営む二人組である。

奪還率１００％を誇る無敵の奪還屋（自称）との触れ込みだが、依頼の品が無事に依頼人に届くかどうかは少し怪しい。

しかし、依頼の成功率は抜きにしても、彼ら二人と一度でも戦ったことのある人間は誰もが彼ら二人のことを油断のならない強敵と認めているという。

「『ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ』のお二人についてですか？　ええ、やはりあの二人が一番楽しい遊び相手ですね。特に銀次君は面白い反応を返してくれるので、弄り甲斐がありますよ」

ちなみにこれは裏稼業の世界では最強最悪の「運び屋」として知られる赤屍蔵人の言である。

取るに足らない退屈な敵が相手ならば一切の容赦なく瞬殺する赤屍の性格を考えれば、ある意味、これは彼なりの最大級の賛辞の言葉とも言えるだろう。

このようにライバル関係にある裏稼業の人間からの評価は高いのだが、その日の食事にも事欠く日々が続く事もあるのは何故なのか。

駐車禁止のレッカー移動を喰らったり、『Ｈｏｎｋｙ　Ｔｏｎｋ』のツケを増やしたり、奪還に成功しても不注意から依頼品を壊してしまったり…ｅｔｃ

あの無限城での戦いが終わった後も、彼ら二人はそんな感じのドタバタした日々を過ごしているらしい。

そんなドタバタとした日常を過ごしていた蛮と銀次の二人だったが、どうやら運命を司る女神は彼ら二人を放って置いてはくれなかったようである。

◆

――――裏新宿『占い横町』、

占いと聞くと女子高生がキャピキャピ騒ぐようなイメージを抱くかもしれない。

だが、裏新宿『占い横町』と呼ばれるその場所はそんなイメージとはかけ離れ、人生の墓場にも例えられる場所である。

ここに来る人々は、夜逃げや自殺をするか内蔵を売ってその場を凌ぐしか道のない、地獄に片足を入れているような者ばかりだと言われ、さらに占い師の大半は、人買いや悪徳金融とつながっているか、インチキ宗教・呪い屋などだという。

そして、その町の一角にマリーアが店主を務めるカード占いの店『カルタス』はある。

「…ったく、何で俺らがババアの店の大掃除の手伝いをしなきゃならねーんだっつーの」

「まあまあ、蛮ちゃん。どうせ仕事も無かったし暇だったんだからいいんじゃん？　それに手伝ったらご飯ご馳走してくれるって言ってたし！」

店の地下倉庫の中では、蛮と銀次の二人組みが荷物を運び出す作業をしているところだった。

周りには埃を被った古い本や何に使うのか分からないガラクタまで色々な物が置かれており、作業はまだ全体の半分も終わっていない。

「しかし、いくらメシ奢ってもらえるからってこの仕事量は反則だぜ…」

周りを見渡して蛮は思わず顔をしかめる。

さっきから荷物を運び出しても運び出しても減っている気がしない。この調子では片付けが終わるのに一体何時間掛かるのか分かったものではない。
それにしても、さっきから倉庫の奥から出てくる品のラインナップが段々と可笑しなことになっているのは気のせいだろうか。

「あ！　蛮ちゃん、これ『バーチャルボーイ』だよ！　ほら、あの赤い画面の！」
「馬鹿なっ！　こっちには『ピピンアットマーク』だと…!?」

家庭用ゲーム機の黒歴史に認定されそうな代物を発見した二人だが、これはあくまで一例である。
さっきから四角ボタンの初代ファミコンやＰＣエンジンなど、およそ占い屋に似つかわしくないマイナーゲーム機やガラクタが続々と発掘されている。
他にも買ったは良いが使わずに放置していたと思われるランニングマシーンやストレッチ器具などが数え上げればキリがない。

「何つーか、黒歴史の見本市みたいな状態になって来たな…」
「そうだね…」

ここがマリーアの店の地下倉庫である以上これらは全てマリーアが収集したものなのだろう。
だが、ここまで黒歴史的な品物ばかりが発掘されると流石に呆れてしまう二人だった。
とりあえずさっさと荷物を運び出してしまおうと作業を再開する二人。
しかし、二人が作業を再開しようとした所でちょうど地下倉庫へと入ってきた女性が居た。

「どう？　仕事は、はかどってるかしら？」

波うつ豊かな黒髪と褐色の肌、女神のプロポーション。
知らない人が見れば、この女性が１００を超えようとする年齢だとはとても信じられまい。
現れたその人物の名は、マリーア・ノーチェス。魔術という名の神秘を修めた本物の『魔女』の一人であり、現存する神の記述の持ち主の一人である。
そして、蛮の育ての親とも言うべき人物であり、蛮がただ一人頭が上がらない人物でもある。

「これがはかどってるように見えるなら、テメェの目は節穴だぜ」

そう言って蛮は皮肉気に周りの様子を顎で示す。

「フフッ、随分苦労してるみたいね」
「全くだぜ。美味いメシ奢ってもらわなきゃ割りに合わねえ」
「ええ、分かってるわ。時間的にも丁度いいし、そろそろ昼食にしましょう」
「ご飯？　やったー!!!」

昼食にしようと言われて、顔をパアッと明るくさせ思わずタレ化する銀次。
そうして、銀次はトテトテと地下室の階段を昇って行く。

「蛮も行きましょうよ」
「ああ」

しかし、蛮がその場から歩き出そうとしたところで平積みに置かれていた本が足元に引っ掛かった。

「おっと」

平積み本が崩れ、何冊かの本がバサバサと床に落ちる。

「ん…？」

ふと蛮は気付いた。

よく見ると床に落ちた本の一冊が他とは雰囲気が違う。

「これは…」

気になって拾い上げてみると、やはり普通の書籍ではなかった。

豪華な革装丁本に見せ掛けてはいるが、実際はカードを納めるカードケースになっていることに気付く。

そして、何より、その表紙に書かれたタイトルは蛮にとって見覚えがあるものだった。

――『Ｔｈｅ　Ｄｉｖｉｎｅ　Ｄｅｓｉｇｎ（神の記述）』、

以前のルシファーとの戦いの際、蛮たちはこのカードに関わったことがある。

つい立ち止まったままその時のことを思い出していた蛮だったが、その様子を不審に思ったのかマリーアが話し掛けてきた。

「どうしたの、蛮？　って、それは…」

蛮の手元にある物にマリーアも気付いたらしい。

だが、どういうわけかマリーアは酷く驚いた顔をしている。

「何をそんなに驚いてんだよ？　この倉庫にある以上、テメェの所持品だろうが？」

「いいえ、これは私のカードじゃないわ。私のカードは普段使ってる

書斎の方に置いてあるはずだし…」
「もう一組持ってたのを忘れてただけなんじゃねえのか？」
「うーん、そんなはずはないんだけど…。ちょっと貸してくれる？」

そうしてマリーアは蛮から本型のカードケースを受け取ると、ケースの留め金を外す。
ケースの表紙を開いて見開きの右側のページの部分を見ると、そこには数枚のカードが収められていた。

「カードが４枚だけ？」

ケースに納められていたカードの総数は４枚。そして、彼女はその内の一枚を手に取った。
どこまでも続く荒野の地平線のイラストが描かれた一枚のカード。
もしもそのカードのタイトルを日本語に訳すとするなら…

「『セカイの最果て』……？」

それがそのカードに書かれたタイトルだった。
そして、彼女がそのカードのタイトルを呟いた瞬間にそれは起こった。

――ゴゥッ!!!

瞬間、マリーアが手に持っていたカードが爆ぜ、特大の暴風と閃光が地下倉庫の中に発生する。

「んなっ!?」
「っ――――!?」

まるで行き場をなくしたチカラが暴走するように地下室の中を風

が吹き荒れている。
青白い光を放つエネルギーの奔流が部屋の中を竜巻のように吹き荒れ、本や魔術器具などが巻き上げられている。
しかも時間が経つにつれて部屋の中を吹き荒れるエネルギーの勢いは増していった。

「蛮ちゃんどうしたの!?」
「銀次か!?」

地下室の異変に気付いたのか、慌てた様子で銀次が階段を下りてくる。

「って何だコレ!!?」

風が吹き荒れる地下室の様子を見た途端、驚きの声を上げる銀次。

「マリーア！　何が起こってやがる!?」
「分からない！　でも、警戒だけは解かないで！」

勢いを増していく風の中、マリーアは蛮たちに注意を呼びかける。
だが、結果から見れば、いくら注意をしろと言われても具体的に何に対して注意すればいいのか分からなかったのでは、対処のしようがなかったと言うしかない。
やがて部屋の中に渦巻くエネルギーが臨界に達したかのように一際強力な閃光が発生した。

「「っ――――!?」」

まるで彼らを飲み込むようにして発生した白色の閃光。
そのあまりの眩しさに思わず目を覆うが、光は一瞬だけだったのですぐに収まった。

そして、その光が収まった時、それまで周りに吹き荒れていた風も嘘のように止まっていることに気付く。

「チッ、一体何だってんだ？」

風と光が収まった後、目を覆っていた腕をどけてみる。
だが、そうして彼らの目に映った風景は、彼らがさっきまで居たはずの地下室とは全く別のものだった。

「「は…？」」

突然の事態に思わず間抜けな声を出してしまう三人。
彼らが周りを見渡すと風化しかけた煉瓦を敷き詰めた床に浅い水溜りが果てしなく広がっており、無数の線が碁盤目のように天井一体を交差している。
そこは一目見ただけで明らかに〝異界〟と分かる場所であり、彼ら三人が一度だけ来たことがある場所だった。

「蛮ちゃん、やっぱりここって…？」

銀次は蛮とマリーアの二人に視線で訊ねる。
その先の言葉は出さなかったが、マリーアと蛮の二人も銀次が言いたいことは分かっている。
二人は周りの景色を眺めながら銀次に同意した。

「ああ…、オメェが思ってる通りの場所だろうぜ」
「……そうね」

グラウンド・ゼロ――――、
そこはこのセカイの全ての始まりの場所であり、かつてはバビロンと無限城セカイをつなぐゲートが存在していた場所だった。

その意味では先程マリーアが手に取ったカードのタイトルの通り”セカイの最果て”と言える場所であり、【悪鬼の戦い（オウガバトル）】と呼ばれるセカイを賭けた戦いが終結した場所でもある。

（チッ、ひょっとしたらまた面倒なことになるかもな…）

思わず内心で蛮はそう舌打ちする。

状況的には神の記述のカードが暴走するように発動したことで、ここに飛ばされたとしか考えられない。

だが、この場所に飛ばされたことも、何かに巻き込まれる前触れの様な気がしてならない。

そして、結果的に見るなら蛮のその予感はやはり外れることはなかった。

「おや…、これはまた随分と珍しい客人だな…」

突然、蛮たちの後ろから声が響く。

蛮たちがその声に振り返ると、そこにはウサギの人形を抱いた少女が佇んでいた。

まるで『不思議の国のアリス』を思わせる幼い外見だが、どこか得体の知れない不気味な雰囲気を持つ少女。

ブレイントラストのメンバーの一人、間久部博士だ。

「……何でテメェがここにいやがる？」

突然の来訪者に警戒心をむき出しにして蛮は尋ねた。

「フム…、それはどちらかと言えばこちらの台詞なのだがね。まあいい。私がここに来た理由はただの調査だよ」

「調査？」

「そうだ。かつてこの場所は、バビロンシティとこちらの世界を繋ぐ

ゲートが在った場所だったということは知っているだろう？だが、このセカイとバビロンとの繋がりが断たれたことで、今この場所は別のあらゆる次元と繋がりやすい不安定な状態になっているのさ」
「つまり、それを調べるのが貴女の目的ですか？」
「まあ、そんなところだ。もっとも、調査自体はもうほとんど終わっている。
次元が不安定になっているのも恐らく一過性のもので、あと数週間も時間が経てば収まるだろうさ。もっとも一応、念のために監視役は置いておくつもりだがね」

博士の話に嘘を吐いている気配はない。
もっともこの少女が”あの”ブレイントラストの一員だということを知っている者なら、彼女の発言を無条件に信じることはしないかもしれない。
事実、蛮の方は他に何か良からぬ事を企んでいるのではないかと未だに博士に対して疑いの目を向けているくらいだ。

「他には何も企んでねえんだろうな？」
「……君が私のことをどう思っているか良く分かる台詞だな」

そう言って、博士はやれやれと苦笑い気味に肩を竦める。
そして、彼女は溜め息を一つ吐くとマリーアと銀次を含めた３人に向かって尋ねた。

「…まあ、私のことを信じる信じないはどうでもいい。それより今度はこちらが訊く番だ。どうして君たち三人がここにいる？　君たち三人が今さらこんな場所に何か用があるとは思えないが？」
「どうしてここに居るって訊かれても……」

思わず困惑顔になる銀次。
彼ら三人としては気付いたら、この場所に飛ばされていたという感

じだろう。
だが、飛ばされた切っ掛けがあるとしたら間違いなく『コレ』だったはずだ。
「…おそらくですが、私達が飛ばされた原因はコレだと思います。カードの力が暴発してここに飛ばされたとしか…」
そう言って、マリーアは手に持っていた神の記述のカードを取り出す。
そして、そのカードを見た博士は納得したように言った。
「なるほど…。そのカードが原因だったか。神の記述の原型になったプロトタイプ……、全て処分したと思っていたがまだ残っていたのか」
プロトタイプという聞き慣れない言葉。
その言葉に神の記述に関しては蛮や銀次よりも遥かに詳しいはずのマリーアですらが驚いた顔をしている。
マリーアの様子を見る限り、彼女もそんなカードが存在しているということ自体知らなかったようだ。
「プロトタイプ…？　私の持っているオリジナルのカードとは違うのですか？」
「基本的には殆ど同じだよ。だが、そのカードに秘められている力は君が持っているオリジナルのカードを遥かに上回っている。そのカードを１００％完璧に使いこなせる者は、恐らくはウィッチクイーンくらいのものだろうさ。素人が下手に扱おうとすればそれだけで暴発しかねない危険物でもある」
マリーアの所持するオリジナルのカードよりも、さらに強力な力を秘めたカード。

しかも博士の話が事実ならマリーアですら使いこなせない代物であり、ちょっとしたことで暴発してしまうような代物らしい。

「…ってことは、オレ達がここに飛ばされたのも？」

「単純にこのカードの暴発に巻き込まれただけってことかよ…」

言いながら蛮はマリーアの方をチラリと見る。

その視線に気付いたマリーアは表面上は笑顔で、しかし恐ろしく抑揚のない声で蛮に訊いた。

「……何か言いたいことでもあるのかしら、蛮？」

「べっつに～？　カードの力が暴発したのは、どっかの誰かさんの所為だなんて欠片も思ってねえから気にしないでいいぜぇ？」

蛮とマリーアの二人の間に火花が散る。

もっとも二人とも本気でケンカしている訳ではなく、じゃれ合う様な遊びのケンカだ。銀次もそれが分かっているから何も言わずに放置している。

そして、そんな漫才のような彼らのやり取りを見ていた博士はフッと小さく笑うと銀次に言った。

「…君たちは相変わらずだな」

「そうかな？」

「ああ、余りにも変わっていなくて安心したよ」

銀次と話をしながら、彼女はバビロンシティで彼が言ったある台詞を思い出していた。

それは銀次がバビロンシティに辿り着いた後、母親である天野博士に会った時に言った言葉だ。

――オレが望む『世界』はオレが知っているあのセカイです。仲間

がいて…友達がいて…敵もいて…見知らぬ誰かもたくさんいて…でも、すべてがオレの知っているあのセカイであってほしいと願います

この台詞だけで天野銀次という青年の人となりが良く分かる気がする。

博士は何か思う所があるのか、銀次のことをジッと見つめた。

「な、なに？」

中身はいざ知らず、仮にも美少女に見つめられて狼狽する銀次。

どうやら彼が女の子に弱いのも相変わらずらしい。博士はそんな彼の様子に小さく笑みをこぼした。

「…いや、何でもないよ。それはそうと、用が無いなら君たちも早くこの場所から立ち去った方がいい。さっきも言ったが、今のこの場所はあらゆる別の次元と繋がりやすい不安定な状態だ。下手に長居していると次元の揺らぎに巻き込まれる危険がある」

そう忠告すると、彼女はこの場所から立ち去ろうと踵を返す。

だが、数メートル歩いた所で不意に銀次に呼び止められた。

「あの～、ちょっと聞きたいんだけど、次元の揺らぎってひょっとしてこういうヤツ？」

「…？」

銀次が指差す先には、未だに言い争いを続けている蛮とマリーアの二人が居る。

二人はゴゴゴゴという擬音で表現されそうな気迫を放っており、その気迫の所為でまるで空間が歪んでゆくように見える。

いや、歪んでいるように見えるのではなく、これは実際に空間が歪

んでいる。

（……これはマズイな）

規模的に大したことはないが、ケンカ中のマリーアと蛮は全く気付いていない。

すでに歪みは臨界に達する寸前であり、このままでは確実にここに居る全員を巻き込むだろう。

もっとも間久部博士だけは予め対策を施した上でこの場所に来ているため、彼女だけは次元の歪みに巻き込まれずに済むはずなのだが。

「ん？」

「あら？」

流石に蛮とマリーアの二人も気付いたようだがもう既に遅い。

瞬間、周囲の空間がぐにゃりと歪み、歪みはぐるぐると渦を巻いた。

「って、なんだこりゃあ!?」

「うわっ!?」

「くっ!?」

まるでブラックホールのような強力な引力が発生し、時空の渦の中に吸い込まれる3人。

やがて歪みの渦が収まった後、そこには間久部博士だけが残された。

「やれやれ……」

残された彼女は溜め息を一つ吐く。

彼らが飛ばされたのは、間違いなく無限城セカイとは別のセカイだ

ろう。

「まあ…放って置くとするか。彼らならその内に自力で戻ってくるだろう」

あの3人がそう簡単に死ぬはずがない。

そして、生きているならいつか必ずこの世界へ帰ってくる。

(彼らが帰ってきた時には、向こうの世界でどんな経験をしたのか聞いてみたいものだな…)

そう思いながら彼女は銀次達が消えた場所を一瞥し、その後は振り返りもせずにその場を立ち去った。

第二話『別のセカイ』

グラウンド・ゼロでの次元の揺らぎの中に飲み込まれた蛮、銀次、そしてマリーアの三人。
次元の狭間を抜け出た後、彼らの視界に真っ先に飛び込んできたのは、桁外れの巨大さを誇る広葉樹であった。

「うわ～、でっかいな～！　スゴイなこの樹。こんな大きいの初めて見たよ」

大樹を見上げながら興奮気味に言う銀次。
その樹高は目測で優に２００ｍは超えているだろう。
そして、その大樹を中心に、石造りの広場が広がっている。パッと見、どこかの公園のようだった。
言うまでも無くさっきまで自分達が居た『グラウンド・ゼロ』とは全く違う場所だ。
蛮も太陽に手をかざしながら、上を見上げた。

（少なくとも俺らの世界にはこんな樹は存在しねえ…）

そこには桁外れの大きさを誇る広葉樹が聳え立っている。
その大樹の存在だけで、ここが自分達の居た無限城世界とは違う別の世界だと蛮とマリーアには確信できた。

「マリーア、銀次、まずは情報収集するぞ」
「ええ、分かってるわ」

異世界に飛ばされたという異常事態にも関わらず、蛮とマリーアは何をするべきかを冷静に把握していた。
数多の修羅場を潜り抜けて来たという経験から来る自信。その自信に裏打ちされた彼らの精神はこの程度の苦境では小揺るぎもしな

かった。
　しかしながら、世間に疎い銀次だけは樹高２００ｍを超える巨大樹を見ても「異世界に飛ばされた」という事実には思い至らなかったらしく、不思議そうな顔で訊ねる。
「え、情報収集？　何で？」
　蛮はそんな世間知らずの銀次をしばきつつ、情報収集に向かったのだった。

◆

　そうして、およそ３０分ほどの情報収集を終えて、三人は元の場所に合流した。
　ほとんど結論は決まっていると思うが、蛮は一応マリーアに尋ねる。
「それでどうだったよ？」
「蛮が考えてる通りよ」
「やっぱりな…」
　予想通りな答えに蛮は大きな溜め息を吐く。
　マリーアは蛮の反応に頷くと、さらに話を続けた。
「どうやらここも日本らしいけど、言うまでも無く私達の知ってる日本じゃない。いわゆる並列世界の類でしょうね」
「並列世界……？」
　思わずキョトンとした顔で銀次は聞き返す。
　ＳＦ小説などでしばしば題材に選ばれるキーワードだが、教養に疎い銀次にとっては聞きなれない言葉だったようだ。

そんな銀次のためにマリーアは極めて簡潔に自分達の置かれている現状を説明する。

「簡単に言うと、私達がさっきまで居た世界とは違う別の世界ってことよ。さすがにこの状況だと元のセカイに戻るのにはちょっと苦労するかもしれないわね」

「そうだな。けど、焦っても仕方ねえだろ」

異世界に飛ばされるという状況にも関わらず、異常なほど落ち着き払っている蛮とマリーア。

正直な話、これまでに潜り抜けてきた修羅場のことを思えば、この程度は苦境の内にも入らない。何より次元を越える為の手段に全く当てが無いという訳でもないからだ。

実際、蛮のアスクレピオスの力を完全開放させれば次元の壁の一つや二つ破ることは可能だし、次元を越えるだけなら意外と簡単にできる。

そうなると後は次元座標の問題だけであり、それさえ解決できれば元の世界に戻るのは十分に可能だと言えた。

「そうね。時間は掛かるでしょうけど、次元座標の解析は私の魔術で多分どうにかなるでしょう。今はそれよりも――」

そこで彼女は言葉を切ると、蛮と視線を合わせる。

「気付いてるわね？　蛮」

「当たり前だろ」

そう言って、蛮は何者かが隠れている物陰の方へ視線を移す。

「そこに隠れてる奴、いい加減に出て来いや」

先程から蛮たちを監視していた何者かに向けて呼びかける。
すると、その呼び掛けに応える形で物陰から一人の少女が現れた。
「気配は完全に消していたはずだが…、やはり只者じゃないな貴様らは…」

年の頃は１０歳程度だろう。
まるで人形のように整った顔立ちと、膝にまで届く金色の髪。
（どうやらコイツも見た目通りのガキじゃねえみたいだな…）

少女の姿を一目見ただけで、蛮はそう見抜いた。
流石に間久部博士やマリーアなど、見た目と中身が一致していない者に慣れているだけのことはあるかもしれない。
しかもただ年齢を重ねているだけの相手ではない。この目の前の金髪の少女が、それなりの『力』を有している事も蛮は気配で感じ取っていた。
もっとも目前の相手の力量の程を感じ取っているという意味では、金髪の少女にとっても同じだった。

「……」
「……」

警戒しているのかお互いに無言。
金髪の少女と蛮たちの間に張り詰めた空気が流れる。
そうやって少しの間、無言のまま睨み合っていたが、やがて蛮はふうと溜め息を吐くと少女に話し掛けた。
「まあ、そんな警戒すんじゃねえよ。そっちから仕掛けて来ない限り、俺達からは何もしねえ」

ともすれば自分達の方が格上だとも聞こえる蛮の発言。
蛮の尊大そうな態度と相俟って、やはりその発言は少女の気に障ったらしい。
少し不機嫌そうに少女は言った。
「…随分と上から目線だな、貴様」
「そりゃそうだろ。確かに、テメエもそれなりの力を持ってるみたいだが、俺からすりゃ大したレベルじゃねえ。テメエなら分かってるはずだけどな？　相手との力量の差を全く測れない無能ってわけじゃねえだろ？」
蛮は試すような視線で少女に問うた。
実際、現状での少女と蛮たちの戦力の差は歴然としている。
少なくとも少女の力量が蛮たちの戦力に及ばないことは、彼女自身も感じ取っていることだった。
（封印の解けた私ならともかく、今の私では逆立ちしても敵わん…、か）
内心で彼女はそう判断していた。
もしも蛮と銀次、マリーアの三人がその気になれば、この学園ぐらいはあっという間に制圧出来る。
この三人はそのくらいの実力は確実に持っている。
「……一体何が目的だ？」
「目的も何も、俺らは偶然ここに飛ばされて来ただけだぜ？」
「それを簡単に信じられるとでも？」
無論、蛮たちに敵対の意思はない。
だが、少女からすれば、蛮達が自分の力量を遥かに上回る正体不明の実力者三人という事実には変わりはない。

いくら敵対の意思がないと言っても、警戒するなと言う方が無理な話だった。
しかし、こうして睨み合いを続けていても、埒があかないのも事実である。

「ちょっといいかな？」

睨み合いを続けている蛮と金髪の少女。
その二人の間に、不意に銀次が割って入る。

「そんなことより、君の名前を教えてくれない？　それと、そんな険しい顔してたら折角の可愛い顔が台無しだよ？」
「銀ちゃんの言うとおりね。レディの扱いがなってないわよ、蛮」

銀次の持つ無邪気な雰囲気によって、さっきまで蛮と少女の間に張り詰めていた空気が一瞬で霧散する。
しかもオマケで、いつの間にか蛮が悪いみたいな雰囲気にされている。

「おい、何でいつの間にか俺が悪いみたいな雰囲気になってんだ？」
「え～？　女の子に優しくしない蛮ちゃんが悪いんじゃん？」
「テメエは一体どっちの味方だ!?」
「ボクは常に可愛い女の子の味方です」

まるで漫才のような緊張感のないやり取り。
蛮達に対して、つい先程まで最大級の警戒をしていた少女からすれば、まるっきり肩透かしを喰らったような印象だろう。
少女のことを差し置いて、未だにじゃれ合いのような喧嘩を続ける蛮と銀次。

「…何なんだコイツら」

そんな彼らの様子を見ながら、半ば呆然としたように少女は呟いたのだった。

◆

それからしばらくした後、蛮と銀次、マリーアの三人は、最初に出会った金髪の少女に連れられて、この学園都市の責任者のもとへ案内されている途中だった。

今さらだが、蛮たちを案内している少女の名前は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。蛮たちには知る由もないが『闇の福音』の異名を持つ真祖の吸血鬼である。

「それにしても異世界から飛ばされてきた、か…。にわかには信じがたい話だな」

「まあ、信じられないのも無理ねえわな」

「嘘は言ってないんだけどな～」

適当に雑談しながら学園の敷地の中を歩く四人。

しかし、流石に蛮たちの異世界から来たという話にはエヴァも半信半疑という様子だった。

「それよりこの学園の責任者って、どんな人なのかしら？」

「ん？　ああ、ぬらりひょんみたいな糞ジジイだよ。貴様ら三人の身の振り方はそのジジイに判断してもらう」

そうしていつの間にか、彼らは学園長室の扉の前にまで辿り着いていた。

「ジジイ、入るぞ」

果たして、扉を開けた先に待っていたのは――、

（ッ!?　何だ、あの頭の形は!?）

本当に妖怪のような老人だった。

思わず唖然とする蛮と銀次。あのマリーアですら余りに人間離れした頭の形状に絶句している。

「フォッフォッフォ、よく来たの。侵入者諸君」

いかにも老人くさい口調で蛮たちに話し掛ける老人。

数秒ほど固まっていた蛮たちだが、すぐに平静を取り戻すと老人に応対する。

「アンタがこの学園の責任者か？」

「そうじゃよ。近衛近右衛門じゃ。この麻帆良学園の理事長を務めておる」

「そっちのメガネ中年は？」

そう言って、蛮は学園長の隣りに控えていた中年の男性にチラリと視線を向ける。

恐らく蛮たちが実力行使に出られた時の保険、あるいは対抗戦力として用意されたであろう男。

別にこの学園長を襲おうという気があるわけではないが、今から始まる話し合いの展開によってはどうなるか分からない。

「タカミチ君はこの学園の教員じゃよ。今からの話には彼も同席してもらいのじゃが構わんかね？」

「別に構わねえぜ。銀次もマリーアも別にいいだろ？」

蛮の問いに銀次とマリーアもそれぞれ頷く。

二人が頷いたのを見て取った近衛学園長は、話を切り出した。

「それじゃあ、まずは自己紹介をしてくれんかの」

「ああ、いいぜ。まず俺の名前は美堂蛮。そこの銀次って奴と一緒に『ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ』っていう奪還屋をやってる」

「天野銀次でっす！」

元気はつらつという様子で蛮の後に続いて自己紹介する銀次。

だが、二人の自己紹介の中に出てきた奪還屋という聞きなれない言葉に学園長が反応する。

「奪還屋？」

「まあ、いわゆる裏稼業の一つだな。その名前の通り、奪られたものを奪り還すのが仕事だ」

「依頼成功率ほぼ１００％なんですよ！　ほぼ１００％！」

「ほぼほぼ、言ってんじゃねえよ!?」

「あべしッ!?」

しきりに「ほぼ」という言葉を強調する銀次に蛮が軽い拳骨を落とす。

そんな平常運転の二人を華麗にスルーし、今度はマリーアが口を開いた。

「私はマリーア・ノーチェス。カード占い屋『カルタス』の店主です」

「ついでに言うと、見た目を誤魔化してる１００歳のクソババアだ」

「ほお？　とてもそんな歳には見えんが…」

言いながら学園長は少しだけ驚いた顔を見せる。

しかし、大して驚いていない彼の様子に蛮は少し意外に思いながら訊ねた。

「…意外だぜ。もう少し驚くかと思ったんだがな。そこの金髪ロリといい、ひょっとしてこっちの世界じゃ見た目と実年齢が一致してねえ奴はそれほど珍しくねえのか？」

蛮がそう疑問に思うのも無理はない。

しかし、こちらの世界には年齢詐称薬という見た目を変化させる薬も存在しているので、外見と実年齢が違っていることは魔法関係者なら実はそれほど珍しくはない。

魔法関係者の場合、潜入任務などで変装などの必要があるようなときには、年齢詐称薬のような薬で姿を変えていることなどザラだからだ。

さらに言えば、魔法界なら亜人や魔族など普通の人間の数倍は長命な種族も存在している。

「フォッフォッフォ、実は魔法関係者ならそういうのはそれほど珍しくはないんじゃ。特に魔法界なら、亜人や魔族なんてのも居るからのう」

「へぇー、やっぱり世界が違うと事情も違うんだねー」

世界が違う、という銀次の言葉。

その言葉を切っ掛けに学園長は話題を切り替える。

「ふむ…、エヴァから報告は受けておるが、本当に君達は異世界から来たのかね？」

蛮はどう話すべきか少しだけ思案したが、別に嘘を吐くような必要も無い。

だから、蛮は素直にありのままを話すことにした。

「ああ。ここは間違いなく俺らが居た世界じゃねえよ」

そうして、蛮は自分達の状況と事情を話した。
次元の揺らぎに巻き込まれて、気が付いたらこの学園に居たこと。
そして、蛮達の世界にあんな世界遺産級の樹は世界中のどこを探し巡っても存在しないこと。
そもそも蛮達の世界には麻帆良という学園都市自体が存在しないこと。それらの状況を考えると最早、異世界に飛ばされたと考えるしかない。

「…ってな訳だ。これが夢でなくて現実だって言うなら、異世界だって考えるしかねえだろ？」
「うーむ…、なるほどのぉ」

長く伸ばした顎鬚を触りながら何かを考え込んでいる様子の学園長。恐らく蛮の話が信用できるかどうかを考えているのだろう。
蛮はそんな彼の様子を見て「まあ、普通の反応だわな」と内心で思いつつ、学園長の方に訊き返した。

「まあ、信じる信じねえはそっちの勝手だ。それで結局、アンタは俺達をどうしたいと考えてんだ？　おっと、その前に…」

そこで蛮は言葉を切ると、右手を学園長に差し出す。
そして、その右手にはいつの間にか、何かの金属製のリングを手にしている。

「ほらよ。アンタの耳飾りだ。床に落ちてたぜ？」

しれっとそう言いながら、蛮はさっきまで学園長の耳に着けてあった筈の耳飾りを差し出す。
驚いて学園長が自分の耳を確認すると、確かにさっきまで着けていたはずの耳飾りが無くなっている。

（一体いつの間に!?）

その場に居たエヴァ、高畑、学園長の三人全員が戦慄する。
もしもそっちが力尽くな手段に出れば、こっちも黙っていない。それは明らかにそういう意味を込めた蛮のメッセージだった。

「おお、これは親切にどうも」

内心での動揺を隠しながら、学園長は自分の耳飾りを受け取る。
ある程度の実力者なら、相手の気配を感じただけで相手の力量を推し量ることが出来る。
蛮の佇まいから感じる強さの気配。学園最強の魔法使いである学園長を以ってしても、まるで底が分からない。

（確かにエヴァの言う通り相当な実力者じゃな。まるで底が見えん。下手に敵対するのは、流石にマズイか…）

蛮達と向き合いながら、学園長はそう判断を下していた。
少し考えた後、学園長は蛮たちに提案した。

「ふむ…、美堂君。元の世界に帰る目処がつくまで、この学園で働く気はないかね？」
「要するに、監視ってことだろ？」
「有り体に言ってしまえばそうじゃな。じゃが君達が本当に別の世界から来たというなら、決して悪い話ではないと思うよ。住む場所や戸籍も提供しよう」

実際、別の世界から飛ばされて来たばかりの蛮たちにとって、悪い話ではない。
むしろ、無限城世界での車での寝泊り生活よりも生活水準的には良好かもしれない。

少なくとも、敵かも味方かも分からない正体不明の不審人物に対しての待遇としては破格なくらいだろう。

「テメエらはどう思うよ？」

そう言って、蛮は銀次とマリーアに意見を求める。

「いいんじゃないかしら？　私は別に構わないわよ」

「オレもだよ～。ってか、オレと蛮ちゃんだけならともかく、流石にマリーアさんにまでダンボール生活させる訳にはいかないし」

マリーアと銀次も学園長からの提案を受けることに賛成のようだ。

ここまで来たら特に学園長の提案を断る理由はない。

「それじゃあ、よろしく頼むぜ。爺さん」

「フォッフォッフォ、交渉成立じゃな」

そうして、お互いに握手が交わされる。

裏新宿における最高の奪還屋『ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ』の美堂蛮と天野銀次。そして、マリーア・ノーチェス。

本来ならこの世界に存在するはずの無い三人。そして、彼ら三人と共にこの世界に持ち込まれた三枚のカードを切っ掛けに、本来とは違う別の運命の歯車が回り出す事になる。

しかし、それによってこの世界がどんな未来に繋がるのか、今はまだ誰にも分からなかった。

第三話『麻帆良学園にて』

交渉の結果、学園都市に住まわせて貰うことになった蛮達三人。
しかし、この街で暮らしていくに当たって、もう一つ決めなければならないことがある。

「それで君達の仕事についてなんじゃが…」

学園長の方から話を振られるが、蛮と銀次の二人の仕事は最初から決まっている。
たとえ、ここがどんな世界だろうが彼らがやる事は変わらない。

「俺らは『奪還屋』以外の仕事をするつもりはねえよ。とりあえず住む場所だけ何とかしてくれりゃあ、俺と銀次はそれでいい」
「フム…、ちょっと危険な事も扱う何でも屋といった所かの？」
「まあ、そんな所かもな」

学園長に肯定の答えを返す蛮。
実際、解釈次第で比較的広い範囲の依頼を受けることも出来るので、学園長の言う様に『何でも屋』という解釈もあながち間違ってはいない。
そうして蛮と銀次の希望を聞いた学園長は、マリーアの方にも声を掛ける。

「マリーアさんの方はどうじゃね？」
「う～ん、そうねえ…。私の場合は『占い屋』の露店でも開かせてもらえれば幸いですけど」
「フム…、君達の希望は分かった。こちらでも検討してみよう。それではタカミチ君、彼らが住む所へ案内してもらえるかね？」
「分かりました」

そうして、蛮達は高畑に案内されて学園長室から退室する。
部屋に残っているのは、学園長とエヴァンジェリンの二人。
学園長は先程から腕を組んだ姿勢のまま壁に背を預けていたエヴァに声を掛ける。

「…エヴァよ。正直、彼らの実力はどの程度だと思っておる？」
「…さてな。だが、どんなに少なく見積もってもナギやラカンと同等以上の実力は確実にある。はっきり言うが、タカミチでは絶対に勝てんぞ」

学園長の問いにエヴァは、はっきりと断言する。
中でも、あの三人のリーダー的な立ち位置のサングラスの男――美堂蛮は別格だ。

「さっきの蛮とかいう奴の動きは私にすら全く見えなかった。
もしも奴がその気だったなら、あの瞬間に貴様の首は飛ばされていただろうよ」

先程、高畑と学園長、そしてエヴァ自身も決して油断はしていなかった。
しかし、それでもあの時の蛮の動きは全く捉えられなかった。むろん何かの能力を使った可能性もあるが、仮にそうだったとしても一体どんな能力を使ったのかすら分からない。
もしもあの男がその気だったのなら、何が起こったのか把握させないままにこちらを制圧することも出来た可能性すらある。
そして、何より――

（……あの男からは一瞬だけだが『血を好む人間』の匂いがした）

エヴァがあの蛮という男と最初に出会い、向き合った時に一瞬だけ感じた底の知れない凄み。血の匂いと死の気配。

天野銀次という金髪の少年と漫才のような掛け合いをしている時はそんな気配は鳴りを潜めている。
だが、もしも実際に戦うことになれば、あの三人の中では恐らくあの男が一番危険だ。
「フゥ…、何とも厄介なことになったのぅ。彼らがこの学園にとって敵でなければいいんじゃが…」
そう言ってやれやれと溜め息を吐く学園長。
しかし、エヴァの方は学園長とは少し違う見解だったようだ。
「…いや、敵か味方かで言うなら、アイツらは敵になり得んだろうさ。特にあの天野とかいうガキは底抜けのお人好しだ。あのガキが抑え役になっている限り、あの三人がこっちの敵になるなんて事はまず無いだろうよ」
「そうだといいんじゃがな…」
面倒事に頭を悩ませている学園長を尻目に、エヴァは部屋から立ち去ろうと踵を返す。
そして、エヴァは扉に手をかけた所で肩越しに振り返ると、底意地悪そうな笑みを浮かべて言った。
「それを判断するのが貴様の仕事だろう？　せいぜい悩め、クソジジイ」
そう言い残すとエヴァは学園長室を立ち去った。
そして、後に一人残された学園長は、本日2度目の大きな溜め息を吐いたのだった。
◆

学園長が想定外の面倒事に溜め息を吐いているその頃、その面倒事の原因である蛮たち三人は高畑に街の中を案内されていた。
異世界に飛ばされたという非常事態にも関わらず、三人は丸っきり観光気分という様子である。

「しっかし、まるでフィレンツェみてえな街並みだな」

あたりの街並みを見て周りながら蛮が感想をもらす。
周囲の建築物はまるでイタリアのフィレンツェを思わせるオレンジ色の屋根が特徴的で、街並みに統一感を持たせている。あらゆる物が雑多に入り乱れた裏新宿の街並みとは対照的だ。
普通の街と比較しても、かなり贅沢な街作りがなされていることは明らかだった。

「そっちの世界にもフィレンツェはあるのかい？」
「ええ、私たちの世界にもフィレンツェはありましたよ。…というより、存在する国家の名前や主要都市については私たちの世界と殆ど同じようですね」

高畑からの質問にマリーアが答える。
その程度のことは、この世界に飛ばされて直ぐに調べていたことだった。
そして、こっちの世界に『裏新宿』や『無限城』は無いということも、最初に調べた時点で確認している。

「へえ…、それは中々興味深いね」

マリーアの言葉に高畑も興味深そうな顔をする。
もっとも、一体どこまで同じでどれだけ違うのかは蛮達もまだ完全には把握していない。

それらに関しても情報交換は続けていく必要はあるだろう。無論、それは高畑ら麻帆良学園の人間からしても同じことであろうが。

「ところで美堂君」
「…なんだ？」
「そっちじゃどうかは知らないけど、未成年者の喫煙はこっちの法律では禁止されているんだ。流石に、目の前で煙草を吸われたら教師としては止めない訳にはいかない」
「…チッ、仕方ねえな」

高畑が注意されて渋々と蛮は煙草をしまう。
蛮の性格からすれば反発しても不思議ではなかったが、意外にも蛮は大人しく引き下がった。
穏やかな顔で、まるで諭すように言われては、流石の蛮も反発する気にはならなかったのだろう。実際、蛮達の世界でも未成年の喫煙は禁止されていることだからだ。

「クスッ、せっかくだから蛮ちゃんも禁煙したらいいんじゃない？」
「うるせーよ」

少し不機嫌そうに蛮は言葉を返す。
そんな適当な雑談を交わしながら、彼らは昼下がりの街を歩く。
そして、街の大通りを通り抜け、少し小高い丘を上ってすぐのところにその建物はあった。
レンガ色の壁に、腰折れ屋根が特徴的なアンティークな建物。どうやら空き家になっているらしく人の気配は全くしない。
そうして、高畑はポケットから取り出した鍵で玄関の扉を開くと蛮たちを部屋の中に案内する。

「君達にはしばらくここに住んでもらうことになるけど、構わないかい？」

案内された家の中には、まだ家具の類は全く置かれていない。
しかし、家具の類を何も置いていないことを差し引いても、部屋の中は意外と広い造りをしていた。
少なくとも蛮と銀次、そしてマリーアの三人が生活するに当たって、広さ的には十分な代物だと言えた。

「へぇ…、結構いい部屋じゃねえか」
「なんか『耳を〇ませば』の地球屋みたいな家だね～」

どうやら案内された家を蛮たちは気に入ったようだった。
そして、蛮たちが部屋の中をしばらく見て回ったところで、高畑は再び声を掛ける。

「どうやら気に入ってくれたみたいだね」
「ええ、とても素敵な家だと思います」

そして、マリーアは謝辞を述べながら、高畑に頭を下げる。
実際、状況次第ではホームレス暮らしも覚悟していただけに落ち着いた拠点を手に入れることが出来たのは有り難かった。
とりあえずこうやって住む所を確保できた以上、後は日用品などの生活に必要な物を揃えて行く事になる訳だが――

「よっしゃ、それじゃあ色々と必要なモンを揃えねえとな。もちろん費用はそっち持ちなんだろ？」

明らかに学園側にたかる気満々の蛮。
その図々しい態度はどこからどう見てもそこらのチンピラである。

「こら、蛮。いくらなんでもその態度は駄目でしょう？」

そう言って、マリーアはコツンと蛮の頭を軽く小突く。
もっとも両者の間に険悪な様子は全く無い。穏やかな顔で注意するマリーアの様子はまるで態度の悪い子供を叱る母親のように見えた。

（腕白な少年二人とその保護者…、という感じだな）

高畑は蛮、銀次、マリーアの三人をそう評価した。
少なくともこの様子を見る限り、この三人がこの学園の敵になる可能性は少ないように思える。
しかし――――

（まだ見極める時間が必要、か…）

正直、真っ向からの戦闘でこの三人を止められるとは高畑にも思えない。
だが、何も真っ向から戦う必要はない。いざとなれば不意打ちや毒などの暗殺に頼る方法もある。
もしも必要ならばそういう方法も選ぶ覚悟を決めなければならないかもしれない。もちろん、そんな方法に頼るような事態にならないことがお互いにとって一番良いのだろうが。
とりあえず高畑は物騒な考えを頭から追い出すと、懐の内ポケットから封筒を取り出した。

「とりあえず当面の生活費としてこれを渡しておくよ」

そう言って高畑は封筒をマリーアに手渡す。
手渡された封筒にはかなりの厚みがあり、少なくとも数十万くらいは入っているようだ。
そして、それを見た蛮と銀次の瞳はいつの間にか$マークになっている。お金に目が眩んだ状態とはまさにこういう状態を言うのだろ

うか。

「よし！　それじゃあ、金の管理はこの俺が……」
「えい♪」
「あばぁ!?」

蛮が「金の管理は任せろー！」と言い出そうとしたところで、晴々とした良い笑顔のマリーアが蛮をしばき倒した。
それにしても、あの美堂蛮に対して、こんなことが出来るのは世界中の全てを探し巡っても彼女しかいないのではないだろうか。
蛮を殴り飛ばした後、マリーアはやれやれと溜め息を吐く。

「全くもう…、アンタらにお金の管理させたら碌な事になりそうにないわ。お金の管理は私がする。いいわね？」
「おい！　横暴だぞ、クソバb…あべしッ!?」

有無を言わせないマリーアの決定。
その決定を不服として反発するが、再び殴り飛ばされる蛮。
それを皮切りにして再びマリーアと蛮の間に喧嘩が勃発する。
もっとも喧嘩と言うよりは、マリーアから蛮への一方的なお仕置きと言うようなものであったが。
そんな少しばかり過激なじゃれ合いを続ける二人を傍目に高畑はクスリと笑いながら銀次に訊ねる。

「君たちはいつもこんな感じなのかい？」
「うーん、依頼が絡んでない時のオレ達は大体いつもこんな感じかな～」

銀次は「仕方ないな～」と少し呆れながら、マリーアと蛮の仲裁に入る。しかし、銀次が止めに入った時には既に遅かったと言うしかない。

どうにか場は収まった後、そこには顔面がボコボコに腫らした蛮が床に転がっていた。
あの蛮が唯一人、頭が上がらない相手というのはやはり伊達ではなかったようだ。

「さて！　身の程知らずの子供の躾けも終わったし、日用品とか揃えに行きましょう！」

そうして、一行は再び街へと繰り出す。
その後、彼らは高畑に学園都市の案内をしてもらいつつ、必要な物を揃えていったのだった。

◆

それから数時間後、必要な物を粗方揃え終わった彼らは部屋の整理をしているところだった。
そして、高畑が去ってしばらくした後、部屋の整理を進めていた蛮がふと手を止めて呟いた。

「それにしても、この学園の連中は本当に信用できるのかねえ…」

その言葉にマリーアと銀次の二人の表情が真剣なものに変わる。
蛮はマリーアと銀次の二人にあることを確認させていたのだった。

「銀次、マリーア。今の時点で何か監視の目は感じるか？」
「いいえ、少なくとも私の分かる範囲での魔術的な監視は無いわよ」
「銀次の方は？」
「うん。隠しカメラとか盗聴器とかの電気的な監視装置も無いと思うよ」

この二人がそう言う以上は監視の目は本当に無いのだろう。
そもそも魔術師としての能力、電気使いとしての能力において、この二人は無限城世界においてすらトップクラスの能力者である。
そんな二人の警戒を潜り抜けて監視の目を置くのは、ほぼ不可能だからだ。

「マジかよ…。絶対に監視の目があると思ってたのに…」

しかし、銀次とマリーアの返答は蛮にとって予想外な結果だったらしく、内心で蛮は拍子抜けしていた。
蛮達のことを甘く見ているのか、それとも単純にお人好しなだけなのか。それは分からないが、監視の目が無いのは好都合だ。
彼らはこれからの自分達の方針について話し合うことにした。

「まずこれは最低限なことなんだけど、少なくとも『神の記述』の残りのカードを回収するまでは、この世界に滞在する必要があるでしょうね」

そう言って、マリーアが話を切り出す。
この世界に飛ばされる切っ掛けになったカード。
そのうちの一枚『世界の最果て』のカードは現在、封印処置を施した上で現在マリーアが所持している。
しかし、あのケースに納められていたカードは合計で四枚だった。つまり、残り三枚のカードが存在するはずなのだが、今それらは手元にない。
つまり、残りの三枚のカードも蛮達と共にこの世界のどこかに飛ばされてしまったということだ。少なくともそれらのカードを回収あるいは処分するまでは、この世界に滞在する必要がある。

「…やれやれ。思ったより面倒なことになったな」

そう言いながら、蛮は大きな溜め息を一つ吐く。
実際、残りの三枚のカードをこのまま放置しておけば、この世界にどんな影響が出るか分からない。
もしも三枚のカードを放置したまま元の世界に帰還した結果、この世界が消滅でもしたら目覚めが悪いにも程がある。

「うーん、だったらいっそこの学園の人にも協力を頼んだ方が良くない？」

銀次が思ったことを口にする。
しかし、マリーアと蛮は銀次の提案に否定的だった。

「それはまだ止めておいた方が良いわね。銀ちゃんも知ってるだろうけど、『神の記述』はただのカードじゃない。あのカードは相応の準備をした上でなら、既存のセカイを上書きして、別のセカイを創り出す事も可能な代物よ」

かつての『神の記述』を巡っての依頼の時、それをやろうとした者がルシファーと呼ばれた男だった。
あの時は、それを実現するための準備段階で彼の企みを叩き潰したが、もしも彼の企みが実現していれば一体どうなっていたかは予想がつかない。
ましてや今回、彼らと一緒にこの世界に飛ばされたと思われる三枚のカードは、マリーアが所持するオリジナルを遥かに上回る力を秘めているというのだ。

「マリーアの言う通りだな。カードの力を知った学園の連中が何か面倒なことを企まないとも限らねえ。この学園の連中が完全に信用出来ない間は、カードのことを下手に教える訳にはいかねえよ」

マリーアの言葉に蛮が付け加える。
この学園の人間が信頼に足る人間だと判断できれば協力を頼むのもやぶさかではないが、現状では難しいだろう。
「うーん…、結構、信用出来そうな人達だったんだけどなぁ…」
そう言って銀次はぼやくが、多数決的には二対一であるため彼は大人しく引き下がった。
実際、蛮とマリーアの言っていることも決して間違いではないからだ。
「それじゃあ今後の基本方針を確認するぜ。まずはこの世界での生活基盤を確保。同時に情報収集の継続。さらに行方不明の『神の記述』のカードの捜索だな。俺らが元の世界に戻るのはカードを全て回収するか処分してからだ。とりあえずこの方針で問題ないな?」
蛮の言葉に黙って頷く銀次とマリーア。
かくして麻帆良学園で暮らすことになった三人。
そして、この世界に飛ばされた三枚のカードを巡って、かつての無限城での『オウガ・バトル』に匹敵するほどの事態が引き起こされることになるのだが、この時の彼らには知る由もなかったのであった。

第四話『奪還屋、開業①』

蛮たちが麻帆良世界に飛ばされて翌日、彼らは再び学園長室へと呼び出されていた。

学園の主だった魔法関係者への顔合わせと、学園で生活するに際しての注意事項の確認のためだ。

今、学園長室には昨日会った学園長と高畑の二人に加えて、数人の教員と生徒の魔法関係者が集められており、幾人かは蛮達に警戒の視線を送っている。

（まあ、流石に今の状況じゃ警戒されるのも無理はねえわな）

この程度の視線など大して気にする程のものでもない。

蛮たちはそうした視線を全く意に介さずに学園長からの話を聞いていた。

そして、学園長から粗方の話を聞き終えた蛮は率直な感想を漏らす。

「しかし、なんつーか色々と面倒なんだな。こっちの世界の魔法使い、魔法協会ってのは」

基本的に魔法の存在は一般には秘匿とされており、魔法使いは世のため、人のために陰ながらその力を使うのが美徳とされているらしい。

しかし、ここまで大規模な学園都市を運営していることを考えると、何というかその建て前は色々と矛盾を孕んでいるような気がする。

「確かにそうかもしれんの。じゃが残念ながら、魔法の力を私利私欲のために使おうとする人間もおる。そういう者が可能な限り現れないようにするためには魔法使いを組織として管理しておいた方が何

かと都合が良いんじゃよ」

少し苦笑しながら言う学園長。

どうやら学園長自身も「魔法の秘匿」や「マギステル・マギ（立派な魔法使い）」という建て前に多少の思う所はあるらしい。

流石に組織のトップに立つだけあって、清濁併せ呑む器量はあるようだ。

「そして、ここが日本での魔法使いの総本山である以上、西洋魔法の情報が多く管理されておる。敵対する組織も皆無ではない。そうした敵対組織に雇われた魔法使いや傭兵なんかが、この学園の機密情報なんかを狙って侵入しようとしているのじゃ」

「なるほどな。それで最初、俺らに対しても神経を尖らせてたわけかい」

学園長の話に一定の理解を示す蛮。

一般人への魔法の秘匿に代表されるような魔法使いのルール。

魔法協会が勝手に決めたルールと言えば確かにそうだが、なにからなにまで自分達の都合だけで作ったわけではない。そのくらいのことは蛮たちにも分かる。

全てのことに納得できた訳ではなかったが、敢えて蛮たちは何も言わなかった。所詮、自分たちはこの世界においては異邦人だからだ。

それに何より――

（――真っ当な法律に照らし合わせりゃ、裏稼業の俺らだって所詮はただの無法者だからな）

裏稼業の人間も所詮は無法者。

そのことを考えれば、余所様のルールに口出しする権利は蛮たちには無かった。

もっともそれは学園側との間に下手な軋轢を生まない為であって、

いざという時には学園側のルールに従ってやる義理は無いとも考えていたが。

「えーと？　結局、オレ達はどんなことに気を付ければ良いのかな？」

「なに、難しく考える必要はないわい。要するに、一般人に対しての魔法の秘匿の順守と、裏の世界の荒事に一般人を巻き込まないようにしてもらえば、とりあえずは問題ないよ」

蛮とマリーアに比べれば頭の緩い銀次のために要点を絞った説明を学園長が付け加える。

そして、彼は蛮たちのこれからの仕事について話を切り出した。

「さて、君達が『奪還屋』を開業することについて学園側でも検討してみたんじゃが、こちらの試験をクリア出来たなら認めたいと思う」

「試験だと？」

思わず訊きかえす蛮。

そして、学園長は蛮たちに二人の少女を紹介した。

同じ制服を着ているということは、この学園の生徒なのだろう。

白木拵えの太刀を携えた黒髪サイドテールのサムライ少女に、褐色肌と黒髪ストレートロングが特徴のクールビューティーの二人だった。

「桜咲刹那くんに、龍宮真名くんじゃ」

まるで射るような鋭い眼をした二人の少女。

その視線はどこか無限城世界の裏新宿を生きる裏稼業の人間達を彷彿とさせる、プロフェッショナルの瞳だった。

（へぇ…）

蛮は内心で感心するような声を漏らす。
この二人がそれなりの修羅場を潜り抜けた人間だということは、蛮達には見ただけで分かる。
別に男女差別をするつもりは蛮には無いが、女性の身でありながらよくぞという感想を抱かざるを得なかった。
もっとも銀次の場合は、標準以上の美少女二人に単純に見惚れていただけのようであったが。
そして、そんな美少女二人に見惚れている銀次に少し呆れながら蛮が口を開く。

「まさか、このサムライ娘と褐色娘と戦って勝つことが条件だって言うんじゃねえだろな？」
「いや、この二人は任務の協力者じゃよ。この二人と協力して今夜の警備任務・侵入者の撃退任務に当たって貰いたい。その任務での働きいかんで君らに『奪還屋』を開業することを認めたいと思う」
「わざわざ『協力任務』な理由は何だ？」

蛮は学園長に訊ねた。
相手の強さを試すだけなら、わざわざそんな協力任務などという面倒な形をとらなくても良いはずだ。
そのことを学園長に訊ねると彼は「もっともな疑問じゃな」と頷いて言葉を返す。

「うむ。まず前提条件として、ワシ等は君らの依頼人について制限せざるを得ん。つまり、学園と敵対する勢力からの依頼を受けるのは禁止じゃ。わざわざ言うまでもないことだとは思うがの」

依頼人について一応の釘を刺しておく学園長。
普通ならわざわざ言うまでもないことではあるのだが、一癖も二癖もある裏稼業の人間を手元に置いておくなら、ある意味これは必須の条件であると言える。

最悪の場合、いつの間にか裏切られていた、ということも十分に有り得るからだ。実際、最強最悪の『運び屋』と言われた男は、内容に矛盾が起きなければ依頼の掛け持ちをしたり、敵対する勢力同士から同時に依頼を受けたりすることもあったくらいである。
もっとも蛮と銀次の二人の性格を考えるならば、そういった心配はほぼ無いと思われるが。

「そして、君らが『奪還屋』を開業するのであれば、その依頼主はおそらくワシら魔法協会が得意先になるじゃろう。ワシらの手に負えないような厄介事の解決を頼むこともあるかもしれんし、学園の人間と連携しての仕事などを頼むこともあるかもしれん。じゃから今から提示する試験は君らの強さを測るのが目的ではなく、学園側の人間と連携して動くことが出来るかどうかを見るのが目的じゃな」

学園長の言葉に、蛮は頷いて考える。
確かに学園長の言うことは一理ある。特に赤屍に代表される戦闘狂な人間の場合、本来の目的を無視し戦闘を優先したり、戦闘能力は優秀だか作戦行動には組み込みにくいなどといったこともあるからだ。
しかし、学園長が提示した試験の内容は『奪還屋』の仕事と言うより、『始末屋』や『護り屋』がやるような仕事であることに蛮は少し引っ掛かった。
そうした蛮の反応にこれまで沈黙を保っていたマリーアが話し掛ける。

「何か気になる事でもあるのかしら、蛮？」
「気になる事っつーか…」
蛮は頭をガシガシと掻き毟りながら、学園長へと視線を向けた。
「おい、爺さん。俺らはあくまで『奪還屋』だぜ？　警備だとか、侵入

者の撃退ってのは『護り屋』や『始末屋』にやらせる仕事だろうが？」
「フォッフォッフォ、確かにそうかもしれんの。じゃが、この学園都市には裏の世界の荒事とは無関係の一般人も多く暮らしておる。そして、そうした一般人を巻き込むことを何とも思わない外道も居る。そうした連中に奪われようとしている平穏を奪り戻して欲しい…という解釈ならどうじゃね？」

学園長はしたり顔でそう言った。
実際、裏稼業の人間は、解釈次第で結構広い範囲の依頼を受けることも多い。
特に、先述の最強最悪の『運び屋』なんぞは、「対象の人間をあの世へ『運ぶ』」という名目で暗殺を請け負うこともあったくらいである。
蛮は学園長の瞳を少しの間、探る様に見つめていたが、やがて「仕方ねえな」という感じに言葉を返した。

「そういう屁理屈めいた依頼は、出来りゃあ止めてもらいたいんだがな。まあ、良いぜ。受けてやっても」
「フォッフォッフォ、頼むぞい」

そう言って、学園長は蛮に右手を差し出した。
そして、蛮はその手を取り、お互いに握手が交わされる。

「さて、この後の任務については今紹介した刹那君と龍宮君の二人に聞いてくれたまえ。君らの働きに期待しとるよ」
「ああ、俺ら無敵の奪還屋『ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ』に任せときな」

不敵な笑みを浮かべて学園長の言葉に答える蛮。

「それでは刹那君に龍宮君、彼らのことを案内してもらえるかね？」
「分かりました」

そうして、蛮達は二人の少女に案内されて学園長室から退室する。
蛮達が学園長室から出て行ったところで、集められていた魔法先生の内の一人が学園長に訊ねた。
眼鏡をかけた黒人の男性教師で、最初から蛮達に向けて警戒の視線を向けていた人物の一人であった。

「良かったのですか、学園長？」
「何がじゃね、ガンドルフィーニ君？」
「あんな素性が知れない者達を学園に引き入れるなんて危険ではありませんか？」

正直、もっともな質問である。
しかしながら、下手に敵対した方が遥かに危険なのだからどうしようもない。
真っ向からの戦いではこの学園の誰もあの三人には勝てないからだ。下手に敵に回してしまえば、学園が物理的に滅ぼされることになりかねない。
敵に回すことが出来ない以上、味方に引き入れることを考えた方が何かと得だ。
そして、何より――――

「これはエヴァが言っておったことじゃが、『あの三人はこの学園にとって、敵にはなり得ない』そうじゃよ」

まさかの『闇の福音』の名前が出たことにガンドルフィーニは少し驚いた反応をする。
元６００万ドルの賞金首、魔法使いたちの間ではナマハゲ扱いすらされている悪の魔法使いで真祖の吸血鬼。
経験の豊富さという面では彼女の上を行く人物など、この学園にはいない。そもそも勘というものは蓄積された経験から無意識的に導き出されるものである。

そういう意味では、彼女の勘は他の誰よりも信頼できると言える。

「正直、明確な根拠は無いよ。じゃが、彼女の勘は頼りになるからの。ワシも彼女の勘を信じてみることにした」

勘以外の根拠は無いと明言する学園長。

しかし、頭の固い魔法先生の代表であるガンドルフィーニは当然ながら反発する。

「か、勘ですか!? そんな不確かなもので!?」

正直、勘などという不確かなものに全てを委ねるのは責任者として疑問な行動である。

ガンドルフィーニの反応も当然かもしれないが、学園長は事も無げに言い放った。

「何を言っておる? 魔法なんてオカルトの世界に生きる者が、自分の直感を信じなくてどうするんじゃ?」

有無を言わせぬ迫力を秘めた学園長の視線。

その迫力に呑まれたのか、ガンドルフィーニはそれきり何も言わなくなる。

ガンドルフィーニ以外の教員も今回の決定に各々思う所はあるようだったが、トップが決めた以上、末端としてはそれに従うほかない。

結局、その後は誰も何も言うことなく、散会となったのだった。

◆

一方、その頃。

蛮、銀次、そしてマリーアの三人は、学園の敷地を二人の少女に連れられて歩いていた。
それぞれ桜咲刹那と龍宮真名という名前らしいが、標準的な感性からすれば間違いなく二人とも美少女の範疇に入るだろう。
しかし、二人からよくよく話を聞いた結果、蛮と銀次は揃って驚愕することになる。

「えっ、嘘!? 最低でも高校生だと思ってたのに!?」
「その胸で…中学生、だと…?」

刹那の方はともかく、真名のナニを見て「なん…だと…?」と驚愕の顔を見せる蛮と銀次。
彼らが知る同じくらいの年齢の女子と言えば、『ＨｏｎｋｙＴｏｎｋ』のアルバイトである仙洞レナと水城夏実が居るが、はっきり言って彼女達では勝負にならない。
仙洞レナも中学生にしては相当な体つきをしているはずなのだが、真名のそれは彼女すらも明らかに上回っているから驚きである。
ちなみに蛮の脳内スカウターによれば、バストサイズという戦闘力は龍宮真名（８８．９ｃｍ）〉仙洞レナ（８１ｃｍ）〉〉水城夏実（７２ｃｍ）〉桜咲刹那（７１ｃｍ）の順である。
え？マリーア？ 見た目を誤魔化してる１００歳のババアなんてノーカンですよ。

「レナちゃんも相当スタイル良いはずなのに…」
「まさに胸囲の格差社会だな…」

そう言って、蛮は刹那の方をチラリと見た。
どこか憐みの混じったような蛮の視線。
その視線に刹那のこめかみがビキビキ来ている。

「…何か私に言いたいことでも?」

「いや別に？　７１ｃｍでも中学生なら普通のレベルじゃね？」
「な、何で、７１ｃｍだって分かって!?」

数値を言い当てられた動揺からか、自分で墓穴を掘る刹那。
どうやら蛮の目測での予想は完全に当たっていたらしい。さすが『自称・乳を極めた男』の二つ名は伊達ではない。
蛮は刹那の反応にケラケラと笑いながら言った。

「ククッ、その反応だと本当に当たってたみてえだな？　ただの目測からの予想だったんだが」

自分で墓穴を掘ったことに気付いた刹那は顔を真っ赤にして怒鳴った。

「こ、このっ、無礼者っ!!」

そうして、刹那はプンスカとそっぽを向いてしまった。
蛮と刹那以外のメンバーは、そんな二人を「やれやれ」といった顔をして見ている。

「あ～あ…、また蛮ちゃん、女の子、怒らせちゃったよ…」
「全く…、女の子の扱いが全然なってないわよ、蛮」

蛮のセクハラ発言に溜め息を漏らすマリーアと銀次。
もっともこのくらいのセクハラ発言なら、実のところまだマシな方だと言える。本気のセクハラであるならば、この男、絶対に揉んでいるはずだからだ。
もしかしたら、相手が中学生ということもあって多少は遠慮しているのかもしれない。

「おいおい、そんな怒んなよ。揉んだりしないだけマシだろ？」

「し、知りません！」

そっぽを向いたまま一人でずんずんと進んでいく刹那。
そして、そんな刹那の様子を見ていた真名が「やれやれ」といった感じの顔をして口を出した。

「美堂さん。あまり刹那をいじめないでくれないかい？　彼女は堅物というか、真面目過ぎて、余り冗談が通じない性質でね」
「あ～、確かにそんな感じだな」
「うん、何となくだけど、刹那ちゃんからは十兵衛と同じにおいを感じるよ」

真名の言葉に蛮と銀次は納得したという感じの反応を返す。
何というかこの少女は、蛮と銀次の知り合いである筧十兵衛と性格的に非常に似ている気がする。

「へえ？　十兵衛って人も刹那みたいな堅物なのかい？」
「ああ、ありゃあ堅物中の堅物だぜ。サムライみたいな性格っつーか、生まれる時代を間違ったとしか思えねえ奴だからな」
「でも、最近は結構はっちゃけて、寒いギャグを飛ばしまくるキャラになっちゃってるんだけどね～」

話しながら蛮と銀次はかつての十兵衛のことを思い出していた。
蛮と銀次が知る十兵衛は、非常に生真面目な性格で、自分の信念に殉ずる事が出来る侍であった。
そして、ＭＡＫＵＢＥＸに「冗談が通じない」と言われた事を切っ掛けに、現在はギャグの修行中である。しかしながら、そのギャグセンスは悲しいほどに欠けており、かつての『無限城鬼ごっこ』の際にダジャレを披露した時など、あまりの寒さに蛮、花月、雨流をも凍らせたくらいである。
蛮と銀次の語る十兵衛の話を聞いた真名はクスリと小さく笑う。

「クスッ、随分と愉快な友人を持ってるみたいじゃないか？」
「あの寒いギャグに付き合わされるこっちにしてみりゃ堪ったもんじゃねえけどな」
「あら、そう？　私は結構好きよ。不器用で可愛いじゃない」

そうした感じで、歩きながら仲良さげに雑談を続ける刹那以外のメンバー。
そんな雰囲気に少しバツが悪くなったのか刹那が怒鳴った。

「龍宮！　そんな不審者と馴れ合うのは控えろ！」
「落ち着けよ、刹那。どちらにせよ今夜の警備はこの人達と一緒だ。だったら、お互いのことを知っておくのも悪くはない」
「くっ！　だが！」
「もちろん警戒は必要だろうさ。だが、余り根を詰め過ぎても問題だ。そんな状態で普段の力を出し切れるのか、刹那？」

そう言って真名は刹那の方を見た。
真面目な性格なのは結構だが、真面目にやり過ぎて潰れてしまっては意味が無い。
自分の感情をコントロールし、常に１００％の力を発揮できる者が本当のプロフェッショナルだ。
「それに私達はプロだ。それが任務の内であるのなら、組む相手は選ばない。そして、与えられた任務は完璧に遂行する」

違うか？　と、真名は視線で訊ねた。
真名に言われて刹那も少しは頭が冷えたらしく、少し苦々しげに呟く。

「……わかっている」

またそっぽを向かれてしまった。
そんな刹那の様子に真名は「やれやれ」といった感じに肩を竦めて見せる。

「つか、テメェ、本当に中学生か？　プロ意識の高さといい、乳のデカさといい、明らかに中学生のレベルじゃねえよ」
「そうだねー。下手したらオレらよりずっと大人に見えるよ」

蛮と銀次は率直な感想を漏らす。

「フフッ、褒め言葉と受け取っておくよ。胸のデカさ云々のセクハラ発言は余計だけどね」
「いや、乳のデカさは重要だぜ？　ちなみにテメェのは８８．９ｃｍ。どうよ。当たってるか？」
「フッ、黙秘権を行使させてもらうよ」

蛮のセクハラ発言にも余裕の対応。
一体どんな生き方をすれば、こんな大人びた中学生が出来上がるのやら。
ちなみに蛮の８８．９cmという目測はドンピシャで当たっており、０．１cm単位で大きさを見切られた真名の内心は外面とは裏腹にかなり動揺していたらしい。

（何て奴だ…。ここまで完璧に見抜くなんて…）

内心で動揺しまくる真名。
学園長はこの三人は学園の敵にはならないと判断したらしいが、少なくともこの男は女の敵である気がする。
かくして刹那と真名の脳内には、蛮＝セクハラ男という図式が完璧に出来上がってしまったのだった。

第五話『奪還屋、開業②』

刹那と真名の二人に連れられて学園の敷地を歩く我らが奪還屋メンバー。

適当に話しながらしばらく歩いていたが、目的地に到着するまでの間、刹那が物凄い冷たい視線で蛮のことを睨みつけていたのが印象的だった。

もっとも蛮にとって、他人からの恨みを買うなどということは半ば日常のことであり、蛮自身は特に気にしていない様子だったが。

「さて、それじゃあ早速、今夜の警備任務の説明をさせてもらうよ」

そうこうしている内に目的地点に到着し、真名は懐から地図を取り出した。

「今の地点がこの地図のここ。そして、私たちの警備範囲はこの地点を中心にしてここからここまでの範囲になる。この範囲内に現れた敵を残らず殲滅するだけの簡単なお仕事だ。以上、何か質問はあるかい？」

余りにもザックリとした真名の説明。

下手に長ったらしい説明をされるよりは余程良いが、余りにも簡潔すぎる。

当然ながら幾つかの疑問が出てくる。

「学園への侵入者とか襲撃者ってのは、そんなに頻繁に来るのか？」

「いや、本当に襲撃があるのはせいぜい週に1回といった所かな。それにしたって大抵の場合はこちらの流した囮情報に引っ掛かって襲撃を仕掛けてくる間抜けな輩が殆どだよ。だから、襲撃があるような時はこちらは最初からその情報を掴んでることが多いんだ。こちらにしてみれば、まさに『飛んで火に入る夏の虫』な訳だよ」

真名は意地の悪そうな笑みを浮かべて言った。
どうも真名の話を聞く限り、麻帆良学園に侵入しようとする輩は囮情報に引っ掛かって無謀な襲撃を仕掛けてくる連中が大部分らしい。
もっとも、学園側が流した囮情報とは無関係に侵入・襲撃を仕掛けてくるような連中も全くのゼロではないため普段からの警備役を配置しておくことは必須であるようだが。
ちなみに真名と刹那の二人が警備の担当となるのは月曜日と木曜日らしい。

「ふーん、それじゃあ今夜はどこのどいつが襲撃してくるかは分かってるのか？」
「今回の場合は『飛んで火に入る夏の虫』のパターンだよ。うちの情報部が『関西呪術協会』に所属している術師の何人かが今夜の襲撃を企てているという情報を掴んでいる」
「呪術協会ですって？」

真名の話に出てきた呪術協会という単語にマリーアが反応した。
かつての無限城世界においての彼女は呪術師と敵対する立場だったっただけにその言葉に反応するのも無理はない。
そして、そんなマリーアに真名が解説を入れてくれた。

「陰陽術とかの東洋魔術系の術師や退魔師なんかが所属している組織さ。元々は日本という国を古くから霊的に守護してきた秘密機関だったらしい。
そして、私たちの所属する『関東魔法協会』は明治時代初期に西洋文化の流入の時期に西洋魔法使いによって作られた組織だ。つまり、向こうにしてみれば余所者の西洋魔法使いが幅を利かせている状況な訳だよ」

どうやら彼女の話を聞く限り、『関西呪術協会』との関係は余り良く

ないらしい。
確かに後からやって来た余所者がデカイ顔をしていたのでは「余所者が調子のんな（#。Д。）ゴルァ！」という気分にもなるだろう。
しかし、両者の仲が悪いのは、それ以外にも色々な理由がある気がする。対立する組織同士の争いとは基本的に縄張り争いであり、縄張り争いである以上は各組織の勢力圏の境界域で発生するのが普通だからだ。
単純な縄張り争いというには関西と関東では地理的に距離が離れすぎており、いきなり敵の本拠地に殴り込みを仕掛けて来るのは不自然だ。

「っていうか、わざわざこっちの本拠地に直接殴り込みを仕掛けて来るってのは、仲が悪いを通り越して、普通に戦争状態なんじゃ…？」

当然ながら銀次が突っ込みを入れる。
客観的に考えるのなら両者の組織は戦争状態にあるとしか思えない。
しかしながら、この次に刹那の口から出た言葉は、彼らにとって信じられないものだった。

「いえ、仲が悪いのは末端の構成員だけで、別にトップ同士は悪くないんですよ？　関西呪術協会の長である詠春様は学園長の婿養子ですし…」
「は…？」

刹那の言葉に思わず固まる蛮と銀次。
マリーアですら余りにも予想外な刹那の言葉に唖然としている。
刹那の話を聞いた三人は一瞬茫然としていたが、いち早く落ち着きを取り戻した蛮が訊ねた。

「つか、それって殆ど傀儡組織になってるんじゃねえの？」

「え？」

その質問に一瞬キョトンとした顔を浮かべて、間抜けな声を上げてしまう刹那。

蛮としては当然のことを指摘しただけのつもりだったのだが、どうやら彼女にとっては余り深く考えたことのない疑問であったらしい。

だが、今のこの状況を客観的に見た場合、正直、傀儡と思われても無理はない。

「だって、『関西呪術協会』の会長は、あの爺さんの婿養子なんだろ？

普通に考えたら義父には頭が上がらねえ気がするんだが…」

実際に『関東魔法協会』が『関西呪術協会』をどのように扱っているかは蛮達は知らない。

だが、もしも下部組織あるいは傀儡組織として扱っていたとするなら、『関西呪術協会』の連中が不満を持つのも無理はない気がする。

下手をすれば協会長の暗殺やクーデター程度のことを企んでる奴が居たとしても不思議ではない。…というか、実際にこちらの本拠地に殴り込みを仕掛けてくる奴が居る時点で、すでに決定的である。

そもそもトップ同士の仲が良いのに組織の下っ端が殴り込みに来ているということは、向こうの組織は下っ端が暴走するのをトップが全く抑えられていないということに他ならない。

ひょっとすると、向こうの『関西呪術協会』の組織内部は保守派と過激派で内部分裂に近い状態なのかもしれない。

蛮がそのことを指摘すると、真名は少し考えるように間をあけた後、刹那に話を振った。

「ふむ…、その辺りの政治的な事情はどうなんだ、刹那？　少し前まで関西呪術協会に所属していたお前なら、その辺の事情にも詳しいんじゃないのか？」

「え？　す、すまん、龍宮。私はそういう政治的な話には疎くて……」

刹那も『関西呪術協会』の術師が、『関東魔法協会』との関係を巡って融和派や反対派などのいくつかの派閥に分かれていることは何となく知ってはいた。

だが、協会の中でのそうした派閥がどのような勢力関係にあるのか、刹那には全く把握出来ていなかった。京都で暮らしていた時ですらそうだったのだから、京都から離れた今となっては各派閥の現状の勢力関係など猶更把握できるわけがない。

そうした刹那の反応をみた蛮は、小さく溜め息を吐くと少し呆れたように言った。

「なんつーか、向こうの組織はこっち以上にキナ臭いにおいがするな…。向こうの組織の会長はいつ暗殺されても不思議じゃねえんじゃねえか？」

「状況からの推察だけだと、その可能性は高いわね。どちらにせよ末端の暴走を抑えられていない時点で、近衛詠春という人は組織のリーダーとしては失格でしょうけどね」

蛮の意見にマリーアが付け加える。

組織のリーダーとしては失格などという散々な評価を下される近衛詠春。

だが、仮にも組織のリーダーという立場にいる以上、組織内部の不満に対して対処するのは義務である。

もしかしたら詠春自身もそれなりに努力はしているのかもしれないが、結果を出せない以上は無能という評価を下されても仕方ない。

刹那としては自分のことを拾ってくれた恩人でもある近衛詠春のことを余り悪く言われるのは少し抵抗があったようだが、彼らの分析は極めて的確であり刹那に反論できる余地はまるで無かった。

詠春自身、かつての大戦時の英雄であり、そこらの刺客に遅れを取ることはそうそう無いと思われるが、はっきり「いつ暗殺されても不思議じゃない」と明確に言葉にされると刹那といえど多少は不安に思

わずにいられなかった。

（今度、手紙でも送ってみよう…）

心の中でそう決める刹那。

そして、そうした刹那の不安を読み取ったのか、不意に銀次が話し掛ける。

「何か気になる事でもあるの？　刹那ちゃん」

「え？」

「だって少し不安そうな顔してたからさ」

「い、いえ…」

刹那は表情を取り繕ろうとするが、どう見ても取り繕えていない。

銀次も蛮も、敢えて深く突っ込むような真似はしなかったが、このまま無視するのも具合が悪い。

だから、蛮はまるで挑発するように刹那に言った。

「おい、貧乳サムライ娘。何が心配なのか知らねえが、テメェの仕事はきっちりしろよ？」

「あ、貴方に言われるまでもありませんよ！」

貧乳などと挑発するように言われ、思わず激昂して怒鳴る刹那。

そうして、彼女はまたしてもプンスカとそっぽを向いてしまった。

（蛮ちゃんなりの発破の掛け方なんだろうけど、もう少しどうにかなんないのかな、これ…）

（らしいんだけど、ちょっと不器用すぎるわね、やっぱり…）

おそらく蛮なりの発破の掛け方なのだろうが、もう少し他の言いようは無いのだろうか。殆どいつもの事とはいえ、マリーアと銀次は

「やれやれ」と苦笑い気味に肩を竦めた。
しかしながら、蛮の挑発のような発破はそれなりに効果はあったようである。
（こ、こんなセクハラ男に無様な姿を晒して堪るか！）
どうやら蛮の言動は刹那のプライドを微妙に変な方向に刺激したらしい。
その後、事前の打ち合わせを済ませ、その場は一時解散となるのだが、夜の警備任務が始まるまでの数時間、刹那は自らの愛刀『夕凪』の手入れをやけに念入りに行っていたのだった。

◆

そして、時間は移り、深夜の麻帆良学園。
事前の打ち合わせ通り、真名と刹那の二人と指定の場所に合流する奪還屋メンバー。
「さて、今夜はよろしく頼むよ？」
「ああ、俺ら無敵の奪還屋『ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ』に任せときな」
そう言って蛮は不敵に笑ってみせる。
どんな相手だろうが負けはしない。どんな修羅場だろうと切り抜けられる。そんな絶対の自信が感じられる笑みだった。
そして、彼らが合流して間もなく、何かの気配に気付いた銀次が声を掛けた。
「そろそろ来たみたいだよ、蛮ちゃん。何かいきなり気配が増えた」
「どの辺りか分かるか？」

「えーと、あっちの森の方かな。何か変なざわざわした気配を感じる」

そう言って、銀次はおよそ５００ｍ先にある森を指差した。

その言葉に刹那、真名は訝しげな反応を見せる。真名や刹那にはそんな気配など欠片も感じ取れない。

しかし、この次に真名の通信機に入ってきた情報に彼女たちは揃って驚くことになる。学園都市の結界の感知機能に何者かが引っ掛かったという情報と、その場所情報が通信機から伝えられたが、その場所はまさに銀次が言った場所と見事に一致していたからだ。

（まさか、この遠距離で…!?）

真名と刹那は驚いた目で銀次を見る。

流石にこの距離から気配を殺しているような相手の存在を探るのは真名と刹那には無理だ。…というより、蛮とマリーアにすら無理である。

生体の発する微弱な電磁場を感知することが出来る銀次だからこそ可能な感知であり、その感知能力はもはや生体レーダーの域に到達していた。

「よし、それじゃ行くか、銀次」

「うん!」

蛮と銀次の二人はお互いに視線を交わし頷き合う。

そして、蛮は肩越しに振り返ると、後ろに居る他のメンバーに声を掛けた。

「そんじゃ俺と銀次は先に行くぜ?」

「ええ、先に行ってなさい。術者の方は私と真名ちゃんで担当するわ」

そう言い終わると同時、蛮と銀次の二人は全く同時に地を蹴った。

数瞬ほど遅れて刹那が走り出すが、全く追いつけていない。その距離はあっという間に広がっていく。

（速いっ……！）

瞬動を使わない単純な足の速さの比較では、二人とも明らかに刹那を上回っていた。

つまり、単純な身体能力では二人とも完全に刹那以上ということだ。１００ｍを５秒以下の速度で走り抜け、あっという間に目的地の森へと到着する。

そして、そこには明らかに人間とは違う異形の怪物たちが蠢いていた。呪符による召喚された妖怪の群れ。ざっと見渡しただけでも数十から百体の妖怪がひしめき合っており、その様はまさに『百鬼夜行』という言葉が相応しい。

「へえ…、これがこっちの世界の『鬼』って奴か」

「ってことは、『鬼退治』だね！　猿犬雉は居ないけど！」

蛮と銀次の二人はそんな妖怪達がひしめく敵地のど真ん中に飛び込んだ。あまつさえ鬼退治などと余裕の軽口を叩きながらである。

突然に現れた二人の男に周囲の妖怪達ですらが、唖然とした顔をしている。

「あ～ん!?　何だテメェら!?」

当然ながらすぐに周りを取り囲まれる蛮と銀次。

だが、そんな普通に考えたら絶対絶命のピンチの状況であろうと二人は余裕な態度を崩さない。

そんな自分達を雑魚と侮るかのような態度に妖怪達はプライドを刺激されたのか、一人の妖怪が近い方に居た銀次に襲い掛かる。

「死にさらせや、糞ガキが!!」

しかし、その攻撃はかすりもしなかった。
はっきり言って、この程度の斬撃など赤屍に比べたら本当に止まって見えた。
銀次は大上段から打ち下ろされる大太刀を左足を引いて半身になるだけで避けると、そのまま相手の鳩尾部分に右手で軽く触れる。
たったそれだけに見えたのに相手の身体は動かなくなり、そのまま地面に崩れ落ちた。

「あ、良かった。俺の能力(チカラ)もちゃんと効くみたいだよ、蛮ちゃん!」
「そうみてえだな。そんで倒されるとこうやって黒い煙になって消える訳か…」

黒い煙となって消えて行く妖怪。
その様子を見た鬼達の間に戦慄と動揺が走る。
無論、言うまでもなく銀次の能力である電撃のダメージによる物だが、必要最低限の動きと威力で撃たれたそれは傍目にはただ触れただけで倒したようにしか見えなかったからだ。

「な、なんだ小僧!? 今、何をした!?」
「さてな? テメェで考えな」

そう言って挑発するような笑みを浮かべる蛮。
そんな蛮に向かって太刀が振るわれるが、蛮はそれを真っ向から受け止めた。
もはや真剣白刃取りといったレベルではない。蛮は振り下ろされた刃を横合いから片手で掴み取って止めていた。
掴まれた刀はまるで万力で固定されているかのようにビクリとも動かない。

「悪いが、人間じゃねえ化け物が相手だってんなら、俺も久しぶりに遠慮しねえぜ」

バキンと音を立てて、まるで割り箸か何かのようにへし折られる刀。

妖怪は驚愕に目を見開くが、次の瞬間には全てが終わっていた。

「なッ!?」

次の瞬間、蛮は既に相手の懐に飛び込んでいた。

そして、蛮は指を立てた掌底――――虎爪と呼ばれる拳の形で相手の胸に一撃を叩き込むと、そのまま指を握力でめり込ませて相手の心臓を抉り取っていた。

――――ドチャリ

心臓の部分を丸ごと抉り取られたそれは、醜い音を音を立てて地面に崩れ落ちた。

一目見ただけで明らかに即死と分かるダメージ。しかし、心臓をぶち抜かれた鬼は自分の身に何が起こったかすら正確には把握できずに絶命したことだろう。今の蛮の動きはそれほどまでに速かった。

蛮は黒い煙になって消えていく心臓を無造作に投げ捨てると、挑発するように言った。

「どうしたよ?　鬼ってのはそんなもんか?」

まるで何でも無いことのように心臓を抉り抜いてのけた蛮に怯んだ様子を見せる妖怪達。

この時の蛮は、もしかしたら鬼や悪魔以上の残酷な笑みを浮かべていたかもしれない。

「それとも――――」

蛮はいったん言葉を切った。

そして、一呼吸置くと、ニヤリと不敵な笑みを浮かべて嘲る様に言った。

「――――怖いのか？」

ある意味、これ以上に無いほど挑発的な言葉だっただろう。

人間に恐怖を与える存在であるはずの妖怪が、人間に恐怖するなどあってはならない。

そんな彼らの矜持を逆撫でする言葉であり、彼らの怒りの感情は一瞬で沸騰する。

「こ、このクソ砂利どもがぁ!!」

「野郎、ぶっ殺してやらぁ!!」

「生かして帰すなぁぁぁ！」

蛮と銀次の二人に一斉に襲い掛かる妖怪達。

しかし、そんな百鬼夜行の群れも蛮と銀次の前にはただの有象無象でしかなかった。実際、このくらいの相手なら無限城ベルトラインでの怪物たちの方が遥かに強い。

圧倒的なスピードとパワーを活かした荒々しい動きで、オーバーキルとも言えるような肉体破壊を伴うダメージで倒していく蛮。そして、相手の攻撃を最小限の動きで見切り、肉体破壊を伴わない最小限の電撃のダメージで倒していく銀次。

見た目に対照的な戦い方の両者だがその強さはどちらも圧倒的であり、襲い掛かる妖怪達を片っ端からなぎ倒して行く。

そうして既に４０体近くの妖怪が倒されたところで、ようやく刹那が遅れて現場に到着した。

「神鳴流奥義『斬岩剣』ッッ!!」

到着するなり繰り出される神鳴流の奥義。
その斬撃で数体の妖怪がまとめて真っ二つに両断され、さらに踏み込んで、もう1体が返した刃で切り払われた。
そして、蛮と銀次の二人は到着した刹那を背中合わせに、お互いの背中をかばい合う体勢を取った。

「無理はしなくて良いからね、刹那ちゃん!」
「もう少しゆっくり来ても良かったんだぜ?」
「フン…、余所者だけに任せる訳には行きませんよ」

お互いに視線すら合わせず、背中越しに不敵に言い合う。
油断なく構える刹那に蛮は言った。

「ヘッ、良い心掛けだ。それなら俺と銀次がフォローに回ってやるから、テメェは背中を気にせずに好きに戦いな」
「言われなくとも!」

そう言って、手近な敵に向かって踏み込む刹那。
蛮と銀次の二人もそんな刹那をフォローする形で同時に踏み込む。
妖怪達がひしめく敵陣のど真ん中だというのに笑みすら浮かべて戦い続ける蛮と銀次。
しかし、既に50体以上は倒しているはずなのに、全体の敵の数はどういう訳か減っていなかった。

「てか、周りの敵の数が全然減ってないんだけど…」
「やっぱコイツらを召喚してる術者を倒さねえとキリがねえみたいだな。まあ、そっちは事前の打ち合わせ通り、マリーア達に任せようぜ。あの二人なら心配いらねえよ」

刹那が討ち漏らした敵の一匹の頭を『蛇咬（スネークバイト）』で捻じ切る片手間に蛮が言う。
そして、まさにちょうどそのタイミングで、マリーアと真名の二人は召喚者である術者たちを始末するべく動き出そうとしているところだった。

◆

蛮達が前衛として派手に戦っているちょうどその頃、
マリーアと真名の二人は少し離れた場所で、その戦いの様子を窺っていた。

（スゴイな…）

遠目で見ていた真名は蛮と銀次の二人をそう評した。
単独での戦闘力は間違いなく一流以上。しかも、あんな敵陣のど真ん中で混戦を繰り広げているのに、お互いの動きを阻害することは全く無い。
それどころか絶妙な位置取りと誘導で、妖怪達の同士討ちを誘発するという離れ業すらやってのけている。さらに二人とも常に刹那をフォローできるような位置取りを気を付けてくれていることが遠目に見ている真名には分かった。
そうして、少しの間、彼らの戦いに見入っていた真名だったが、マリーアに話し掛けられて我に返る。

「どうかしら？　あの二人は」
「間違いなく一流の動きのそれですよ。彼らが前衛で戦ってくれるのなら私としては頼もしい限りです」

「それじゃ狙撃の準備は大丈夫？」
「ええ、いつでも行けます」
「フフッ、ならこっちも隠れてる術者を片っ端から潰して行きましょうか」

手持ちのスナイパーライフルを構え、狙撃の準備に入る真名。
普段なら狙撃手と観測手の二つの役割を自分一人で担っているところだが、今はマリーアが観測手の役割を分担してくれていた。
すでにマリーアによって術者の居場所は割り出された後であり、後は一人ずつ確実に始末していくだけだ。
しかし、僅か2分で隠れている術者全員の正確な居場所を割り出すとは一体どんな手品を使ったのか。
真名がそのことを尋ねるとマリーアは意外にもあっさりと教えてくれた。

「あら、別に大した事はしてないわ。ただの『ダウジング』よ」

そう言って、彼女は胸元のペンダントを取り出した。
どうやら彼女はペンダントを振り子に使ってダウジングで居場所を割り出したらしい。確かに、それ自体は別に珍しい技法ではない。
だが、彼女の場合、割り出しまでに掛かった時間が余りにも短い。時間制限さえ無ければ麻帆良学園の魔法使いにも出来る者は居るだろうが、わずか2分という時間制限付きとなると難易度は桁外れに跳ね上がる。
そんな離れ業を易々とやってのけるマリーアのレベルも一流以上の水準にあることは明らかだった。

「命中（ヒット）」

撃った弾丸が命中したことを確認する。
しかし、どうやら今のでこちらの場所が敵側にばれたようだ。

「それじゃポイントを変えるわよ」

そうして、転移術式を発動させるマリーア。

前衛に出ている三人組が敵の注意を引き付け、絶えず最適な狙撃ポイントに移動しながら、召喚者である術者に一方的な狙撃を加える。

まさに事前の打ち合わせ通りの流れであり、この調子で行けば他の魔法教師や魔法生徒の増援なども必要無いだろう。

（まさか、こうも楽な仕事になるとはね…）

淡々と狙撃をこなしながらも真名は、少し信じられない気持ちでいた。

今回の襲撃は、普段であれば、確実に増援を要請しなければならないレベルの規模だった筈だ。

しかし、実際には増援が必要ないどころか、わずか１０分で全員の敵が制圧・捕縛されることになる。

そして、真名と刹那の報告を受けた学園長は、奪還屋メンバー三人の働きを認めざるを得ず、蛮と銀次の二人に『奪還屋』を開業することを認めることになったのだった。

第六話『カードは拾った　ｂｙ　長谷川千雨』

――こっちの世界に飛ばされてから2週間程度の時間が経った。

その頃にもなると麻帆良での生活にもある程度慣れてくるもので、蛮と銀次、マリーアの三人はかなり自由かつ快適に暮らしていた。

マリーアは『占い屋』の露店を開くようになり、蛮と銀次の二人は『奪還屋』として学園側の頼みごとを解決するなどの仕事をしながら暮らしている。

しかし、それと同時に今の彼ら二人は、何故か麻帆良の不良グループのまとめ役として君臨していた。

「おい、銀次」
「何？　蛮ちゃん」
「一体何なんだろうな、この状況？」
「オレに訊かないでよ…」

呆れたように溜め息を吐く銀次。

切っ掛けは1週間前に路上で迷惑行為を働いているチンピラを蛮がぶちのめした事に始まる。

そうしたら、チンピラの仲間連中が次から次へと敵討ちに現れ、そいつらを片っ端からぶちのめしている内に不良グループのまとめ役などという立場に収まってしまった。

「チィース！お疲れ様です、蛮の兄貴！」
「銀次さんもお疲れ様です！」

街中を歩いているとこんな感じで挨拶されるようなことも多い。

蛮が名目上のトップとして君臨している不良グループの名前は『Ｅｖｉｌ　Ｅｙｅｓ』。

ある意味、これ以上無い程に蛮にぴったりなグループ名であるが、

そのグループは既に麻帆良において最大勢力を誇る規模になっていた。

「ったく、こういう組織のリーダーだとかいうのは俺の柄じゃねえんだがなぁ…。だいたい、こういうのは『ＶＯＬＴＳ』のリーダーだったオメェの役割だろ？」

「いや～、昔の『雷帝』だった頃のオレならともかく、正直、今のオレじゃとてもああいう組織のリーダーは務まらないと思うよ？」

蛮に言われた銀次は少し苦笑い気味に答える。

かつての『ＶＯＬＴＳ』時代、天野銀次という少年を中心にして多くの仲間が集まった。

別に銀次が自分から仲間を集めた訳ではない。いつの間にかみんなが集まってくれていた。

だが、それを可能としたのは『雷帝』という絶対の強さを持つカリスマが居たからだ。かつての仲間達は今でも銀次のことを慕ってくれるが、それはあくまで対等の友達・友人としてだ。

だから、『雷帝』でなくなった自分ではかつてと同じように組織をまとめることは出来ないだろうと銀次は自覚していた。

実際、人の上に立つ器としては、今の銀次よりも蛮の方がよほど優れているだろう。

「しかし、学園長の爺さんもわざわざ俺に不良グループのリーダーを任せたままにするか、普通？　一応、俺らは部外者だぞ？」

「あー…、それは確かに少し思ったけど、あの爺さんの言い分もそれなりに筋が通ってるんだよねぇ…」

今の蛮と銀次は学園長との相談を終えた帰りである。

相談の内容は蛮と銀次がまとめている不良グループの運営方針についてだった。

グループを解散させるにせよ存続させるにせよ、学園都市に居候し

ている以上一応話は通しておいた方が良いだろうという判断で、蛮と銀次がまとめているグループの運営方針について相談しに行ったのだが、なんと学園長は不良グループの運営については丸投げしたのだ。

そして、その時の学園長の言い分はこうだった。

「すまんが、しばらくは君がリーダーとしてグループをまとめておいてくれんか？　あの手の不良グループは潰しても後から新しいグループが出来るだけじゃからの」

実際、麻帆良の魔法先生の何人かがその手のグループを物理的に壊滅させたことがあるのだが、逆にチンピラ共の統制がとれなくなって、却って治安が悪化したことがあるらしい。

下手を打ってそういう事態を招くよりは、強力な1個のグループとしてまとめ上げておいた方が結果的には治安が保てるという判断だった。

「俺らが傘下のチンピラ連中を利用して、あくどい事をするって可能性は考えねえのか？」

「いや、君らはそんな事はせんよ。本当にそのつもりなら、こうやって報告に来ること自体があり得ないことじゃろうからの。君ら二人ならグループのメンバーに一般人に過度な迷惑をかけるような真似はさせないじゃろ？」

まだ2週間くらいの付き合いでしかないが、すでに学園長は蛮と銀次の大体の性格を見切っていた。

もちろん蛮達に警戒の目を向ける者はまだ多く存在するが、既にある程度の気を許しているような者も幾人か居る。

学園長はどちらかと言えば後者の方で、蛮たちが『使える』ということが判明した後は、面倒事のいくつかを任せることも多くなっていた。

学園長室での話を思い出して蛮は少し不機嫌そうに溜め息を吐く。
「何つーか、体良く利用されてる気がするんだがな…」
「それはある程度は仕方ないんじゃない？　所詮、こっちは居候な訳だし…」

適当に会話を続けながら街の中を歩く蛮と銀次。
そして、しばらく歩いているとマリーアが占いをしている露店にまで辿り着いた。
どうやらそれなりに繁盛しているようで、彼女が露店を開いている世界樹前広場の一角には中学生から高校生くらいの女の子たちで賑わっている。
別に広告を出した訳でも無かったのだが、マリーアという占い屋の存在は口コミで広まり、今ではかなりの人気店となっていた。その人気の理由は単純に『当たる』というだけでなく、手品のスキルなどの演出を織り交ぜたパフォーマンス的な要因も大きい。

「か、格好いい…」

客の誰かが思わず感嘆の声を漏らす。
マリーアの占いは基本的にタロットカード占いだ。
だが、彼女の見せるカード捌きはそれ自体が芸術と言っても良いほどに洗練されている。
集まった女の子の中には占いに来たのではなく、彼女のカード捌きを見物するために来ている者も多いようだ。
「へぇー、本当に凄いわねぇ」
「な？　ウチの言った通りやろ、明日菜？」

実際、近衛木乃香という少女などはほぼ毎日遊びに来ていて、すっかり蛮や銀次とも顔見知りである。

どうやら今日の彼女は友達を一緒に連れて来たらしく、眼の色が左右で違うツインテールの女の子を隣りに連れている。
蛮と銀次の存在に気付いた木乃香は、パアッと顔を明るくさせた。

「あ、蛮さんに銀ちゃんや！」
「よう、また来たんだな」
「こんにちは、木乃香ちゃん！　えっと…、こっちの子は？」

隣りのツインテールの少女について訊ねる銀次。

「ウチのクラスメートや」
「はじめまして、神楽坂明日菜です」

明日菜と名乗った少女は頭を下げて挨拶する。
だが、木乃香が連れて来た明日菜を見た蛮と銀次は、何か言葉に出来ない妙な違和感を感じてしまう。
何というか、間久部博士やマリーア、エヴァンジェリンといった見た目と実年齢が一致していない者と同じような気配を感じる。

（あれ？）
（コイツ…）

一瞬、違和感を感じた蛮と銀次の二人だが、特に悪意や危機感は感じないためにそれ以上は突っ込むようなことはしなかった。
とりあえず感じた違和感については棚上げし、銀次は人懐こそうな笑みを浮かべて言葉をかける。

「へー、木乃香ちゃんの友達か。うん、君も可愛いね」

可愛いと言われて悪い気はしないのか、少し照れた表情を見せる明日菜。

「えーっと、木乃香、この二人は？　木乃香の知り合いみたいだけど…」
「俺ら二人はマリーアの関係者だよ。ちょっと訳ありでな。少し前から麻帆良で暮らしてるのさ」

そう言って、自己紹介をする蛮と銀次。
パッと見の印象では気の良い兄ちゃんという感じだ。

「ふふふ、こう見えてこの二人はこの辺りの不良グループのトップなんやでー」
「え!?　そんな危ない人なの!?」

木乃香の言葉に驚きの声をあげる明日菜。
そんな連中と交流のある親友のことを心配する明日菜だが、当の木乃香は全く気にしていないようだった。
蛮と銀次の性格を知っている木乃香はそうした心配が要らないことを知っていたからだ。

「おいおい、俺らが不良グループのまとめ役になったのはただの成り行きなんだぜ？」
「そうそう！　それにオレらがトップに居る以上は、グループのメンバーに非道いことは絶対させないし！」

しかし、自分で自分のことを悪人だと言う奴など普通は居ない。
それを考えれば、明日菜が蛮と銀次の二人のことをジト目で睨むのも仕方ないだろう。

「怪しい奴はみんなそう言うのよ！　木乃香、こんな連中と付き合うのは止しなさい！」
「え～？　蛮さんも銀ちゃんも良い人やえ～？」

お前らは親子か？
まるで子供の友達付き合いに口出しする母親とその娘のようなやり取りに思わず苦笑を浮かべる蛮と銀次。
そうして、しばらくは明日菜の説得をのらりくらりと木乃香が躱すというやり取りが続いていたが、いつの間にか仕事を終えたらしいマリーアが話し掛けたことで彼女らのやり取りは中断される。

「あら、また来てくれたのね。木乃香ちゃん」
「あ！　こんにちは、マリーアさん！」

マリーアに元気よく挨拶する木乃香。
占い研究会に所属するほどの占い好きなだけあって木乃香はマリーアに随分と懐いているようだった。
そして、マリーアは微笑みながら明日菜の方を見た。

「貴女は木乃香ちゃんのお友達かしら？」
「え、あ、はい」

マリーアに訊かれた明日菜は思わず間の抜けた返事をしてしまう。
何しろ見た目だけは、同性であっても気後れしてしまいそうになるような美女である。
波うつ豊かな黒髪と褐色の肌、女神のプロポーション。その圧倒的な美貌を間近で見た明日菜は思わず見惚れてしまっていた。

「ふふふ、マリーアさんはウチが知ってる占い師の中で一番凄い人なんや。過去当てなんて百発百中なんやよ」

まるで自分のことを自慢するかのように、木乃香は「えっへん」という感じに笑みを浮かべる。

「今日の仕事は終わりか？」
「ええ、今日の仕事はこれで終わりのつもりだったけど…」
もう一度、明日菜の方に向き直るマリーア。
「ひょっとして、何か占なって欲しいことでもあるのかしら？」
「え？　えっと、実は恋愛運について…」
いかにも年頃の女の子らしい占いの内容。
しかし、もう営業時間の締め切りは過ぎている以上、ここで明日菜の占いだけを引き受けるのはちょっと不公平かもしれない。
「良いじゃねえか。お得意様の木乃香ちゃんの友達なんだ。サービスで占なってやれよ」
マリーアが少し迷っていると、蛮がそう言った。
そして、マリーアが蛮の方を見ると、何故か蛮はサングラスを外す。
そうして、二人の目が合うことで、両者の間に完璧なコミュニケーションが成立する。
こういう時、蛮の『邪眼』は本当に便利だ。現実時間で最大1分間の幻影を見せる蛮の特殊能力だが、幻術の体感時間そのものは蛮の任意で操作できるため、他者にバレない情報伝達の手段としても活用できる。情報伝達の手段として使うのなら、邪眼の持続時間は現実時間で1秒で足りる。その1秒の体感時間を何倍にも引き延ばすことで、その気になればいくらでも情報を伝えることが可能だからだ。
（…なるほどね）
蛮の言いたいことを全て理解したマリーアは、明日菜と木乃香の方に向き直って言った。

「うーん、木乃香ちゃんの友達なら仕方ないわね。時間外だけど特別に占なってあげるわ」
「やった！　流石、マリーアさん、話が分かる！」

嬉しさにはしゃぐ木乃香。
そんな木乃香の様子に少し苦笑しながら、マリーアは占いの準備をする。
マリーアは携帯用のテーブルを用意すると、その上に裏向きのタロットカードを並べた。

「じゃあ、このカードを裏向きのままかき混ぜて貰える？」
「は、はい！」

タロットカードの占いの方法は千差万別。
だが、基本的にはシャッフルしたカードをスプレッドと呼ばれる特定の配置でカードを並べ、その各配置にあるカードの意味を解釈していくという形になる。
今回、マリーアが使用するスプレッドは『ヘキサグラム・スプレッド』と呼ばれるタロット占いの中でもオーソドックスな方法である。
そして、配置された7枚のカードはそれぞれ以下の要素を暗示している。

・1枚目：　過去。
・2枚目：　現在。
・3枚目：　未来。
・4枚目：　周囲の状況や環境。
・5枚目：　願望。無意識の望み。
・6枚目：　問題解決のための手段。とるべき行動。
・7枚目：　最終結果。問題の核心。

だが、『占い』というのは科学的に分析するならば、ホットリーディング、コールドリーディング、マルチプルアウトと確証バイアスなどといったテクニックを組み合わせたものと考えられている。

つまり、誰にでも該当するようなあいまいで一般的な性格をあらわす記述を、自分だけに当てはまる正確なものだと捉えてしまう人間の心理を利用したもので、このような現象を心理学では『バーナム効果』と呼んでいる。

特にタロット占いなどはその傾向が顕著で、はっきり言ってどうにでも解釈できてしまうのである。相手の表情や仕草などの反応を観察しながら、相手が無意識の内に望んでいる答えや心の中に隠していた問題を炙り出していく。つまり、ある意味、占いとはカウンセリングの一種なのである。

しかし、それは世間一般の占い師の場合の話であって、本物の魔術師であるマリーアの場合は話が異なる。

（これは…）

カードを並べ終わったマリーアは少し考えていたが、やがて真剣な顔をして明日菜に話し始めた。

しかし、実際のところ、この時点でマリーアが占なっていたのは恋愛運などではない。実際にはもっと別のことを調べていた。

だから、表向きに明日菜へ告げる恋愛運についての占いの結果は、はっきり言ってしまえばデタラメだ。並べられたカードが持つ意味から、相手に当て嵌まって良そうな解釈を選び出して、あとは話術テクニックでそれっぽく聞こえるようにしているだけだ。

だが、そうしたテクニックに優れた者がやれば、相手に『当たった』と信じ込ませることは極めて容易である。

実際、明日菜もマリーアの巧みな話術にあっという間に引き込まれてしまっていた。

「……さて、最終結果は『太陽』のカードね。意味は、物質的な幸福・幸運な結婚・満足」

「それって良い意味のカードですよね？」

「そうね。貴女の言う通り、一般的には良い意味のカードなんだけど、

恋愛関係では少し注意が必要なカードだわ。このカードが出た時、相手からの好意はどちらかといえば愛よりは友情寄りな場合が多いのよね～」
「そ、それって振られるってことですか？」
「それは分からないわね～。でも、貴女の好きな人――高畑先生と貴女の間には深い縁があるように見えるわよ？」
「え!?　私、好きな相手の名前なんて言ってないですよね!?」

見事に言い当てられたことに驚いた顔をする明日菜。
しかし、実際にはこれも魔術など使っていない。彼女たちが通っている学校が女子校であるという情報。必然的に男性との接触は少なくなるだろうという推測。木乃香の担任が高畑であるという事前情報。
それらの事前情報に加えて、会話の中での相手の仕草、反応などに対する注意深い観察から読み取っただけである。
そして、マリーアは口元に微笑を浮かべながら最後に告げた。

「彼も貴女のことはきっと大切に思ってる。だから、焦らずに相手との絆を大切になさい。その絆を恋人という形に出来るかどうかはこれからの貴女次第よ」
「は、はい！」

角の立たない一般論的なアドバイスを送るマリーア。
だが、そんなありきたりな言葉も、マリーアレベルの美女が言うとまるで至言のように聞こえる。
実際、明日菜は感激してしまっているようだった。

「なあ、マリーアさん達、いつまで麻帆良に居るん？　ウチに占い教えて欲しいんよ」
「うーん、いつまで居るかはちょっと分からないのよね～。でも、ちょっとしたコツなら教えてあげるわ」

そう言って、マリーアは木乃香に連絡先を書いたメモを手渡した。
木乃香はメモを大切にしまうと必ず連絡すると約束する。

「ほな、またね～」

木乃香はニコニコと嬉しそうに明日菜と共に帰っていく。
蛮と銀次、そしてマリーアの三人は、去りゆく二人を微笑ましげな顔で見送った。
そして、明日菜と木乃香の二人の姿が見えなくなったところで、マリーア達の表情が真剣なものに変わる。
蛮は視線を強めて『本当の占い』の結果をマリーアに訊ねた。

「どうだったよ？」
「蛮の予想通りね。あの子もただの中学生じゃないのは間違いないわよ。私の『過去視』の魔術が完全に弾かれたわ。一体どのレベルの魔術まで打ち消せるのかは分からないけど、魔術・魔法を自動的に打ち消す能力を持っていると考えて良いでしょうね」

その結果を聞いた蛮は「やっぱりな」という風に溜め息を吐いた。
この学園には自覚の有る無しに関わらず、異常・異能を持つ能力者――『逸般人』が多すぎる気がする。
そして、蛮は感心と呆れが混じったように呟く。

「しかし、この学園はマジで異常だな…。良くもこれだけの異常な連中を集めたもんだぜ」

ここまで来ると、もはや異常者・異能者の見本市である。
しかし、どういう訳かこの学園都市の連中は、そうした異常を当然のこととして受け入れている。
つまり、そうした異常を不思議に思われないようにするための何ら

かの『からくり』があると考えられる。
そのような『からくり』を学園側が作っていることを非難するようなつもりは蛮には無い。だが、もしも、そうした何らかの『からくり』の効果が無い一般人がこの学園に居たとしたら、その一般人は周囲との軋轢に苦労しそうだ。
（一人や二人はそういう奴が居ても不思議じゃねえ気がするけどな…）
3割くらいの思考で考える蛮。
そして、実際のところ蛮の推測はずばり当たっていたと言えるが、彼らがそのことを知るのはもう少し後になってからだった。

◆

蛮が麻帆良の異常性について考えているちょうどその頃、
（――この学園は異常だ）
長谷川千雨という少女もまた麻帆良学園の異常性について考えていた。より正確に言うならば、子供の頃から毎日そう思っている。
メートル単位で吹っ飛ぶ学生。何故か集まる天才集団。学校に通うロボットを筆頭に女子中学生とは思えない濃い面子。オリンピック選手顔負けの速度で爆走する女子中学生。
（おかしいのはアタシじゃない！　絶対、この学園の方だ！）
そう思っていても、何故か周囲はそれを当然のこととしてと受け入れている。

そんな状況で自分がこの学園の異常さを声高に叫んでも、周囲との軋轢を生むだけだ。
ある意味、諦観にも似た境地に達した千雨は、出来るだけ周囲の人間と関わらないようになった。
ネットアイドルなんて趣味を持ってはいるが、それもあくまでネット上の付き合いだけでオフでのイベントに参加するようなことも絶対しない。
今日だってクラスの女子が占いを話題にして盛り上がっていたようだったが、千雨はそれらに関わることもなく足早に教室を後にした。
そして、その帰り道、千雨が下校途中の横断歩道で赤信号を待っているとき、どこからかヒラヒラと一枚のカードが舞い落ちてきた。

「ん？」

自分の足もとに落ちた一枚のカード。
そのカードを拾い上げた千雨は思わず感嘆の声を漏らした。

「へぇ…」

カードの裏側の面は魔法陣のような幾何学的な模様が刻まれている。
そして、カードの表側の面に描かれた精緻なイラストの美しさに千雨は数瞬、目を奪われた。
カードに描かれているのは雷の幻獣。右手を天に掲げ、荒々しい咆哮をあげる鎧を纏った獣人。そして、その咆哮に呼ばれた落雷が、全身を帯電させている様子が描かれている。
名は体を表すと言うが、まさにそのカードのタイトル通りのイラストであった。

「Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｅｍｐｅｒｏｒ…雷帝か」

そう、千雨が呟いた時だった。
ドクン、と手に持ったカードから心臓のような鼓動を感じたかと思えば、手に持ったカードが眩い光を放った。

「っ!?」

数秒で光は収まり、静寂が戻る。
しかし、その時の千雨は本来と違う『何者か』の人格に乗っ取られた後だった。
千雨（？）は顔を上げ、自分の姿を確認するように見渡して溜め息を吐きながら言った。

「やれやれ…また面倒なことになったな…。まさか、この俺がこんな形でもう一度この世に戻ってくるとは…」

見た目には完全に女性の身でありながら『俺』なんて全く似合わない表現をしたのは、かつて天野銀次という少年に宿っていた別の意思。
かつて無限城世界において『雷帝』と呼ばれた最強の雷使い。文字通り無限のエネルギーを内包し、物理法則すらも無視した圧倒的な攻撃力と回復力を持つ最強クラスの怪物。
呪術王と刺し違えたことで一度はこの世から消滅したはずの怪物は、どういう訳か再びこの世に戻って来ていた。

「このカードが原因か…」

手元のカードに視線を向ける。
自分がこの世に戻って来る切っ掛けになったであろう『神の記述』のカード。
だが、自分という存在を呼び出しただけで全ての力を使い果たした

のか、カードのイラスト部分は真っ白の空白に変わっていた。
白紙になった今のカードからは最早何の力も感じられない。

バチッ！

彼女は電撃で手に持った白紙になったカードに火を点けると道路に向かって放り投げる。
火の点いたカードはものの数秒で灰になって燃え尽きて消えていった。

「……」

灰になって消えていくカードを静かに見つめながら彼女は少し考えていた。
ここが無限城世界とは違う別の世界だということは強制的に眠ってもらった宿主――――長谷川千雨の記憶を読み取ることで容易く雷帝には理解できた。
だが、わざわざ消えたはずの自分が呼び戻された理由が分からない。

「……一体何の目的で俺を呼び戻したんだかな、この世界は」

最後に呟くように言うと、彼女は肉体の主導権を千雨へと譲り渡した。
しかし、雷帝が表に出ていた時の記憶は千雨には無い。千雨の主観では、数秒の間、立ったまま意識を失っていたという感じだろう。

「あ、あれ？」

思わず間の抜けた声を上げてしまう千雨。
周囲をキョロキョロと見回すが、変わったことは何もない。

さっきのカードはいつの間にか無くなっているが、それ以外に何か変わっている事と言えば、横断歩道の信号の色が青に変わっている事くらいだ。

「一体、何だったんだ？　さっきの…」

千雨は首を傾げるが、疑問に答えてくれる者など誰も居ない。
どこか違和感を感じながらも、千雨は再び家に向かって歩き出す。
結局、この日からしばらくの間は何事も起こらなかったため、千雨自身もこの日のことは完全に忘れていた。
しかし、彼女の内に潜んでいた『雷帝』がおおやけになるとき、彼女は自分が『逸般人』への仲間入りを果たしたことを知ることになる。

――――神の定めた運命すら捻じ伏せる力を持つ怪物。

そんな怪物をその身に宿した長谷川千雨という少女の運命がこれからどのように変わっていくのか。
そして、千雨の内に潜む『雷帝』もまだ知らなかった。こんな異世界に来てまで、蛮と銀次の二人に再び出会うことになることを。あの二人と再会することで、どんな運命の歯車が動き出すのか今はまだ誰にも分からなかった。

第七話『図書館島へ①』

――――英雄の息子『ネギ・スプリングフィールド』が麻帆良にやって来る。

学園の魔法先生、魔法生徒にはすでに伝えられている事項であり、当然ながら蛮達にもそのことは事前に知らされていた。

もっとも蛮達にとって、それ自体は特に興味を引くようなことでもなかったため、特別に深く関わるつもりはそもそも無かった。

学園長からは「多少は気にかけてくれるようにして貰えばありがたい」と言われてはいたが、実際、ネギが麻帆良に来てからもしばらくは何の関わりも持たずに日々を過ごしていた。

しかし、ある時、マリーアの携帯にかかってきた電話を切っ掛けにして、運命は変わり始めることになる。

Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！

ある夜、自宅でくつろいでいた時にマリーアの携帯のアラームが鳴った。

液晶モニターに表示されている発信元は早乙女ハルナ。

「こんな夜中にどうしたの？　ハルナちゃん」

「あ、あの、こんな夜遅くにごめんなさい！　で、でも他に頼れる人が居なくて…！」

電話の向こうから聞こえてきたのは切羽詰ったハルナの声。

彼らとネギ・スプリングフィールドとの出会いはここから始まる。

◆

麻帆良学園都市内の湖に浮かぶ小島『図書館島』。

世界最大規模の蔵書数を誇る図書館であり、特にマリーアが何度も足を運んでいる場所である。
しかし、まともな図書館は地表部だけで、地下の部分はトラップがたくさん仕掛けられたダンジョンのような迷宮が広がっている。そして、その実態を調査する『図書館探検部』なる中・高・大合同サークルも存在しているらしい。
だが、そんな迷宮も蛮、銀次、マリーアの三人にとってはただのアトラクションのようなものでしかなかった。大学部の生徒たちによる地道なマッピングで少しずつ明らかにしているようなダンジョンに散歩のような気安さで降りて行き、いとも簡単に希少本を持ち帰ってくる。そんな彼ら三人は図書館探検部の間でもかなりの有名人として知られていた。
特にマリーアなどは見た目だけは絶世の美女であり、同性・異性の両者から憧れの対象として見られているようだった。その所為で綾瀬夕映、宮崎のどか、早乙女ハルナなどの他の探検部の面々とも知り合いになっていたりする。
今回、マリーアに電話が掛かってきたのもそこの繋がりからだった。

「相変わらず頭がおかしいとしか思えねえ図書館だな、いやマジで」
「まるで無限城みたいな迷路だよね…」

そして、現在、彼らは図書館島の奥深くを目指して進んでいた。
いつもなら『希少本探し』のための探索だが、今回に限って言えば『人探し』のための探索だ。
ネギ＋バカレンジャーの面々＋近衛木乃香の計７人が図書館島へと降りて行ったきり行方不明になり、それを心配した宮崎のどかと早乙女ハルナがマリーアに助けを求めてきたのが発端である。
そして、それを引き受けたマリーアに蛮と銀次の二人が護衛役として付き合わされる形になっている。

「しかし、頭を良くする魔法の本ねぇ…。もしも本当にあったら銀次も読んでみたらどうだ？」
「ハハハ…」

蛮の言葉に力無く苦笑する銀次。
行方不明になった面々が図書館島の地下へ降りて行った理由についてはすでにのどかとハルナから聞いている。
何とも馬鹿な話だと呆れたが、そうした楽をしたいという気持ちは分からなくもない。むしろ蛮達の裏稼業の世界では「出来ない事を何か他の物を使って出来るようにする」のは普通のことだからだ。
実際、命の掛かった危険な仕事の中で手段など選んでいる余裕はない。たとえ、どんな手段を使ってでも失敗してはならない場面というものは確かにある。
しかし、それはルール無用の世界で自分の命を常に危険に晒す仕事をしている者だからこその理屈であって、ルールのある世界に生きる普通の女子中学生に通用させて良い理屈ではない。
そして、それを一番分かっているのはおそらくマリーアだろう。

「…無駄口を叩いてないでさっさと行くわよ」
「へいへい、分かりましたよっと」

口には出さないがマリーアは明らかに怒っていた。
付き合いの長い蛮は言うまでもなく、銀次ですらマリーアが怒っているのが分かる。

（ヒソヒソ…、蛮ちゃん、ひょっとしてマリーアさん、怒ってる？）
（ああ…、間違いなく怒ってやがるぜ…ヒソヒソ）

マリーアが怒っている理由については大体の見当がついている。
このメンバーの中ではもっとも成熟した大人だけあって、若い子供がこうした不正に手を染めるのが許せないのだろう。

はっきり言って、勉強が不得意なこと自体は別に構わない。だが、不得意だからと最初から諦めて、努力すること自体を放棄している。その甘えた根性にこそマリーアは怒っていたのだった。

この調子で行けば、バカレンジャーの面々にマリーアの雷が落ちるのは確実。だが、その雷がどれだけの大きさになるのか想像もつかない。

今もマリーアはペンダントを振り子にした『ダウジング』に意識を集中している。

そして、そんなマリーアに向けてどこからか弓矢が飛んできた。

「…ったく、相変わらず鬱陶しい罠が多いな」

飛んできた弓矢を難なく掴み取り、へし折りながら蛮は呆れたように言う。

おそらく放っておいてもマリーアなら避けるなり防ぐなりしていただろうが、護衛役として付き合わされている以上、こういうのは蛮と銀次の役目だ。

そうして、道中のトラップの全てを潜り抜け、やがて彼らは表向きに図書館島の最深部とされている場所にたどり着いた。

「ここよ」

辿り着いた場所は巨大な地底湖。

地下なのに明るい光に満ちており、周りは見たことの無い植物に囲まれていた。

ところどころに本棚が並んでおり、中には水中に沈んでいるものすらある。しかし、水の中に浸かっているのに不思議と本が傷んだ様子もない。

「へぇ…」

「すっごい綺麗な所だな～」

思わず興奮気味に銀次が言う。
いかにもファンタジーといった風な光景に少し感動しながら、彼らは行方不明になった面々を探した。
「あー!!マリーアさんや!!」
「どうやら全員無事だったみたいね」
マリーア達を見つけた木乃香たちが駆け寄る。
「マリーアさん、何でここに…？　蛮さんに銀次さんまで…」
明日菜が聞いてきた。
「ハルナちゃんから貴女達が行方不明になったって聞いて探しに来たのよ」
この時点でマリーア達と面識があるのは木乃香、明日菜、夕映の三人。
しかし、面識の無いネギ、古菲、長瀬楓、佐々木まき絵の四人は、突然現れたマリーア達に少し戸惑っているようだった。
「明日菜さん、この人たちは？」
ネギが明日菜に訊ねる。
「えっと…、世界樹前広場で『占い屋』をやってるマリーアさん。それでこの二人が……」
「俺らはただの付き添いだよ。奪還屋…つっても分かんねーか。今は少し危険な事も扱う便利屋みてえな仕事をしてる」

明日菜の言葉を引き継ぐ形で蛮と銀次の二人が自己紹介した。
すると蛮達の名前を聞いて、長瀬楓と古菲が「どこかで聞いたことのある名前だ」と反応する。

「もしかして不良グループ『Ｅｖｉｌ　Ｅｙｅｓ』のリーダーとその側近でござるか？　あの鬼か悪魔のように強いと噂の……」
「…まあ、俺らがリーダーになったのはただの成り行きなんだがな」

やれやれという風に返事を返す蛮。
そんな蛮と銀次の二人の佇まいから感じる強さの気配。
その気配を感じ取った長瀬楓と古菲の二人は納得したというような表情をする。

「ふむ。…なるほど。確かにその佇まい。中々の強者のようでござる」
「地上に戻ったら是非とも手合せ願いたいアルよ！」

案の定というか、蛮と銀次の二人と戦いたがる古菲。
もっとも蛮の方は「そんな面倒くさいことはゴメンだ」と断る気満々だったが。

（この子も中学生!?　真名ちゃんもそうだったけど、オレより身長高いよ!?）
（８８．７ｃｍ…いや、８９ｃｍか。最近の中学生はスゲエな…）

中学生離れした楓のスタイルに内心で戦慄する蛮と銀次。
それにしてもバストサイズを目測だけで完璧に見切る蛮の脳内スカウターの精度はもはや神業である。

「マリーアさんが来てくれて助かったわー♪」
「うん、これで帰れるよ！」

まき絵と木乃香は安心したという風に笑っている。
しかし、マリーアの方はどうみても目が笑っていない。

（あ～あ、俺、知～らねっと）
（あ…、これは間違いなく説教3時間コースだな…）

マリーアの目を見た瞬間、蛮と銀次は我関せずの方針を決める。

「ネギ君、明日菜ちゃん、ちょっと良いかしら…」
「え、あ、はい!?」

マリーアはネギと明日菜を物陰のほうに呼んだ。

「ネギ君、明日菜ちゃん、貴方たちが図書館島の地下にもぐった理由はハルナちゃんたちから聞いてるけど…頭を良くする魔法の本なんてものが本当にあると思った理由について聞いても良いかしら?」
「え、えっと…」

腕組みをしたマリーアから問い詰められ、しどろもどろになる明日菜。
魔法使いが実在するのだから、頭を良くする魔法の本が実在してもおかしくないと思ったなどとはとても言えない。何故なら明日菜の認識の中ではマリーアは一般人なのだ。一般人相手に魔法のことをばらす訳にはいかない。
しかし、そんな動揺した姿を見せていれば洞察力に優れたマリーアからすれば自白しているも同然である。何より一瞬だけネギの方をチラリと見たのが決定的だった。

「なるほど?　大方、ネギくん経由で魔法の存在を知ったって所かしら」

「え!?」

見事に言い当てられ、明日菜は驚いた表情をみせる。
そして、マリーアは明日菜とネギの二人に対して言葉を続けた。

「言っておくけど私も魔法関係者だから、私に対して魔法の秘匿について気を遣う必要は全く無いわよ」
「えぇーー!?」

その言葉に明日菜だけでなくネギも驚いた。
しかし、マリーアはそんな二人の驚きなど無視して話を続ける。
その迫力はとても他の誰かが口を挟めるような代物ではない。

「さて、それじゃ、まずはネギ君」
「は、はい」
「本来なら貴方は彼女達を止めるべき立場のはずでしょう。何で一緒になってこんなことをしたのかしら?」
「え、だってもし期末テスト最下位だったら僕、先生になれなくて、本国に返されるから…」

そう言って、ネギは学園長から出された課題について説明する。
今までのことを洗いざらい聞いたマリーアは少しあきれた顔でネギを見た。

「はぁ…、せっかく魔法を使えなくしたのに、それじゃ全く意味が無いじゃない…」
「あの…僕…」
「魔法は秘匿するものだけれど、ばれなきゃ魔法で非道をしてもいいって、そういうものじゃないでしょう。ネギ君、貴方は己の保身のために不正に手を貸そうとした。人に物を教える立場の人間がしていい事じゃないのは分かるわね?」

「あうぅ…」

マリーアの言葉でネギはようやく自分のしたことを理解してきたようだ。

涙目になりながら謝るネギ。

「ごめんなさい。僕、間違っていました…」

素直に過ちを認めたネギにマリーアはそれ以上責めることはしなかった。

その代わりマリーアは身を屈めて自分の目線をネギと同じ高さに合わせると、両手で彼の頬を優しく包み込んだ。

「…ネギ君、貴方は今、自分の過ちを認めることが出来た。そして、その謙虚さは忘れちゃ駄目よ。貴方はまだ幼くて、失敗するのは仕方ない。今はただ失敗を認めて次の糧にすれば良い。けれど――――」

そこでマリーアはどこか憂いを帯びた表情で言葉を切る。

そして、彼女は一呼吸置いた後、まるで言い聞かせるように優しく告げた。

「けれど、世の中には本当に取り返しのつかない過ちも存在するの。だから、今のうちに多くを学びなさい。いつか必ず出会う本当に大事な場面で間違えないように」

どこか音楽的な響きすら感じるマリーアの声。

彼女の言葉はネギの胸に抵抗なく、スッと入ってきた。

「――」

真剣なマリーアの眼差し。

彼女が本当に真剣な気持ちで言ってくれていることはネギにも分かる。
話を聞いたネギは静かに頷く。それを見たマリーアはニッコリと微笑むと、その場を立ち上がった。
「さて…ネギ君の事はこれでいいとして…」
そして、マリーアは表情を再び真剣な物に変えると、ネギと明日菜以外の他のメンバーを集合させる。
マリーアは大きく息を吸い込んだ後、号令をかけた。
「全員、この場に集合!!」
マリーアは全員を自分の周りに座らせる。無論、全員が正座である。
蛮と銀次はそんな彼女らを少し離れた場所から生暖かい視線で見ている。
「今回の事件、大体のことは聞いたわ。まったくアナタ達ときたら…」
そこからの流れはまさに蛮と銀次の予想通り。
クドクド、ネチネチと本当にみっちり3時間のお説教が続いた。
途中で見物に飽きた蛮と銀次は今ではそれぞれ別のことをして時間を潰している。
蛮は周囲の本棚の中から適当な本を見繕って読書に耽っているし、銀次は地底湖のほとりで砂のお城を作って遊んでいる。
ちなみに砂遊びをしている彼はいわゆる『タレ銀』の状態であったが、誰も気にする者は居ない。全員、正座させられてそれどころでないというのが本当のところであったが。
「…と言うか、そもそも学生の本分は勉強でしょう。アナタ達、今まで

努力はしたの？　予習は？　復習は？　ちゃんとノートはとっているの？　分からないところは友達に聞くなり、先生に聞くなりしているのかしら？」

「「「「……」」」」

バカレンジャーの五人ともが黙り込んでしまった。
正論過ぎるマリーアの言葉に誰も言い返せない。
勉強の努力すらせず、そもそもの努力すること自体を放棄して不正に頼ろうとしたことは覆しようのない事実だったからだ。

「ううう、なんか認めるのは嫌だけどその通りかもね」
「勉強は苦手ですけど、マリーアさんの言ってることは間違いではないです」
「確かに最初から魔法書に頼ろうとしたのはフェアではなかったでござる」
「うん。確かにこんなズルして頭が良くなっても、本当に努力してる人達に申し訳ないよ」
「…その通りアルね」

素直に反省するバカレンジャーの五人。
そして、マリーアはそんな彼女たちに言った。

「だったら、ちょうどいい機会だし、今からここでアナタ達に徹底的に勉強させるわ。ここなら余計な雑念も入らないでしょう」
「えー、今から？」
「何か言ったかしら？」
「イエ、ナンデモナイデス」

まるで蛇に睨まれた蛙である。
マリーアにギロリと睨まれた明日菜たちは片言の返事を返すしか

なかった。

「ま、諦めるんだな？　何しろ俺も銀次もマリーアにだけは全く頭があがらねえからな」

「みんな、頑張ってね～」

カラカラと笑いながら蛮と銀次が言う。

「何言ってるのよ。アンタら二人も手伝いなさい」

「はぁっ!?」

他人事だと思っていたところにマリーアのこの発言。

蛮などは当然のごとく反発するが、結局折れて渋々と了承する。

「えーと、マリーアさん？　オレは人に教えられるほど頭良くないですよ？　むしろこの中で一番頭が悪い自信があるんですが…」

「だったら、銀ちゃんは教わる側として参加なさい」

「はえっ!?」

まさかの生徒側への参加要請。

無論、銀次に拒否権などは無い。

「それじゃあ、早速始めましょうか。ネギ君、準備をしましょう」

「はい！」

かくして地下図書室での勉強会が始まる。

マリーアを中心として、ネギと蛮がそのサポートに回るという形だ。

ちなみにマリーアの教え方は抜群に上手かった。はっきり言って、家庭教師や塾の講師としても十分やっていけるレベルであったと思われる。

「うーん、夕映ちゃんは単純に勉強しないだけのタイプだけど、明日菜ちゃんなんかは典型的に努力の方向性を間違ってるタイプかしらね～」

勉強会を進める中でマリーアが言った。

その言葉にネギが少し不思議そうな顔で訊ねる。

「え？　それはつまり、どういうことですか？」

「そうねえ…。例えばだけど、努力しているのに全く成績上がらない子っていうのも居るじゃない？　そういう子っていうのは、教科書が蛍光ペンやアンダーラインだらけになってることが多いのよ」

「うっ!?」

心当たりのあり過ぎるマリーアの言葉に動揺する明日菜。

実際、彼女の教科書は蛍光ペンやアンダーラインだらけである。

「そういう風にやたら沢山の目印つけるのは、どこがポイントなのか全然わかっていない証拠なの。そういう子は努力の方向性そのものを間違ってる。だから、そういう子の成績を上げようと思ったら、普段の勉強方法自体を変えてあげるしかないのよね」

そう言って、マリーアはネギに微笑む。

それを彼女達にしてあげるのはネギの役目だとマリーアは言外に告げていた。

「勉強に限ったことじゃないけど、目的を達成するためには、正しい手段・適切な手段が必要なのよ。たとえば薬の選択や使い方を誤れば、かえって病気を悪化させたり、死に至ることさえあるように、手段が間違ってれば、目的を誤ることさえあり得るの。今回の事件みたいね？」

「うぅ…、ホント、反省してます…」

マリーアの言葉にバカレンジャーの面々も素直に謝る。
そして、その光景を見てネギは思った。

（凄いなぁ…。あの五人にこんな教え方が出来るなんて…）

何というか本当に『大人』の女性なのだ。
ただ年上の美人というだけでなく、確かな教養を備えた理知的な女性。
しかも、その教養は書物からの知識だけでなく、彼女自身の人生経験にも拠っているだろうことが窺える。
だから、たとえ同じ言葉で伝えたとしても、自分ではこうも上手くはいかないだろう。
ネギがそんなことを考えていると、マリーアは今日の勉強会の終了を告げた。

「さて、今日はここまでとしておきましょうか」

その宣言に勉強会の参加メンバーは大きな息を吐いた。

「ぶはー」
「ここまで勉強したの始めてアルよー」
「でも、確実に頭は良くなってるはずです」
「くっ！　分かっちゃいたけど、この中じゃオレが一番頭が悪いよ！」

メンバーの中での最下位の成績に軽く落ち込む銀次だった。

第八話『図書館島へ②』

――カリカリと、静かな湖面に鉛筆の音が響く。

バカレンジャーの面々が湖のほとりの砂浜で勉強を続けながらすでに2日が経過していた。

それにしても、何故か食料やキッチン・トイレなどの生活設備はおろか、勉強のための教科書や黒板まで備えているあたり、どう考えても用意が良すぎる。

（こりゃ最初から仕組まれてたって考えるのが自然だな…）

それぞれのメンバーが勉強を続けているのを遠目に見ながら蛮はそう判断する。

恐らくは学園長あたりの差し金だろうが、全くあのジジイは何を考えているのやら。

しかし、これが最初から仕組まれていたのなら、わざわざ蛮達が図書館島の地下を捜索に来る必要は無かったかもしれない。

これがあの学園長の差し金だというなら、何だかんだで最低限の安全対策は講じてあるだろう。

「ったく、これなら俺らが来る意味なんざ無かったな…」

「それは別に良いんじゃない？　やっぱり何事もないのが一番だよ」

溜め息の混じった蛮の発言に銀次はそう返した。

最初の方こそ勉強会に付き合わされていた蛮と銀次だったが、今は生徒各人の自習時間ということで解放されている。

（今のうちに俺らだけさっさと地上に帰っちまうか？）

面倒事の嫌いな蛮は思わずそんなことを考える。

だが、実際に帰るとしても、さっきから気になっていたことを片付けてからにしよう。
どうも先程から物陰に隠れてこちらを窺っている人物が居る。そして、その人物はこちら側の中でも――――特に木乃香のことを気にしているようだった。

（何でわざわざ隠れてんだかな…アイツは）

感じる気配からすると物陰に隠れているのは間違いなく、桜咲刹那だろう。
彼女が木乃香の護衛役を任されているのは聞いてはいる。しかし、どうせならもっと近くで護衛すれば良いものを、何でわざわざあんな物陰から様子を窺うようなことをしているのか。
はっきり言って、物陰からこそこそと木乃香の様子を窺っている彼女の様子は客観的にはストーカーにしか見えない。

「ところで銀次、あそこでストーカー行為を働いてるサムライ女を俺らはどうしたら良いと思う？」
「あー…」

不意に話を振られた銀次だったが、銀次も刹那の存在にはとっくに気付いており、一体どうしたものかと何とも微妙な表情をしている。
見て見ぬ振りをすることも出来るが知らない相手ではないし、敢えてここは声を掛けることにする。
蛮は小さく溜め息を吐きながら一歩を踏み出した。

――――瞬間、その場から蛮の姿が掻き消える。

物音ひとつ立てない神速の移動。
蛮は刹那に気付かれないように彼女の背後に回ると、ポンと彼女の肩を叩く。

「…ッ!?」

やはり蛮の気配には全く気付いていなかったらしい。

突然に肩を叩かれた刹那は身体をビクリと震わせると、慌てたように後ろを振り返る。

ぷにっ

そして、振り返った刹那の頬に　蛮の指が突き刺さった。

まるっきり小学生がやるような悪戯にまんまと引っ掛かった刹那。

「何してんだ。こんな所で?」

「み、美堂さん…?　い、いつの間に?」

「ついさっきだよ。完全に気配を殺して近付いたから、テメエが気付かないのも無理ねえけどな」

そう言って、蛮は「まだまだ修行が足りねえぜ」とでも言いたげに不敵に笑う。

そうして蛮と刹那が話していると、銀次も少し遅れてやって来た。

「やっほー!　刹那ちゃん」

銀次は片手を軽く上げて挨拶する。

人懐こい笑みを浮かべる銀次の雰囲気に毒気を抜かれたのか、そこでようやく刹那は肩の力を抜いた。

それにしても、こういうほんわかした雰囲気は銀次だからこそであって、とても蛮には真似できない。ある意味、これも銀次の人徳であると言えるかもしれない。

「…で?　木乃香ちゃんをストーキングしてた理由はなんだ?」

「ス、ストーキング!?」

まさかそんな言い方をされるとは思わなかったのか刹那は凄まじく驚いた顔をしている。

刹那にとっては陰ながらの木乃香の護衛のつもりだっただけに蛮の「ストーカー呼ばわり」に相当面喰ったようだ。

もっとも蛮は彼女が木乃香の護衛だという事情を分かった上でわざとすっ呆けた風に言っている訳だが。

「ん？　違ったのか？」

「そんなの当たり前ですよ！　私はお嬢様の護衛です！」

思わず顔を真っ赤にして怒鳴る刹那。

そして、蛮はそんな刹那に対して正論をかます。

「だったら、こんなストーカー紛いなことをしてないで、もっと側でちゃんと護衛してた方が良いと思うぜ？」

ただでさえ護衛なんてものは後手に回らざるを得ない。

その上、こんな離れた場所に居たら、有事の際、どうやっても駆けつけるのに時間が掛かる。

わざわざ自分からさらに後手に回りやすい状況を作ってどうすんだ、という話である。

「え、えーと、それについてはお嬢様のお父上である詠春様の意向でして…」

何でも木乃香に魔法の存在を知らせたくないという彼女の父親――詠春の意向があるために、影からの護衛をしているのだと言う。

それが裏の世界に関わらせたくないという親心だというのは蛮にも分かる。

しかし――――

（それは別に、近くで護衛しない理由にはならねえよなぁ…）

蛮と銀次はそう思った。

恐らく他に理由があるのだろうが、それには追及しなかった。

そこまで深く踏み込むつもりは蛮には無い。だから、蛮は刹那に対して、こう言うことにした。

「ふぅん？　テメエの事情なんて俺が知ったことじゃねえがな。けど、いざ本当に木乃香ちゃんに何かあった時に『手が届かなかった』なんてことになったらテメエはどうする？」

まるで刹那のことを試すような蛮の視線。

その視線に見つめられた刹那は思わず言葉に詰まった。

「そ、そんなの…」

その反応を見る限り、どうやら彼女自身、護衛としての任務を第一に考えるなら木乃香の近くで護衛するべきだということは理解しているらしい。

自分が本当はどうするべきか理解しているのに、どうしても足を踏み出せないでいる。つまり、刹那が内に抱えている事情というのは、彼女にとってそれ程に重いものだということか。

蛮は刹那の様子に「やれやれ」という具合に溜め息を吐いた。

「まあ、さっきも言ったがテメエの事情なんて俺が知ったことじゃねえ。これからどうするかはお前の好きに――――…？」

好きにしろ、と蛮が言い掛けた時だった。

不意に何かに気付いた蛮はその動きを止めると、周りを警戒するよ

うに黙り込んだ。

（何だ、今のは…？）

時間にしてみればほんの一瞬。

ほんの一瞬だけだが、思わず全身が総毛立つほどの異常な気配を感じた。

そして、それに気付いたのは蛮だけではなく、銀次もいつの間にか表情を緊張させたものに変えていた。

「気付いたか、銀次」

「うん…多分、ここより更に地下だ」

頷いて答える銀次。

気配の出所は今の蛮達が居る場所よりも更に地下。

ここより地下に、気配だけで蛮と銀次を総毛立たせるような『何者か』が存在している。

「あ、あの…？」

「テメエは気付かなかったかよ？」

「何を？」

怪訝な顔をして訊き返す刹那。

どうやら彼女は気付かなかったらしいが、それは当然だ。

一番感知に優れた銀次ですら気配を感じ取れたのはほんの一瞬であり、相当な実力者でないと今の気配には気付けない。

だが、もしも気付けていたなら蛮と銀次と同じように瞬間的に理解したはずだ。その気配を発した『何者か』の異次元めいた桁外れの強さを。

「ほんの一瞬だけど、ここより地下で気配を感じた。多分…圧倒的に

ヤバい奴だよ。一対一の戦いなら、オレや蛮ちゃんよりも強いかもしれない」

刹那自身、以前に組んだ仕事を通して蛮と銀次の強さは知っている。彼ら二人の実力は確実に高畑や刹那以上。

だからこそ、蛮と銀次よりも強いかもしれない、という銀次の言葉に刹那は驚かずにはいられなかった。

「侵入者…ということですか？　で、でも、そんな強力な実力者なら学園の結界にとっくに引っ掛かってるはずじゃ…」

通常、麻帆良の外からの侵入者ならば、侵入した瞬間に学園の結界に引っ掛かっているはずだ。

それにも関わらず、図書館島の地下に侵入されるまで結界に引っ掛からないということがあり得るのか。或いは結界の感知を潜り抜けるスキルでも持っているのか。

たった今、侵入されたのか。それとも以前から侵入されていたのか。一体いつから侵入されているのかは分からないが、いずれにしろ放置できる問題ではない。

「銀次、分かってるな？」

「うん、分かってる」

銀次と蛮はお互いに見合わせて頷き合う。

二人ともわざわざ口に出すまでも無く、ここでどう行動するべきなのかを分かっていた。

「おい、桜咲」

蛮は肩越しに振り返ると、名前を呼んだ。

「とりあえず、俺と銀次は今の気配の出所を調べに行く。だから、お前はマリーアに伝言を頼む。木乃香ちゃん達を連れて、さっさとこの地下から脱出しろってな」

ついでにお前も早く地下から脱出しろ、と蛮は刹那に忠告する。

無論、仮に気配を発した『何者か』と遭遇しても、すぐさま戦闘になるとは限らない。

だが、蛮と銀次の推測では、その『何者か』の強さは下手をしたらあの赤屍と同等のレベル。万が一に戦闘になれば甚大な被害がもたらされることは想像に難くない。

巻き込まれたら正直、命の保障は出来ない。それを避けるためには、ネギやバカレンジャーの面々はさっさと地下から脱出させたほうが良いという判断だった。

そして、蛮と銀次の表情から事態の深刻さを読み取った刹那は、素直に蛮の指示に従った。

「…分かりました。二人とも、お気を付けて」

刹那の言葉に蛮と銀次の二人は「誰に言ってやがる」とばかりに不敵な笑みを浮かべる。

この地下にいる『何者か』が凄まじい強敵であることは間違いないが、たとえどんな相手だろうと負けるつもりは更々無かった。

「ああ、そうだ。地上に戻ったらテメエもちゃんと勉強しろよな？木乃香ちゃんへのストーキング行為にかまけて、銀次みてえなアホになるんじゃねえぞ？」

「だ・か・ら！　ストーカーじゃないと何度も言ってるでしょう!?」

別れ際に底意地の悪そうな顔で蛮に言われ、またもプンスカと怒ってしまう刹那。そして、さり気なく蛮から「アホ」とディスられた銀次である。

それにしても性格的な相性の問題なのか、刹那と蛮は顔を合わせるたびにこんな感じで喧嘩のようなやり取りをしている気がする。
肩を怒らせてノッシノッシと立ち去る刹那を微笑ましげに見送ると、蛮と銀次の二人も行動を開始することにした。

「そんじゃ俺らも行くぜ」
「うん、行こう。蛮ちゃん」

互いに頷き合うと、二人は図書館島のさらなる地下へと目指して動き出したのだった。

◆

図書館島の最深部と言われていた『地底図書室』の更に地下。
その地下への道を探索しながら、蛮は銀次に注意を促すように言った。

「油断するなよ、銀次。さっきのは圧倒的にヤバい奴の気配だったぞ」
「分かってる。あんな気配を感じたら油断なんて欠片も出来ない」

言いながら蛮と銀次は、さきほど感じた『力』の気配のことを思い出していた。
感じたのはほんの一瞬だったが、その力を発した『何者か』の強さは直感的にはあの赤屍と同等クラス。どう考えても、そのまま無視できるような代物ではない。
そう判断したからこそ、わざわざ蛮と銀次の二人が調査に向かっているのだ。
(こっちの世界にも赤屍レベルの奴がそうそう居るとは思えねえが…)

少なくとも、蛮達がこれまでに出会った麻帆良学園の魔法教師や魔法生徒達の中には赤屍レベルの相手に対抗できるような人間はいない。
つまり、もしも対象が敵対的な相手であった場合、対抗できるのは蛮と銀次の二人しかいないということだ。どこか嫌な予感を感じながらも図書館島のダンジョンを下へと降りて行く二人。
そうしていくつかの罠を潜り抜け、やがて二人はどこか神話に出てきそうな大きな扉の前に辿り着いた。

「これは…」
「こりゃ酷えな…」

蛮と銀次が辿り着いた扉の前。
そこに存在していたのは、翼を持つ巨大なドラゴン。
だが、既にそのドラゴンは全身を黒焦げにさせて死んでいた。
かろうじて原型を留めてはいるが、グチャグチャになった肉片が周囲に散乱し、周りには肉の焦げる臭いが立ち込めている。
焼け焦げた死体からは今もシュウシュウと蒸気が上がっていることから、このドラゴンが何者かに殺されてから間も無いということだろう。

「つーか、こっちの世界にはドラゴンなんてのも居るのかよ」
「けど、一体誰がこんなこと…」

言いながら、蛮と銀次の二人はその場を調べ始める。
周りの気配を探るが、最初に感じた気配は既に跡形も無く消えていた。
少なくともこのドラゴンを殺した『何者か』は既にこの場所からは離れてしまったようだ。いわゆるニアミスという奴である。
だが、それにしても、このドラゴンの死体の損傷は――

（炎…いや、こりゃ電撃のダメージによるものか？）

黒焦げのドラゴンの死体を見た蛮は、そう分析する。

（雷の魔法？　いや、違うな。それにしちゃあ魔力の気配を全く感じねえ…）

恐らくこのドラゴンを殺したのは、魔術的な力ではない。
実際に現場を見ていればもっと詳しいことが分かっただろうが、少なくとも魔力を媒介にして発生させた雷撃とは根本から違う。
物理的な力を、あくまで物理的な力のままに叩き付けているような印象を蛮は受けた。
それはまるでかつての無限城の『雷帝』が操った雷のような――

「……」

蛮はふと銀次の方を見る。
銀次は黙ったまま、ジッとドラゴンの死体を見つめたままでいた。
何を考えているのかは知らないが、蛮は敢えてそこに突っ込むようなことはしなかった。
蛮は銀次から視線を外すと、ドラゴンの死体の向こう側にある大きな扉の方に視線を移す。

「つーか、この扉は一体何だ？」

木の根の中に埋もれた巨大な扉。
そして、蛮がその扉を調べようと歩み寄ろうとした所で、後ろから声が掛かった。

「――その扉は私の許可が無いと開きませんよ。美堂君」

その声に振り返る蛮と銀次。
振り返った先に居たのは、いかにも魔法使いといった風体のローブをまとった長髪の美青年。

（コイツ…）

蛮は青年の姿を一目見るなり眉を顰める。
何というか凄まじく胡散臭そうな男なのだ。
蛮は警戒の混じった視線で睨みながら、現れた男に話し掛ける。

「テメェは誰だよ」
「私はアルビレオ・イマ。この図書館の司書長をしています。君達のことは学園長から聞いていますよ」

現れた青年は図書館の司書と名乗った。
だが、率直に言って、この男の胡散臭さは並ではない。
何しろ、この男、地面に影が映っていない。少なくとも普通の人間ではないということは明らかだった。

「…それで、このドラゴンはテメェのか？」
「ええ、私の部屋の番犬代わりにしていたんですが、一瞬で殺されました」

そう言って、アルビレオと名乗った男は黒焦げになったドラゴンの死体を見上げた。
蛮はアルビレオにドラゴンを殺した相手の風貌を訊ねる。

「これを殺ったのはどんな奴だ？」
「フードを目深に被っていたので顔までは分かりません。…ですが、中学生くらいの少女といった風な体格でしたよ」

アルビレオは自分の見た光景をそのまま語った。
図書館島の地下にフラリと現れたフードを被った少女と思しき人物。
その人物は本物の雷すら上回る雷撃で、ドラゴンをそれこそ一瞬で消し炭に変えた。
そして、ドラゴンの殺した少女は、ここにある扉を一通り調べた後、どこかに立ち去ってしまったらしい。

「つーか、テメェは見てただけかよ？　その女を追跡するなり何なりはしなかったのか？」
「いえ、それは無理でしたよ。下手に尾行したり、追跡の術式を使っていたりしたら多分、私が殺されてました」

アルビレオは追跡は無理だったと断言した。

「あの少女の強さは、はっきり言ってナギ以上でしょう。これまで長く生きてきた中で、あそこまで規格外な存在は見たことがありませんよ」

かつての大戦の英雄『紅き翼』のメンバーである人物をして、そこまで言わしめるほどの相手。
それだけ規格外な力を持っていながら、学園の結界に反応すらせず、学園側がこれまで把握すらしていなかったイレギュラー。
学園の外からやって来たのか、元々学園の中に居たのか、敵なのか味方なのか、それすらも分からない正体不明の存在。そんな相手が麻帆良学園の秘密を嗅ぎ回っている。

「いずれにしろあんな規格外な相手が学園内に存在すると分かった以上、学園の警戒レベルを引き上げざるを得ませんね…」

アルビレオは溜め息を吐きながら呟く。

そして、一方の蛮は、彼の話を聞いて、その少女の正体についてある一人の存在に思い当っていた。
最初にドラゴンの死体を見た時から頭の中をチラついていた存在だったが、今のアルビレオの話を聞いて一層その存在を意識せざるを得なかった。
だから、蛮はさっきからずっと沈黙を守っていた銀次に訊いた。
「銀次、これは『アイツ』の仕業か？」
「…分からない。けど、それくらい強いよ。このドラゴンを殺した奴は」
やはり、銀次も蛮と同じ存在のことを思い浮かべていたらしい。
正直、これが本当にかつての無限城の『雷帝』かどうかは分からない
そもそも銀次の中の『雷帝』は、かつての無限城の戦いでこの世から消えたはずであり、本来なら既にこの世に存在するはずのない相手だ。
だが、もしも本当に蛮と銀次の知っている『雷帝』だったとしたら

（一体誰が…？　どうやって呼び戻しやがった…？）
考えてみるが、可能性は一つくらいしか思い浮かばない。
蛮たちと共にこの世界に飛ばされたと思われる『神の記述』のカード。
消えたはずの『雷帝』をこの世に呼び戻せる可能性が僅かにでもあるとしたら、正直、それくらいのものだろう。
だが、消えたはずの『雷帝』さえこの世に呼び戻すことが出来るとは、この世界に飛ばされた『神の記述』のカードは、蛮やマリーアが最初に考えていた以上にヤバい代物なのかもしれない。
そうして、蛮はしばらく思考を巡らせていたが、アルビレオに話し

掛けられたことで我に返る。

「ひょっとして、ドラゴンを殺した者に心当たりがあるのですか？」

「…まあな。確かに心当たりは一人居るぜ。けど、アイツはもうこの世から消えた。…普通に考えたら、アイツがもう存在するはずがねえんだよ」

蛮は少し複雑そうな表情でアルビレオの問いに答えた。

第一、世界そのものが違っているのだ。本当に『雷帝』である可能性はゼロに近いくらいに低いはずだが、どうしても蛮の頭から離れない。

もしかしたら、再び戦うことになるのかもしれない。何の根拠もないが、何故だかそんな予感がした。

「おい」

「何でしょう？」

「テメェが学園の関係者なら一つだけ忠告しとくぜ」

正直、このドラゴンを殺した人物が『雷帝』本人である可能性は低い。

しかし、このドラゴンを殺した奴の強さは、少なくともそれに匹敵している可能性がある。

「次にそいつが現れても下手に敵に回すなよ。そいつが俺らの想像してる奴だっていう可能性は殆どゼロだろうが、少なくともこの学園の連中に対抗できる奴は一人も居ねえ。このドラゴンを殺った奴はマジでそれくらい強いぜ」

蛮はアルビレオにそう忠告した。

もっともアルビレオ自身は、わざわざ蛮に忠告されずとも蛮の言う通りにするつもりだったようだ。

アルビレオは蛮の忠告に頷いて見せると、二人に言った。

「さて…、私はさっき目撃したことを学園長に報告しに行かなければなりません。出来ればお二人も一緒に来て頂けますか？　あの人物への対策の一環として、おそらく貴方達にも依頼が行くでしょうし」

アルビレオからの同行の要請。

実際、このドラゴンを殺した『何者か』に対処できるのは自惚れでも何でもなく、現状では蛮と銀次の二人しかいない。

敵なのか味方なのか分からない。しかも雷帝に匹敵するかもしれない力量の人間が暗躍しているかもしれない状況で、麻帆良学園の人間がどうなろうと知ったことではないと無関係に振る舞えるほど二人は薄情ではなかった。

「まあ、仕方ねえか…」

「だよねぇ…」

アルビレオからの要請に蛮と銀次の二人は「やれやれ」という風に溜め息を吐く。

二人はアルビレオについて学園長のもとへ向かったのだった。

◆

そして、同時刻。

蛮と銀次が学園長室へと向かっているちょうどその頃、ドラゴンを殺した犯人は麻帆良学園の女子寮の一室に戻って来ていた。

自室に戻ってきた彼女は灯りを消した部屋の中に静かに佇んでいる。

――麻帆良学園中等部２―Ａ所属　長谷川千雨。

肉体的な姿形は間違いなく千雨のものだ。
だが、たとえネギのクラスの生徒が今の彼女の顔を見ても、彼女が一体誰なのか分からないかもしれない。
メガネを外していることもあるのだが、感じる雰囲気が普段の彼女とはまるで違う。それもそのはずで今の彼女の表層に出て来ている人格は、普段の彼女とは全く『別人』であるからだ。

「……」

それはかつて天野銀次という少年の中に宿っていた『雷帝』という別の意思。
今は千雨の肉体を憑り代にしているが、この世に呼び戻されて以来、基本的に彼（？）が千雨の表に出て来ることは余り無い。
彼（？）が表に出て来るのは千雨の人格が眠りに就いた深夜などで、その千雨が眠っているときの僅かな時間を利用して麻帆良学園のことを調べまわっていた。
千雨が眠っている間に活動しているということは、当然ながらその間のことは千雨の記憶には無い。千雨自身もまさか自分が眠りに就いた後で、自分の身体でこんなことされているとは夢にも思っていないだろう。

（だいぶ情報は集まって来たな…）

魔法使いの存在。それらを管理統括する魔法協会という組織。
旧世界と呼ばれるこの世界。まだ行ったことは無いが、ゲートを隔てて存在すると言われる魔法世界と呼ばれる世界。そして、世界樹。
これまでの調査の結果、手に入れた断片的な情報から、こちらの世界観の概観は既に把握することが出来ていた。

（――だが、どれも俺の興味を引くほどのモノじゃない）

しかしながら、この世界がどんなものなのかは『雷帝』にとってはどうでも良かった。
今夜も千雨が眠りに就いた後で図書館島の地下を調べに来ていた訳だが、大した情報は得られてはいない。
それよりも今夜の調査の際、襲ってきたドラゴンに対して、一瞬とはいえ『力』を使ってしまったことの方が問題だった。
さすがに勘の鋭い者ならば、さっきの『力』の発現に気付いたかもしれないし、何よりドラゴンの死体という証拠が残っているのが決定的だ。

（これはもう時間の問題だな）

これまでは平穏を望む千雨の人格に一応の気を遣って、千雨にも学園の魔法使いにも気付かれないように活動してきた。
だが、千雨の中に『雷帝（自分）』という怪物が存在しているということがこの学園の魔法使いの連中に知られれば、確実に何らかのアクションを仕掛けて来るだろう。
そして、そうなった場合、この身体の本来の持ち主である千雨自身も、もはや無関係ではいられまい。

（この身体の持ち主にとっては、迷惑この上ないことだろうけどな……）

そう自嘲気味に笑い、彼女はベッドに横になった。
いずれにしろ、『雷帝（自分）』という存在をその身に宿してしまったからには、もはや平穏など諦めて貰う他は無い。
千雨の平穏な日々が終わりを告げるまで、あと少し。そう予感しながら、雷帝の意識は、千雨の意識の裏側へと沈んで行ったのだった。

第九話『名前のない怪物』

――――場所は変わって学園長室。
蛮と銀次の二人がアルビレオに同行して学園長室に到着した時、すでにそこには学園長と高畑、マリーアの3人が集まっていた。
マリーアの姿を認めた蛮は、彼女に訊ねる。

「マリーア、木乃香ちゃん達はどうした？」
「勿論、全員無事よ。まあ、地上に戻る途中で、どっかの誰かさんが操るゴーレムが襲って来たりとかしたけどね？」

そう言って、チラリと学園長の方を見るマリーア。
学園長の額にはどこかにぶつけたかのような傷がある。その傷跡で蛮はマリーア達が地上に戻る時に一体どんなことが起こったのか大体の事情を察した。
蛮は少し呆れたような顔で学園長に言った。

「じいさん…悪戯は程々にしといた方が良いぜ？」
「フォフォフォ、マリーアさんにも同じことを言われたぞい。ただ、マリーアさんからは『やるなら確実に安全を確保してからやれ』とも言われたがの」

それは注意するところが違うんじゃないか？
蛮と銀次の二人は内心でそう思ったが、そういえばマリーア自身も結構な悪戯好きであることを思い出した。
実際、最初にマリーアに会った時の銀次など、いきなり心臓を抉り出されていた。いくら『神の記述』のカードの力の説明の為だったとはいえ、あれはどう考えてもやり過ぎである。
正直、あれに比べたら、学園長がやらかした程度の悪戯は全然マシに思える。蛮は「まあ、いいか」と思考を切り替えると学園長に言った。

「まあ、結果的には何事も無かった訳だしな…。それより報告が一つあるぜ」
「うむ、既にマリーアさんから大体のことは聞いておるよ。しかし、アル君まで図書館島から出て来るとはの…？」

そう言って、学園長はアルビレオの方を少し意外そうな顔で見た。
この男は、本当に滅多なことでは図書館島の地下に籠ったまま出て来ない。
この男が図書館島の地下から出て来たということは、それだけ面倒な厄介事であるということの裏返しでもある。
そして、アルビレオは学園長に自分の目撃した内容を語った。

――――図書館島地下のドラゴンを殺した少女と思しき人物。

大戦の英雄であるアルビレオをして、下手に追跡していたら殺されていたと言わしめるほどの相手。
すでに蛮と銀次は聞いた話であるが、改めて話を聞いてみると、やはりどうしても蛮と銀次には『ある存在』のことが頭にチラつく。
「正直、あれほど絶望的な力の差を感じたのは、先の大戦の『黒幕』と思しき人物と相対した時以来でしたよ。…いえ、あの時以上ですね」

自分では勝てないと、アルビレオは断言した。
アルビレオで勝てない以上、この学園の魔法使いで対処できるレベルを超えているのは確実。そして、それは必然的に蛮と銀次に出番が回ってくることを意味する。
アルビレオからの報告を聞いた学園長は蛮と銀次の方へチラリと視線を向けた。そして、その視線を受けた蛮は、学園長に対して一応の釘を刺して置くことにした。

「じいさん、言っとくが迂闊なことを考えんなよ？　多分だがあのドラゴンを殺した奴の強さは『雷帝』と同じレベルだ。万が一にも『本人』だったら最悪この都市が丸ごと更地になるぜ？」
「ふむ…『雷帝』とは何じゃね？」

聞きなれない言葉に当然ながら学園長が反応する。
蛮は腕を組んだ姿勢のまま、面倒くさげに学園長の問いに答えた。
「表向きには、俺らの世界での銀次の『通り名』だよ。つっても、ただの通り名って訳でもなくてな…。少し前まで銀次の中に居た『別の人格』さ」

そうして、蛮は『雷帝』について知っていることを、学園長に説明する。
銀次の怒りの感情が高まった時や、彼が命の危機に陥った時に現れていたもう一つの人格。
文字通り無限のエネルギーを内包し、物理法則すらも超越した圧倒的な攻撃力と回復力を持つ最強クラスの怪物。
そして、かつての無限城で『呪術王』との戦いで相討ちになって消滅したはずの存在である。
つまり、本来なら既にこの世に存在するはずがない。
存在するはずがないのだが――――

「それでも、君らはドラゴンを殺した者がその『雷帝』かもしれないと疑っておると？」
「…流石に『本人』かどうかまでは知らねえよ。けど、少なくとも相手がそのレベルの実力者って想定をした上での対策をとる必要はあるだろうぜ」
「ふーむ、対策といってもの―…」

話を聞けば聞くほど、規格外の相手としか言いようがない。

無論、相手が本当に『雷帝』だと決まった訳ではない。だが、赤屍と同等レベルの強さを持つ『雷の使い手』など、蛮と銀次の知る限りたった一人しか存在しない。

特に『雷帝』の場合、攻撃の威力だけでなく攻撃範囲も桁外れに広い。真っ向からの戦闘になれば、周囲に雷がまき散らされ、周囲への破壊もシャレにならないレベルになる。

正直、敵対や戦闘が避けられるならそれに越したことは無い相手である。

「つまり、その人物と接触しても極力刺激しないようにするしか対策が無い訳じゃろ？　万が一、相手が敵対的だった場合はどうするんじゃ？」

「そうだな。万が一、敵対するなんてことになった時には、俺と銀次が出張ってやるさ」

余り気は進まねえけどな、と蛮は自分の首の後ろを掻きながら返答する。

本気で真っ向から戦うことになれば、間違いなく命懸けになる。はっきり言って、割りに合わないとも思うがやらない訳にはいかない。

今回の厄介事について言えば、大元は蛮達と一緒に飛ばされた『神の記述』のカードが原因である可能性があるからだ。もっともその可能性についてまで、学園側に公開するつもりは蛮達には無かったが。

「君らなら勝てるのかね？」

「勝つさ。仮に『本人』が相手だったとしてもな」

蛮は言い切った。

凄まじい強敵であることは間違いないが、絶対に勝てない相手という訳でも無い。

それならば、残された問題は――――

「あとの問題は、万が一に戦闘になった時に周囲への被害をどうやって最小限に防ぐかだ。……相手を倒してもこの街が更地になったら意味がねえからな」

実際、周囲への被害を防ぐということが一番難しい。

場合によっては住民の避難などといったことも必要になるかもしれないが、流石にその辺りは学園側の協力も必要になるだろう。

その辺りの調整は今後も詳しく詰めていく必要がある。

（まったく、ホント思った以上に面倒くせえことになりそうだぜ、こりゃあ）

そんなことを考えながら、蛮達は学園側との話し合いの内容を詰めて行ったのだった。

◆

そして、学園長室での話し合いを終えた帰り道。

学園長室での話し合いが思った以上に長引いたせいで、今はもう明け方だ。

明け方の肌寒い空気の中、蛮、銀次、マリーアの三人は街の通りを歩いていた。

（あ～…くっそ眠いぜ）

結局、ほぼ徹夜な訳でかなり眠い。

通りの歩道を歩きながらも、ついつい欠伸が出てしまう。

そして、蛮が欠伸をしたのと同じタイミングで、ふと銀次が足を止めた。

蛮は怪訝に思い、振り返って銀次に問いかける。

「…？　どうした、銀次？」

「あのさ、蛮ちゃん、さっきからずっと考えてたことがあるんだけど――」

そういえば、学園長室での話し合いのときも、銀次はほとんど口を開かずに何か考え事をしていたようだった。

なにやら思い詰めたような感じの表情をした銀次。そして、そんな彼の口から次に出た言葉は、蛮やマリーアを思わず唖然とさせるようなものだった。

「――もしも、相手がオレ達の知ってる『雷帝』で、戦わなきゃいけない状況になったとしたら、オレ一人で戦わせてくれないかな？」

一瞬、蛮は銀次が何を言ったのか分からなかった。

思わず「何言ってやがんだ、テメェは」といった風な表情を浮かべてしまう蛮。

そして、当然と言うべきか、マリーアも蛮と同じ顔をしている。

「銀次…お前、自分で何言ってるか分かってるか？」

蛮がそう聞き返すのも無理はない。

そもそも、あの『雷帝』の強さを銀次が知らないはずがない。あの存在が赤屍と並んで最強の一人であることは今さら疑いようがない。

そんな怪物に対して、わざわざ数の優位を捨てて、一対一の戦いに拘る理由など何処にも無いはずである。

しかし、銀次にだけは拘りたい理由があった。

「勿論、分かってるよ。けど、オレ、もしも『雷帝』に会えたら、言いたい事っていうか、言わなきゃいけない事があるんだ」

「言わなきゃいけない事？」

蛮は視線で訊き返した。

そして、蛮からの視線を受けた銀次は一つ頷くと、少し寂しげな顔で言葉を返した。

「うん――――ずっと、独りにしたままでゴメン、ってさ」

その言葉に、蛮とマリーアは今度こそ呆気にとられた。

思わず蛮とマリーアの二人はお互いに顔を見合わせてしまう。

蛮にもマリーアにも、銀次の言っていることが最初は全く分からなかった。

「銀ちゃん、それって……」

今度はマリーアが聞き返した。

やはり、理解出来ないという様子の蛮とマリーアの二人。

そして、銀次は自分の右手を胸に当て、胸の内を探るように銀次は言葉を紡ぎ出した。静かに、しかし確実に。

「確かに『雷帝』はオレの中にずっと居たよ？　実際、『雷帝』がオレに力を貸してくれなかったら、オレはとっくに死んでるだろうし、何度も助けられてる。けど、オレ自身は『雷帝』のことを、どれだけ理解してあげられてたんだろう…」

どこか悔いるような銀次の声。

蛮もマリーアも、静かに語る銀次の話をただ黙って聞いていた。

「今にしても思えば、欠片も理解なんてしてなかった。むしろ遠ざけようとしてたと思う。だから、多分、その所為で『雷帝』はずっと独りだった。一番近くに居たはずのオレですらが遠ざけようとして、理

解しようとしなかったから…」

銀次が語る言葉に、蛮とマリーアは言葉をなくしていた。

確かに言われてみれば、本当の意味での『雷帝』が表に出て来たのは、かつての無限城での戦いで呪術王と戦った時の一度きりだ。

それまでの間、銀次に『雷帝』の力を貸すことはあれど、決して自分から表に出てはいない。誰とも会話せず、誰とも触れ合うこともなく、ただ銀次の中の影の人格として存在していただけだ。

そういう意味では『雷帝』が独りだったという銀次の言葉は決して間違ってはいないだろう。

（普段はバカのくせに、こういう所は本当に鋭いんだよな、コイツ…）

銀次の話を聞いて、蛮はそう思った。

今更ながら、こういう優しさだとか、思い遣りだとかの面では、自分は銀次には勝てないと蛮は思う。

蛮の性格上、絶対に口には出してやらないが、蛮は内心でそう思いながら聞き返した。

「アイツ自身は、自分の境遇を孤独だとか、寂しいだとか、別にそういう風には思ってなかったかもしれねえぜ？」

「うん、まあ、確かにそうだったのかもしれないよ？もしかしたら、自分からそう望んでの結果だったのかもしれないし、今、オレが思ってることだって本人にしてみれば、余計なお節介なのかもしれない。けど――――」

そこで銀次は一度言葉を切った。

そして、銀次は一呼吸おいた後、続きの言葉を口にした。

「――――けど、きっと『雷帝』には名前すら無かった。オレには、それがとても哀しいことだとしか思えない」

ある意味、それは決定的な言葉だったかもしれない。
言われてみれば、雷帝というのはあくまでも称号であって、人間としての名前ではない。
名前すら与えられず、誰とも触れ合うこともなく、持っているのは化け物じみた強さのみ。それを孤独と言わずに何と言う。それがたとえ自ら望んだ結果だったとしてもだ。

「これまでのことを振り返って思ったよ。はっきり言って、雷帝がずっと独りだったのはオレの所為だって」

まるで自嘲と後悔が混じったように銀次は言った。
そして、少し間を空けた後、今度は強い意思を宿して口を開く。

「だから、もしも雷帝に会えたら、オレは今度こそちゃんと向き合いたいんだ。もしも戦わなきゃならないとしても、その相手はオレじゃなきゃ駄目だと思う」

強い意思の宿った言葉だった。
銀次が雷帝の桁外れの強さを知らない訳はない。戦うとなれば、最悪の場合、死ぬ可能性すらある相手である。
しかし、それでも譲れない理由が彼にはあった。最初に銀次が雷帝と一人で戦いたいなんて言い出したときは、気でも触れたのかと思ったが、聞いてみると確かに銀次らしい理由だと思う。
そもそも、天野銀次という少年がこういう人間でなければ、蛮は彼と『奪還屋』を組んでなどいなかっただろう。

「ねえ、蛮ちゃん。これってオレの我が儘かな？」
「いや…多分そうでもねえよ」

銀次からの問いに蛮はそう答えた。

正直、真っ向からの戦闘になれば、銀次では少し力不足だという気がしないでもない。
だが、いざという時に本当に『雷帝』を止めることが出来るのは、銀次だけのような気がする。銀次の話を聞いて蛮はそんな風に感じていた。
蛮は少し視線を強めながら銀次に言った。
「だがな、銀次。この俺様を差し置いてまで、わざわざ一人で戦うって言ったんだ。もしも戦いになって、負けやがったら承知しねえぞ」
それはつまり、銀次に任せるということだ。
蛮からの言葉を受け取った銀次は、首肯して答える。
「わかってる。絶対、負けないよ」
もしかしたら、その台詞は強がりだったかもしれない。
だが、あの雷帝が相手かもしれないという想定でも、それだけの強がりが言えれば上出来か。
銀次の返事に蛮は、口の端を少し吊り上げるようにして不敵に笑った。
「まあ、今の時点じゃ、相手が本当に雷帝本人かどうかも分からねえ訳だけどな？」
「うん、まあ、そうなんだけどね」
蛮に言われ、銀次も少しバツが悪そうに笑う。
実際、相手が本当に雷帝かどうか確定していない以上、これ以上深く考えても意味が無い。
そのため蛮は、差し当たり、より手近な問題に話題を切り替えることにした。

「分かんねえことをこれ以上、無駄に気にしても仕方ねえからな。とりあえずはメシだ、メシ。そこらのコンビニで朝飯買って帰ろうぜ」
「今の時間じゃスーパーも開いてないものねー」

蛮の言葉にマリーアが相槌を打つ。
実際、こんな早朝の時間に商売をしているのは、せいぜいコンビニくらいのものだ。ちなみに未だに彼らの金銭と食事事情の管理はマリーアがしている。
そうして、朝食を調達するべくコンビニに向かった一行。しかし、向かった先のコンビニ。彼らはそこでも、また一つ、別の面倒事に出くわすことになるのだった。

第十話『幽霊の少女』

――彼女、相坂さよは幽霊である。

自分の死因も思い出せないが、すでに６０年も麻帆良学園の教室で地縛霊を続けている。

だが、どうやら自分には幽霊としての才能はあまり無いらしい。全く人に気付いてもらえないのだ。

誰かに気付いて貰いたい。お友達が欲しい。お話がしたい。普通の人間にとって当然のそれが、彼女にとっては余りにも遠い。

おまけに幽霊のくせに怖がりで、夜の教室にいるのが怖いからコンビニやファミレスに通う始末である。

そして、その日もコンビニで夜を明かし、そろそろ教室に戻ろうとした時のことだった。

（――えっ!?）

一瞬、何かの間違いかと思った。

その時、コンビニに入って来た三人組。

その三人の中の一人。ツンツンしたウニのような髪型をした男の人。その人と明らかに目が合った。

彼女の止まっていた時間は、この瞬間から動き出したのであった。

◆

蛮たちが立ち寄ったコンビニ。

そこで彼女の存在に真っ先に気付いたのは蛮だった。

彼の両目は『邪眼』と呼ばれる特別製であり、だからこそ気付くことが出来た。

（なんつー影の薄い…）

蛮の目に映るのはセーラー服を着た白い少女。
それがこの世のものではないことは、蛮には一目見て分かった。
別に嫌な気配は全く感じないし、悪霊などといったものではなさそうだ。
しかしながら、その隠密性たるや尋常ではない。蛮の『邪眼』だからこそ何とか認識することが出来るが、普通の人間には絶対に見えないだろう。
立ち止まったまま、しばらく少女のことを観察していた蛮。しかし、蛮の視線の先にマリーアと銀次は怪訝な顔をする。

「どうしたの、蛮ちゃん？」
「さっきから何も無いところを見てるけど…」

どうやら銀次とマリーアにも見えないらしい。
二人に訊かれた蛮は、一体どうしたものかと少しだけ思案する。

（別にわざわざ関わる義理もねえんだがな…）

正直、これ以上の面倒事に関わるのは遠慮したいところだ。
このまま無視してしまおうかと蛮が考えた時、どうやら向こうがこちら側に気付いたらしい。

『あ、あの！　私のことが見えるんですか!?』

蛮の元へと駆け寄ってくる白い少女。
最初は無視してしまおうと考えていた蛮だったが、その気は失せた。
何故ならその少女が、まるで助けを求めるかのような悲愴な顔をしていたから。

（仕方ねえな…）

蛮は頭の後ろをガシガシと掻く。
正直、今回も面倒事の臭いがプンプンする。
だが、こんな悲愴な顔をした女の子を無視することは流石の蛮にも出来なかった。
蛮は仕方なさげに白い少女の幽霊に応じる。

「ああ、見えてるぜ」
『!!』

初めて自分という存在に気付いてくれた男の人。
そんな存在が突然現れてくれたことに幽霊の少女は信じられないという顔をする。

「それで、テメェは何者だ？　仮に俺らに取り憑こうとしてる悪霊だってなら遠慮なくあの世に送り返すぞ？」
『あ、悪霊なんてとんでもないです！　私はただのしがない地縛霊です！』

蛮の質問に、彼女は慌てて否定する。
幽霊の少女と言葉を交わす蛮だったが、問題は蛮以外の者には彼女の姿が見えていないということである。

「蛮ちゃんが、おかしくなった!?」

何気に酷い言い草の銀次である。
しかしながら、虚空を見ながら会話する蛮は、客観的には危ない人にしか見えない。それを考えれば、銀次のこういう反応も無理はない。
もっとも魔術というオカルトの世界の住人であるマリーアの反応は、銀次とは違っていた。

「私の目には見えないけど、やっぱりそこに居るの？」
「ああ、別に悪霊って訳じゃなさそうだがな」

これが悪霊だったなら『蛇遣い座（アスクレピオス）』の力を使ってでも、あの世に送り返すつもりだった。
さすがこの男、相手が女であっても敵ならば一切容赦しない。この辺りは銀次とは明確に違う所だろう。

「ふぅん…？」

マリーアはバッグから古めかしい丸眼鏡を取り出す。
霊視の術を仕込んだその眼鏡を通して見てみると、なるほど、確かにそこには白い少女の姿が映っていた。

「あら本当、女の子だったのね」

そして、当然と言うべきか、マリーアが口にした「女の子」という単語に銀次が反応する。
マリーアから眼鏡を借りて覗いてみる銀次。

「あ、本当だ。しかも、かなり可愛いし！」

少女の姿をみた銀次は率直な感想をもらす。
実際、容姿的なことを言うなら世間一般で言うところの美少女の範疇には十分入る。

『あ、あの…？』

おずおずと遠慮がちに蛮に話し掛ける幽霊の少女。
しかし、その声が聞こえているのは蛮だけで、マリーアと銀次には

彼女の声は聞こえていないようだ。

（声が聞こえてるのは俺だけか…）

これは所謂、霊感が強いという奴なのだろうか。
あるいは単純に個人の波長や相性の問題なのかもしれないが。

「あー…、とりあえず名前を教えてくれるか？」

蛮は心底面倒くさいという風に幽霊の少女に問い掛ける。
問われた少女は、まるで縋るような表情で自分の名前を名乗った。

『さ、さよです！　相坂さよ！』

「相坂さよ、ね…。とりあえずは俺らについて来な。力になれるかは分からねえが、話くらいは聞いてやるぜ」

少女の名前を確認した蛮は、ひとまず場所を移動することにする。
早朝で人通りが少ないとはいえ、何もない虚空に向かって会話するという絵面を誰かに見られるのは少々気まずい。
とりあえずコンビニで朝食を確保した一行は、世界樹前広場の公園へと移動した。公園へと移動する途中、彼女の事情を軽く聞いたが、何でも彼女は６０年も麻帆良学園で地縛霊として存在しているらしい。

（つまり、６０年もコイツは一人だったわけか…）

誰にも気付いてもらえず、誰とも触れ合うこともなく、ただそこに存在するだけの少女。
一体それはどれだけの孤独だったのか。蛮を通して彼女の事情を聞いた銀次とマリーアも、彼女の境遇には同情的である。

「６０年もかぁ…」
「よくも気が狂わなかったものね…」

流石に６０年という歳月はいかにも長い。
マリーアは１００歳という年月を重ねた魔女であるが、彼女もそんな孤独は経験したことが無い。
普通の人間なら発狂してもおかしくない境遇である。あるいは幽霊という死後不変の存在だからこそ狂うことなく耐えられたのかもしれないが。

『６０年間どんな霊能者さんでも私が見えなかったんですけど、美堂さんには私が見えたんですね！』
「ああ、俺の『眼』はちょっとした特別製でな。だから、お前のことも視えたのかもな」

そう言って蛮は自分の『邪眼』のことを説明する。
もっとも説明したのは蛮の両眼がいわゆる『魔眼』の一種に分類される特別なものであるということだけだ。
邪眼の真の能力とも言うべき、相手に1分間の幻影を見せるという力については話してはいない。
しかし、それでも話を聞いたさよは蛮を期待に満ちた目で見る。

（幽霊のくせに全然怖くねえし、やたらとコロコロ表情を変えやがるな、コイツ…）

蛮は内心でそう思った。
別にそれが悪いとは言わないが、幽霊としては何かが間違っているような気がしないでもない。
そんなこんなで会話が進むうちに蛮は彼女にこれからどうしたいかと訊ねてみた。

『私、お友達が欲しいんです!!』

どうやら彼女は６０年間誰にも気づいてもらえず、かなり寂しい思いをしたらしい。

正直、蛮としては余計なモノを背負い込むようなことは余りしたくないのだが、銀次の方は別である。

案の定、蛮を通して彼女の事情を聞いた銀次が真っ先に反応する。

「オレなら全然良いよ!」

「私も良いわよー」

銀次とマリーアならこう言うことは蛮には分かっていた。

だから、蛮は二人の反応に少しだけ「やれやれ」と思いながらも、さよに向けて言葉を返す。

「…って、わけだ。テメェと友達になってくれる奴がここに二人…いや、三人は居るらしいぜ?」

『え…?　三人ってことは…』

二人ではなく、三人。

少し遠回しな言い方だったが、さよにも蛮の言葉の意味は分かった。

そして、そんな蛮の遠回しの言い方に、マリーアの方はニヤニヤと口元を笑わせている。

「クスッ、随分と遠回しな言い方ね。蛮」

「まあ、蛮ちゃんは素直じゃないからね!」

「うるせーよ」

そう言って、蛮はゴツンと銀次の頭を軽く小突いた。

三人とも幽霊なんて得体の知れないものを相手にしているという

のに、無理をしているような様子もなく全くの自然体。
そんな風に『当たり前』に受け入れてくれたことが、さよにとっては涙が出そうになるほど嬉しかった。

『う、嬉しいです…』

さよは感激のあまり涙ぐむ。
だが、現状、素の状態だと彼女のことを認識できるのは、この中では蛮だけである。
マリーアも銀次も彼女の友人となることを快諾してはくれたが、いちいち蛮を通してでないと会話もままならない。
その上、彼女自身は、麻帆良学園という場所に括られた地縛霊であるため、学園の外には出られないのだという。
それらの問題をどうに出来ないだろうか。とりあえず蛮はそういうのが一番得意そうなマリーアに訊ねてみる。

「マリーア、とりあえずコイツの姿と声を俺以外にも認識できるように出来ねえ？」
「そうねえ。特殊な結界でも作って、その範囲内だけで良いなら出来ると思うわよ？」

マリーアはタロットカードを取り出すと、それらをまるで手裏剣か何かのように四方に向けて投げる。
投げられたカードが地面に突き刺さり、それらのカードを起点に何かの術を発動させるマリーア。すると――

「うわっ！」

突如としてその場に現れる少女の姿に一瞬驚いた反応を見せる銀次。
その反応から自分の姿が蛮だけでなく、銀次とマリーアたちにも見

えるようになっていることに気付く。

『も、もしかして見えてます？』

「ばっちり見えてるよ！」

さすがは無限城世界において最高レベルの魔術師だけのことはある。

蛮自身、戦闘力という面においてはマリーアの遥か上を行っている自信はある。

しかし、こういった器用さ・技能の多彩さにかけては、蛮や銀次ではマリーアには到底敵わないだろう。

「こういうのは流石だな、マリーア」

「フフッ、まあね」

フフン、と得意げな笑みを浮かべるマリーア。

姿が見えるようになったさよの周りではしゃいでいる銀次。

とんでもなく気軽な様子のマリーア達だが、さよ本人からしたらまるで天地がひっくり返ったかのような衝撃だった。

まるでヒーローのように突然に現れて、ずっと悲しんでいたことをあっという間に解決してくれたのだから。

正直、突然の事態に感情の動きが追い付いていない。

『み、皆さんは一体…？　こんなことが出来るなんて…』

さよにとっては当然の疑問と混乱。

そんな彼女の混乱を楽しむように、マリーアはしなやかな指をさよの唇にすべらせる。

見えるだけでなく、触れることすら出来ている。その状況に幽霊の少女は、またしても言葉を失う。

『(え…？)』

少女の唇に触れていた指をスッと離すマリーア。

「ちょっとお節介な『魔法使い』と『奪還屋』よ。他言無用、約束ね？」

そう言って、マリーアは微笑んだ。

いかにも冗談めかした言い方で、唇に指をあてて他言無用の仕草をしながら。

唇に押し当てられた指の感触、冗談めかしたイタズラっ子みたいなその表情。それらの全てがいちいちさよを魅了する。

秘密を着飾った大人な女性。さよがこれまでに出会ったことが無いタイプの女性で、その魅力にはどうしようもないほど強く惹きつけられた。

『わ、わかりました！　約束ですね！』

感激のあまり、思わずさよは最敬礼の姿勢で返答してしまう。

そんな彼女らの様子を、銀次は微笑ましげに見つめている。

蛮はそんな彼らを見てふっと小さく笑ってみせたあと、マリーア達に向けて言った。

「つーか、ひとまずは帰ろうぜ。俺もいい加減に少し眠いんでな」

ひとまず自分たちの拠点に戻ることを提案する蛮。

「え～？　せっかく友達になったんだから、オレとしてはもっと色々おしゃべりしたいんだけどな～？」

蛮の言葉に不平を漏らす銀次。

だが、実際問題として、これ以上この公園に長居してさよのことが

人目につくと少しまずい。
今は早朝で人通りも居ないから良いが、時間が経てば人目に触れる可能性は飛躍的に高まるだろう。
しかし、そんな蛮の懸念に対して、銀次は気軽に言う。
「だったら、さよちゃんがオレらと一緒に来たらいいんじゃん？　オレらが住んでるところなら、人目なんて気にする必要ないし！」
「アホか。コイツは学園に括られた地縛霊って言ってただろうが？　俺らが住んでるところはギリギリ学園の範囲外――――いや、範囲内だったか？」
よくよく考えてみると、蛮達が現在暮らしている住居は学園内外の境界の微妙なラインに立地している。
先程の話では地縛霊であるさよは学園から離れられないということだったが、もしかしたらギリギリ連れて行けるかもしれない。
実際に試してみないと何とも言えないが――――
「っつーわけだが、試しに俺らと一緒に来てみるか？」
蛮は少し考えた後、さよに訊ねてみた。
要するに、自分達の住んでいるところに遊びに来ないか、というお誘いである。
蛮の言葉の意味するところを理解したさよは、顔をぱあっと明るくさせる。
『は、はい！　是非！』
「言っとくが、駄目だったとしてもガッカリするなよ？」
さよに一応の釘を刺して置く蛮。
期待させるだけ期待させて、それが叶えられないという期待外れになる可能性もゼロではないからだ。

蛮に釘を刺されたことでさよの表情が少し曇る。

『そ、そうですよね…』

「まあ、そんな心配すんな。仮に今回が無理でも、そのうちになんとかしてやるさ」

そう言って、蛮は不敵に笑う。

見た者に、自信と頼もしさを感じさせるその笑みは、彼女の不安を払拭するのに十分なものだった。

これまで誰にも見つけてくれなかった自分を見つけてくれて、受け入れてくれた男の人。だから、蛮の「なんとかしてやる」という言葉を信じられた。

『はい！』

期待に満ちたさよの眼差し。

さっき、期待し過ぎるなと釘を刺したばかりだというのにこれである。

蛮としてはその期待に満ちた眼差しに内心で少し苦笑いしてしまうが、決して悪い気分ではない。むしろ微笑ましさを感じるくらいだった。

蛮はさよ達に見えないように小さく笑った後、他のメンバーに声を掛けた。

「さて、そんじゃ帰ろうぜ」

そうして、彼らはさよを引き連れて自分達の拠点への帰路についたのだった。

◆

さよを引き連れて帰宅した一行。
そして、結論から言えば、さよにとっても今回は別に期待外れにならずに済んだ。
蛮達が拠点にしている住居にさよがあっさり入ることが出来た時は拍子抜けしてしまったくらいである。
現在、マリーアが拠点に展開した術によって、この家の中に限ってはさよは実体化した姿を保っていられるようになっていた。
そして、帰宅した彼らが何をやっているかと言えば、全員揃ってＴＶゲームに興じていた。

『あっ！じゃあ今度はこれで遊んでみたいです！』

適当なゲームをいくつか遊んだ後に彼女が選んだゲーム。
よりによって、そのゲームは『ＡＣ北斗の拳』。そのゲームを見た瞬間、銀次とマリーアの二人の顔が引き攣った。
ただ一人、蛮だけが野獣のごとき眼光を湛えている。

「――良いのか？　全力でやるぞ？」
『え？』

さよの戸惑いを余所に、蛮はコントローラーを操作しカーソルを移動させる。
カーソルの移動に合わせて、『ジョイン！　ジョイン！』という音がする。
そして、決定ボタンが押された時、さよの耳には外国人のようなイントネーションでこう聞こえた。
――『トキイ！』
事情を知っている者はこの時点で、蛮の容赦のなさにドン引きしているだろう。
よりによって蛮が選択したキャラは、北斗４兄弟の次兄トキ。白い長髪に無精髭、痩せこけた頬。かのキリストを思わせるかのような外

見。
原作漫画においては、屈指の人格者として知られ、放射能汚染により余命幾許もないという設定のキャラであるが、このゲームにおいては事情が異なる。
このゲームにおいての彼は格闘ゲーム史上トップクラスといっても良いほど理不尽な強さを誇るプレイヤーキャラとして知られている。一応病人であるはずだが、どう見ても病人とは思えない動きと強さから、「剛の拳よりもストロングな柔の拳」「あれはトキじゃないアミバだ」「放射線じゃなくてガンマ線を浴びた」「放射能を浴びる前のトキ」等と言われているのだ。
余りにも大人げない蛮のキャラ選択に内心ドン引きの銀次とマリーア。
かくして対戦が始まったのだが――
デデデデザタイムオブレトビューションバトーワンデッサイダデステニーナギッペシペシナギッペシペシハァーンナギッハァーン
テンショーヒャクレツナギッカクゴォナギッナギッナギッフゥハァナギッゲキリュウニゲキリュウニミヲマカセドウカナギッカクゴーハァーテンショウヒャクレツケン
ナギッハァアアアキィーンホクトウジョウダンジンケンK．O．イノチハナゲステルモノ
バトートゥーデッサイダデステニー　セッカッコーハアアアアキィーン　テーレッテーホクトウジョーハガンケンハァーン
FATAL　K．O．　セメテイタミヲシラズニヤスラカニシヌガヨイ　ウィーントキィ（パーフェクト）
――この間わずか40秒。
さよのジャギが何も出来ずに蛮のトキに屠られた。
AC北斗の拳ではよくある光景だが、知らない者が見ればカルチャーショックだろう。
『わ、私の。私のジャギが……何も出来ずに……』

何が起こったのかすら分からず、呆然とするさよ。
それから何回か対戦が続けられたが、いずれも格闘ゲームの常識を超えた光景を見せつけられることになる。
『（いつまで続くんだろう、このコンボ…）』
無論、死ぬまでである。
延々と地面を跳ね続ける『バスケ』と呼ばれるコンボ。ガーキャンから即死。投げから即死。小足から即死。ムテキング。
ストリートファイターなどといったメジャーな格闘ゲームの常識を遥かに逸脱した光景を見たさよは恐る恐るという風に訊ねてみた。
『これは格闘ゲームとしてはどうなんですか…？』
「世紀末だから仕方ねえんじゃねえの？」
世紀末だから、の一言であっさりとスルーされるさよの疑問。
そこでメンバーの中で唯一の良心ともいえる銀次が慌てて止めに入る。
「ちちちち、ちょっと待って！　主役のさよちゃんが呆然としてるから他のゲームにしよう！　格闘ゲーム禁止!!」
「何言ってんだ、銀次？　北斗は格ゲーじゃなくて、『世紀末スポーツアクションゲーム』だろ？」
「蛮ちゃん、そういう問題じゃないから!!」
「仕方ねえなぁ。じゃあ『戦国ＢＡＳＡＲＡ　Ｘ』を――」
「やめて！　そっちも似たり寄ったりの『戦国陸上』じゃん!?」
漫才のような蛮と銀次の掛け合いが始まる。
マリーアはそんな二人の掛け合いを一歩引いた位置で見守っていたが、ふとさよの方を見た。
しかし、彼女の方を見たとき、思わずマリーアはギョッとしてし

まった。

『――――グスッ』

さよがボロボロに涙を流しながら泣いていたのだから。

さっきの『北斗の拳』の対戦で、蛮のトキにボコボコに作業されたことが原因かと思ったが、そうではないらしい。

『ううん、ごめんなさい、マリーアさん。嫌な訳じゃないんです。むしろ逆で…』

涙を拭いながらさよは言葉を続ける。

悲しくはない。悲しくなんてないのに涙が止まらない。

『友だちと一緒に、皆でワイワイやるのって――――やっぱり、楽しいなぁって。本気で遊んで、時々喧嘩もして。そういうの、ずっと憧れてましたから…』

そして、絞り出すような小さな声で、夢みたい、と告げられる。

一瞬、マリーアは彼女に何と声を掛けて良いのか分からなかった。

６０年の孤独が彼女にとってどのようなものだったのかは、きっと彼女自身にしか分からない。

この子のために自分が出来る限りのことをしてやりたい。彼女の涙を見て、マリーアはそう思ったし、それは蛮と銀次も同じだろう。

「だったら、気が向いたらここに遊びにいらっしゃい。貴女ならいつでも歓迎するわ」

「そうだな。手が空いてる時なら、俺らが遊び相手になってやるさ。特に銀次の奴はそうだろうぜ」

「オレとしては、ずっと居てもらっても構わないくらいだけどね～。我が家のマスコットみたいな感じでさ！」

蛮と銀次の二人もマリーアの言葉に付け加える。
それらはさよにとって、一番欲しかった言葉であったに違いない。
そして、この日以来、彼女が夜に通う場所はコンビニやファミレス
ではなくなったのだった。

第十一話『名前のなかった怪物』

先の期末試験で、毎回最下位だった二年Ａ組は学年トップと言う快挙を成し遂げた。
そして、ネギのクラスが学年末試験でトップの成績であったことのお祝いパーティーをすることになった。
しかし、クラスメイトが盛り上がっている中、周囲のテンションについて行けない千雨は、腹痛という仮病を理由に教室を後にした。

（そもそも、あのクラスはおかしすぎるんだよ！　異様に留学生が多いし、でかすぎるのもいれば、幼稚園児みたいなのもいる！　オマケにあのロボットはなんだよ!?　何で誰も突っ込まねえんだ！頭のアンテナみたいのと言い、関節の溝と言い、どうみても人間じゃねえだろうが！）

どうして自分の周りはこうなのか。
個性的すぎるクラスの面々を思い出しながら、千雨は大股でズンズンと寮への道を歩いていた。

「極めつけはあの子供教師だ！アタシの普通の学園生活を返せーーーーー！」

ウガーッと頭を抱える千雨。
しかし、世の中というのは彼女に都合よくできていない。

「は、長谷川さーーーん！」

名前を呼ばれて振り返ると、まさにその本人が小走りで駆け寄ってきていた。
内心で「げっ…」とも思うが、千雨は立ち止まって応対する。

「…何か用ですか？」
「ハァハァ、あ、あの…さっきお腹が痛いと言ってたので」
そう言ってネギは一つの薬瓶を取り出した。
「これ、おじいちゃんからもらった超効く腹痛薬です。おひとついかがですか？」
「結構です。もう治りましたので」
もともとパーティーから逃げるための方便だ。
素っ気なく返事を返すと、千雨は自分の寮へと歩き出した。
しかし、ネギは千雨について歩きながら声を掛ける。
「あ、あの……パーティーには来ないんですか？」
「私、ああいう変人の集団とは馴染めないんです。帰るのでついて来ないでください」
「そ、そうですか。みんな普通だと思うけど…」
（どこがだよっ!?　つーか、オメーが一番変なんだよっ！）
心底突っ込みたかったが、なんとか抑える。
しかし、怒りのあまり身体がプルプルと震えだした。
そして、その震えを勘違いしたネギが呼び止めようとする。
「あ、待って！　やっぱり寒気がするんですか？」
「しません！」
「じゃあ、えっと…アルコール中毒だとか？」
「私は未成年です!!」
思わず声を上げて怒鳴る千雨。
ネギから逃げるように早足で学生寮の自室へと急ぐ。

バタンッ！

乱暴に閉められる部屋の扉。

部屋の外にネギを閉め出し、ようやく一人になれた千雨は諸手を挙げて叫び声をあげた。

「あ゛ーーーもう!!!」

ここ最近の非常識な状態に、我慢の限界にきている長谷川千雨。

唯でさえ異様なクラスなのに、１０歳のガキが教師なんてとイライラが臨界突破寸前になっている。

「違うだろ！　フツーの学生生活はこうじゃないだろッ!!!」

パソコンのキーボードを乱暴にバンバンと叩く。

「はぁはぁ、この理不尽さを社会に…大衆にうったえてやるッ!!」

一頻り叫んだ後、彼女は鏡に向かう。

彼女の趣味であるコスプレの自画撮りを多用したネットアイドル活動のためだ。

ストレスを解消するには趣味に没頭するのが一番良い。

しかし――

（え…？）

鏡に映った自分の姿にどこか違和感を感じる千雨。

正直、自分でも何がどう違うのか良く分からない。だが、目の前に映っている自分が何だか自分でないような気がする。

何と言うか、鏡を見ているというよりも、鏡の方から見られている。

そして、その「鏡の中の自分に見られている」という感覚を自覚した

瞬間、千雨は急に凄まじい眩暈に襲われた。
立っていられないほどの猛烈な眩暈に急速に意識が遠のく。
（だ、ダメだ…意識、が――――…）
暗闇の中へと沈んでいく千雨の意識。
そして、沈んでいった千雨の意識と入れ替わりで表側へ出て来る別の意思があった。
千雨の意識を強制的に眠らせて、表へと現れた別の人格。それは、かつて無限城世界において『雷帝』と呼ばれた別の意思だった。
――――ネギと、雷帝との出会いはここから始まる。

◆

千雨の身に何が起きているか全く知る由もないネギ。
彼女の寮の部屋の外、閉められた扉の前でネギは考えていた。
（長谷川さんはああ言ってたけど、どうしよう？）
ネギは躊躇いがちにドアノブに手を伸ばす。
そして、まさにネギの手がドアノブに手を掛かる直前のことだった。
「えっ？」
ネギがドアを開けるまでもなく、部屋の内側から扉が開いた。
部屋の内側から伸びて来た腕にネギは自分の手首を掴まれる。
「長谷川さん…？」

手首を掴まれ、怪訝な表情を浮かべるネギ。
そして、その次の瞬間、ネギは凄まじい力で部屋の中へ引っ張り込まれた。
一瞬の無重力感と、上下逆さまになる視界。一瞬、ネギは自分の身に何が起こったのか理解できなかった。
自分が投げ飛ばされたのだということを頭が理解する頃には、すでにネギの身体は千雨の部屋の床の上に叩き付けられていた。

「がはっ！」

背中から叩きつけられ、肺の中の空気が無理矢理に押し出される。
しかし、投げられるだけでは終わらない。投げられた後、一瞬で馬乗りにされ、身動きできないように上から押さえつけられた。
それに加えて、二本貫き手の指先がネギの右眼に突き付けられている。それこそ、いつでもネギの右眼を潰せるように。
そして、動けないネギの上から底冷えするかのような冷たい声が響いた。

「暴れたり騒いだりしたらここで殺す。アンタは『俺』の質問にだけ答えろ」

限りなく無機質で、冷酷な声での脅迫。
完全に女性の身でありながら『俺』なんて全く似合わない表現をしたのは、長谷川千雨の姿を借りているだけの別の意思。
当然、この時点で人格が切り替わっていることをネギが見抜くのは無理がある。

「――――」

だが、自分を上から押さえつけている彼女の瞳を見たネギは息を呑

んだ。
それは例えるならこの世の頂点に君臨する者の瞳。絶対的な高みからこの世の全てを見下した瞳だった。
普段の彼女とはまるで別人。だからかもしれない。
「貴女は、長谷川さん…じゃ、ない？」
そんな突拍子もない言葉がネギの口から漏れたのは。
姿形は間違いなく長谷川千雨のものだ。普通ならば突拍子がなさ過ぎて思い付きさえしない考えのはずだ。
千雨の姿をした少女は、ネギのその言葉が予想外だったのか一瞬瞠目した。彼女は少しの間マジマジとネギのことを見つめていたが、やがて言った。
「その直感は正しい。アンタの言う通り、俺と千雨は別人だ。はじめまして、とでも言っておこうか？　ネギ・スプリングフィールド」
別に誤魔化す必要も、意味もない。そう判断してか、彼女ははっきりと別人だと明言した。
だが、姿形は間違いなく本人のものなのに別人ということは――
「多重、人格…なんですか？」
「その認識で間違ってはいないな」
良く分かったな、と感心したような表情を彼女は浮かべる。
姿形は同じとは言っても、今の彼女は後ろに束ねていた髪を解いているし、普段かけている眼鏡も外している。
眼鏡を外した彼女の素顔は、ネギが思っていたよりもずっとキレイだった。
「まあ、俺が多重人格であるということは今はどうでも良い。それよ

り聞きたいことが幾つかある。答えてくれるかい？――――小さな魔法使いさん」

小さな魔法使いさんと、彼女はネギのことをそう呼んだ。

それはつまり、彼女にはネギが魔法使いだということがバレている。

「まさか、長谷川さんも魔法使い…？　魔法関係者なんですか？」

「いや、違う。俺は魔法使いじゃないし魔法協会の連中とは無関係だ。俺は自力でこの学園を調べまわって『魔法使い』や『魔法協会』の存在に辿り着いた」

千雨の姿をした別人は、自分は魔法使いではない、と言った。

だったら今の状況は不味い。一瞬、ネギは記憶消去の魔法か何かを使って誤魔化そうとも思ったが、それは無理だった。

上からネギを押さえつける尋常ならざる腕の力。そして、かつて故郷の村を襲った悪魔たちよりも遥かに濃密な死の気配を宿す瞳。その瞳に否応なく理解させられた。

なにか下手な動きを見せればその瞬間に殺されかねない、と。

「――――」

ネギは身体が麻痺してしまったように固まって、瞬きすらできずにどうしても相手から目を離せないでいた。

相手の奥底を探るような彼女の眼差し。千雨の姿をした別人もしばらくネギのことをジッと見つめていたが、やがて溜め息を一つ吐くとネギから離れた。

「どうやら俺の早とちりだったか…」

そう言うと彼女はベッドに腰掛ける。

彼女は足を組んで、腕組みをした姿勢のままネギの方を見た。
「てっきり俺の存在に感付いた学園の連中が『探り』でも入れに来たかと思ったんだが、どうやらアンタは本当に何も知らないらしいな」
肩透かしをくらったかのような僅かに気の抜けた声。
さっきまでの死を予感させるような威圧感もいつの間にか霧散している。
「探り…、ですか？」
床から起き上がってネギは聞き返した。
彼女は少しだけ迷った素振りを見せた後、自分の事情を語った。
「…この前、学園の図書館島の地下を調べてたときにドラゴンを殺してしまったからな。少なくとも、この学園のことを裏で嗅ぎ回っている奴が存在することは感付かれている。アンタみたいな末端に知らされているかは分からないけどな」
ドラゴンを殺したという聞き捨てならないキーワード。
ネギとしてはその辺りの事情をもっと詳しく聞きたかったが、この人ならやりかねないとも思った。
上から押さえつけられていた時に感じた迫力と威圧感。彼女は間違いなくドラゴンくらいは殺してのける。
実際に触れてみて、そのくらいの実力は持っているとネギには確信できた。
「学園側の人間も、遅かれ早かれ俺の存在まで辿り着くだろうとは思ってた。だから、今日アンタがやたらと千雨に絡んできたのは、千雨の正体――――引いては俺の存在を探るためじゃないかと思ったんだよ」

自分の早とちりだったけどな、と彼女は溜め息を吐きながら付け加える。
しかし、一応ネギは魔法協会所属の魔法使いなのだが、こうも簡単に事情を喋ってしまって良かったのだろうか。
「あの…僕にはバレちゃいましたけど…良いんですか？」
「それはアンタが周りに話さなければ良いことだろう？　アンタが魔法使いってことを周りにばらさない代わりに、アンタも俺のことを周りに話さない。交換条件としては妥当なところだと思うがな？」
腕を組んだ姿勢のまま、フンと鼻を鳴らすようにして彼女は言った。
たしかにお互いの秘密を守るだけという意味でなら、同じ条件かもしれない。
しかし、相手のことが何も分からない現状で、その条件を呑むわけにはいかない。
「アナタは一体何者なんですか…？　貴女が無害な存在なら或いはそれでも良いのかもしれない。けれど、もしもアナタが何か悪いことを企んでいるようなら――――」
見過ごすことは出来ない、とネギは言った。
彼女はネギの方をチラリと一瞥すると心底興味なさげに答える。
「別に俺自身は干渉されない限り、この学園の魔法使いや魔法協会をどうにかしようって気はないがな。何よりそれはこの身体の宿主である千雨自身も望んでいないことだろうさ」
ここで彼女の口から千雨の名前が出たが、その物言いにネギはどこか引っ掛かりを感じた。

多重人格と聞いて、内面で会話や相談が出来るような関係をネギはイメージしていた。だが、先程の彼女の言葉は「望んでいない」と断定の言い方ではなく、「望んでいないだろう」という推量の言い方だった。

もしかして――

「ひょっとして千雨さんはアナタのことを知らないんですか？」
「そうだ。俺からは千雨のことを把握できるが、千雨からは俺のことは把握は出来ない。だから、今の千雨は俺という別の人格が自分に宿っているということすら知らないはずだ」
「もしかして、それは千雨さんに気を遣って…？」
「気遣いという程の物でもないけどな」

素っ気ない返答だった。
だが、今の会話を通して、彼女が魔法協会や魔法使いをどうこうするつもりがないという言葉もある程度は信頼できるとネギは考えていた。
少なくとも、彼女は宿主である千雨のことをある程度は気遣って行動していることは確実だからだ。もしも、彼女が千雨の人格を無視して好き勝手に表に出て行動していたなら、とっくに千雨自身に気付かれていてもおかしくない。
それはつまり、宿主である千雨自身に不審に思われない、気付かれない範囲の活動に留めている、ということだ。

「それでどうする？　俺のことが信頼できないっていうなら、俺を拘束なり何なりしてみるか？」

まるで挑発するような表情で彼女は言った。

「いえ…それはやめておきます」
「それは何故？」

「だって、千雨さんが望んでいないんでしょう？　それに――」

そこでネギは一度言葉を切る。

そして、ネギは一呼吸置いた後、はっきりと告げた。

「それに長谷川さんも僕の生徒ですから。もちろんアナタも含めて」

だから、まずは力尽くではなく言葉で話しかけたい。

ネギの語った言葉が予想外だったのか、彼女は呆気にとられたように固まった。

何というか、心の底から意外だという感じの表情をしている。

「…？　僕、何か変なことを言いました？」

「いや…まさか、そんなお人好しな答えが返ってくるとは思ってなかった」

「そうですか？　普通だと思いますけど」

ネギはそう言うが、断じてそんな訳はない。

多重人格というだけでも十分怪しいのに、それをこうも簡単に信じるなんて正直どうかしている。

だが、実際のところ、ネギの行動と言葉は本人にとっても、学園にとってもファインプレーであった。ここでネギが答えを間違えていたら、彼女は学園にとって『敵』になっていた。

ネギ自身には全く自覚はないことだが、下手に『雷帝』である彼女と敵対するようなことになっていたら、学園が物理的に消滅することになる可能性もあったからだ。

核爆弾級の地雷を無自覚にスルーすることに成功したネギ。知らないということは、ある意味、幸せなことなのかもしれない。

「よく考えたら…まだ名前を聞いてませんでしたね」

「名前？」

普段の千雨とは違う裏側の人格。
今、表側に現れている彼女の名前をネギは訊ねたが、彼女は答えなかった。いや、答えられなかった。
肩書のような称号は持っていたが、それは元々の名前という訳ではない。
彼女は口元に手を当てたまま考え込んで、黙り込んでしまう。

「――――…」

今更のことではあるが、言われてみて「雷帝」である彼女自身もようやく気付いた。
かつて天野銀次の『影』として存在していた時も、そして今も、自分自身を指す別個の名前というものは持っていなかった。

「……俺に元々の名前は無いよ。そもそも名前なんて必要も無かったし、考えたことも無かった」
「え…」

名前が無いという彼女のその言葉に、ネギは一瞬、言葉を失くしてしまった。
確かに千雨の影として存在するだけなら、個別の名前が無くても困ることはなかったのかもしれない。
だが、困る困らないとかの問題以前に、名前が無いということが、ネギにはどうしようもなく哀しくて、寂しいことのように思えた。
だから、ネギはつい訊いてしまった。

「それって寂しくないですか?」
「何でそう思う?」
「何でって……」

逆に問い返されたネギだったが、その答えはすぐに自分の中に見つかった。
だから、ネギは何も迷うことなく、自分の心に従う。
「だって、名前が無かったら、誰からも名前を呼んでもらえないじゃないですか？」
本来、名前とは自分のためだけに用意され、一生の間、名乗り、呼ばれ続けられる特別な言葉だ。ネギも幼い頃から今に至るまで、毎日数え切れないほどたくさんの名を呼ばれて来た。
そして、名前を呼ばれるということは、『その存在を認められている』ということだ。それが真実だとしたなら、その逆は――――
「僕だったら嫌ですよ。誰からも、名前を呼ばれないなんて…」
ネギはまるで自分の胸が痛むかのように言う。
一方、千雨の姿をした別人は、そんなネギのことをしばらくジッと見つめていた。
「――――…」
彼女がネギに見入っていた理由。
ネギのことが自分の良く知る人物とやけにダブって見えたからだ。
はっきり言って、容姿的なことはあまり似ていない。だが、何故か彼女の目にはネギのことが、かつての天野銀次という少年と重なって見えていた。
やがて彼女はネギから一度視線を外すと、ぽつりと呟くように漏らす。
「名前、か…」

虚空をぼんやりと見つめながら彼女は呟いた。

「名前なんてなくても俺自身は別に気にしないが――――」

正直、名前なんて無くても彼女自身は困らない。

だから、この次に彼女の口から出た言葉は、あるいはただの気紛れだったのかもしれない。

「――――どうせなら、お前が俺に名前を付けてみるか？」

その思いがけない言葉にネギは一瞬、驚いた顔をする。

「僕で良いんですか？」

「別に構わない」

「じゃあ――――」

少し考えた後、ネギは言った。

「それじゃあ、千影（ちかげ）さんで」

長谷川千雨の『影』の人格だから、という安直なネーミングである。

しかし、『ゲレゲレ』や『げろしゃぶ』とかのふざけた名前の万倍はマシであることは間違いない。

もっとも、そんな馬鹿みたいな名前を付けていたら、ネギは間違いなく殺されていただろうが。

「長谷川千影、ね…」

ネギからもらった名前を呟いてみる。

偽名も同然の名前だが、それでも実際に口に出してみると少し不思議な気分になった。

「ところで千雨さんも、千影さんも、やっぱりパーティーには出ないんですか？」
「それは千雨の方に言ってやれ。…俺はもう裏側に引っ込む」

千影にとってはこれ以上、表側に出ている意味なんてない。
本来ならネギにも何の声も掛けずに千雨の意識の裏側に引っ込んでも別に良かった。
だが、今回ネギから名前を貰ったことについて何か思うことがあったのか、千影は最後にネギにこう声を掛けた。
「――――名前を貰った礼だ。お前が何かの危険に巻き込まれたときは、一度だけ助けてやる」

最後にそう言い残し、肉体の主導権を千雨に譲り渡したのだった。

◆

肉体の主導権が千雨へと移った途端、そのまま後ろに倒れそうになる千雨の身体。
倒れる寸前でネギが抱き支える。そして、ネギが千雨を抱き抱えていると、数秒後に千雨の目が覚めた。
「…え？」

一瞬、自分の状況が把握できずに呆然とする千雨。
自分がネギに抱き支えられていることに気付いた千雨は飛びずさる様にして慌ててネギから離れた。

「ネ、ネギ先生!?　なな、ななんん何で!?　」

やはり、というか千影が表側に現れていたときの記憶は彼女には無いらしい。

ネギは改めて千雨のことを見るが、やはり姿形は千影と全く同じだ。だが、その瞳に宿る眼光の鋭さだけはまるで違っている。

先程までの彼女とは本当に別人なのだと、ネギは改めて理解できた。

「すみません。勝手に部屋に入って。でも、部屋の中から人が倒れたような音がしたので…」

もちろん事実は異なる。

千雨を誤魔化すための方便だが、彼女は疑う素振りを全く見せなかった。

実際、部屋の中で気を失った所までの記憶しか千雨には無いからだ。

「…先生が倒れた私を介抱してくれたんですか?」

「ええ。多分、軽い貧血か何かだと思いますけど、気分は大丈夫ですか?」

目が覚めてからの体調自体は全く悪くない。

千雨はネギの問いに頷いて答える。

「体調は悪くないです」

「それなら良かった」

ネギは微笑んでみせる。

「体調が良くなったのなら、長谷川さんも一緒にパーティーに行きま

せんか？」
「え、あ、あたしは…」

手を引かれ、少し強引にパーティーへと連れ出される千雨。
そして、連れ出された先、ネギのくしゃみに制服を吹き飛ばされるなどの一悶着があったが、その日は概ね平和に過ぎて行った。
だが、後になって思えば、それは所謂「嵐の前の静けさ」という奴だったに違いない。千雨の中に秘められた『雷帝（千影）』の力。その力が麻帆良学園の全てを巻き込むほどの大参事へ繋がることになるなど、今のネギと千雨には知る由も無かった。

第十二話『桜通りの吸血鬼』

新年度の始まりとなる４月となった。
蛮たちがこちらに飛ばされてから、そろそろ２～３か月くらいが経つ。
そもそも彼らがこちらの世界に残った最大の理由は、一緒に飛ばされたと思われる『神の記述』のカードの捜索のためだった。
しかし、現実の話として、彼らは未だに手掛かりすら掴めないでいた。

「いまだに全く手掛かりは無しか…」
「私の魔術でも全く見つけられないなんて…」

余りの進展の無さに蛮とマリーアの二人がぼやいている。
はっきり言って、すぐに見つかると舐めていたと言わざるを得ない。
…というか、ここまで探しても見つからないとなると、探し方を根本的に考え直した方が良いかもしれない。
あるいは学園の魔法教師・魔法生徒の連中に事情を説明して本格的に協力してもらうことも視野に検討するべきなのかもしれないが、今の時点では結論は下せなかった。

（ホント、どうすっかねえ…？）

一体どうしたものかと頭を悩ませる蛮とマリーア。
そして、そんな蛮とマリーアとは対照的に、お気楽極楽にＴＶゲームに興じている相坂さよと銀次の二人。
しかし、ＴＶ画面の中で繰り広げられている光景がさっきから明らかにおかしい。
ジョインジョインジャギィデデデデザタイムオブレト

ビューションバトーワンデッサイダデステニーヒャッハーペシッペシッペシッペシッペシッペシッペシッペシッペシッヒャッハー
ヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒヒ
ヒーッヒヒヒーッヒヒ　ヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒ
ヒヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒ
ヒヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒヒヒーッヒ
ヒヒーッヒヒヒーッヒヒＫ．Ｏ．　カテバイイ
バトートゥーデッサイダデステニー　ペシッヒャッハーバカメ
ペシッホクトセンジュサツコイツハドウダァホクトセンジュサツコノオレノカオヨリミニククヤケタダレロ　ヘェッヘヘドウダクヤシイカ　ハハハハハ
ＦＡＴＡＬ　Ｋ．Ｏ．　マダマダヒヨッコダァ　ウィーンジャギィ（パーフェクト）

それは赤いジャギがトキに何もさせずに圧勝する光景であった。
とてもジャギとは思えない圧倒的な動きと強さを見せつけられた対戦相手である銀次は持っていたコントローラーを床に叩き付けて叫ぶ。

「このジャギ絶対おかしいよ!?」

世紀末スポーツアクションゲーム『ＡＣ北斗の拳』におけるジャギとトキ。
実はこのキャラ同士の対戦は、ダイヤグラムでは８：２でジャギが不利と言われている。
そんな凄まじい不利をひっくり返して圧勝を決めてのけるとは、この少女、一体どれだけこのゲームをやり込んだのだろうか。
出会って以来、蛮達が拠点にしているこの家に入り浸るようになった幽霊の少女。銀次に圧勝した彼女は「ドヤッ！」と得意気な表情を浮かべている。
とりあえず考え事を中断した蛮は、少し呆れ気味に銀次に声を掛けることにした。

「…ったく、ジャギ相手にトキで負けてんじゃねえよ」
「いや、蛮ちゃん！　さよちゃんのジャギはジャギじゃないから！
蛮ちゃんだって、こないだユダで負けてたじゃん!!」
「あーあー聞こえねー！　一体何のことだか分からねえな!?」

わざと大げさに聞こえない振りをする蛮。
蛮の中でもユダでジャギに負けたことは、ある意味、忘れ去りたい過去だった。
本来、ユダとジャギの対戦は9：1でユダ有利と言われており、普通なら対戦自体が成立しないレベルの差があるはずなのだ。
そんな並み居る強キャラ達を相手に最弱キャラであるジャギでほぼ互角に渡り合い、勝率4～5割をキープする。どう控えめに言っても、異常である。

『ふっふっふ、私のジャギは一味違いますよ?』

そう言って彼女はニヤリと悪そうな顔を浮かべる。
コロコロと色々な表情を見せる彼女は、蛮達の妹分あるいはマスコット的な立場に収まっていた。
ほのぼのとするやり取りを続ける三人をマリーアは一歩引いた位置から微笑ましく見守っている。
そして、そんな彼女の視線にふと気付いたさよがマリーアへ声を掛ける。

『…?　どうかしたんですか、マリーアさん』
「ああ、何でもないわ。アナタ達があんまり楽しそうに見えたものだから、つい見入ってただけ」

穏やかな表情で答えるマリーア。
正直なことを言うと、最初は自分達の用事を片付けたらさっさと元

の世界に帰るつもりだった。
だが、こちらの世界で暮らすうちに出来た他者との繋がり。たとえ、いつか自分達が元の世界に戻ったとしても、それらの繋がりを無駄にはしたくはなかった。
だから、自分達が元の世界に戻るまでに自分達が残せるモノがあるなら、残せるだけ残しておきたいとマリーアは思う。この幽霊の少女のこともそうだが、この学園には傍から見ていて危なっかしい者がやたら多くて、ついつい手を差し伸べたくなってしまう。
そんな少しばかり危なっかしい面々――その中でも最も幼い少年のことを思い出して、マリーアは少しだけ軽い溜め息を吐いた。
（あの年齢で、あの子の将来を縛り付けるのもどうかと思うけどね…）
かつての大戦の英雄の息子である少年。
学園側もあの子の将来に期待しているのは良く分かるし、あの子自身にも才能は十分ある。
マリーアにしてみれば、ネギという少年は最初から英雄になるべくして育てられている。学園で起こる出来事の殆どが、あの少年のために仕組まれているように見えるのだ。
そして、おそらくは現在、噂になっている吸血鬼事件についてもそうだろう。

――桜通りの吸血鬼――

数ヶ月前から囁かれ始めた噂の一つ。
満月の夜、麻帆良学園学生寮の近くにある桜並木に『吸血鬼』が出るという噂だ。
実際にその吸血鬼に襲われたのか、満月の日の翌朝に桜並木の近くで倒れていた生徒がいるらしく、ほんの少しだが真実味を帯びている。
…というか、主だった魔法教師や魔法生徒にとっては事件の犯人な

どもはや公然の秘密状態だ。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

数百年の時を生きる真祖の吸血鬼であり、蛮たちがこのセカイに飛ばされたときに最初に出会った人物。

登校地獄というふざけた呪いにより、永遠に魔帆良学園に通わなくてはならず、しかも現在はネギの担任するクラスに在籍しているという。

学園長からは「目立った実害が無いなら放置で問題ない」とは言われてはいるが、彼女がネギを狙って何かを企んでいるのは間違いない。

もっとも――

(おそらく、彼女自身はネギ君に対してはそれほど酷いことはしないはず…)

以前に彼女自身と少し話してみた印象からの判断だが、おそらくそれは間違いない。

だが、何故かマリーアは今回の事件に関して、妙な胸騒ぎを感じている。そして、それを感じているのはマリーアだけでなく、蛮と銀次の方もそうだった。

正直、彼らが一番気にしているのは、図書館島の地下に一度だけ現れたという人物のことだ。実際に彼らが見たわけではないが、その場に残されたドラゴンの死体の状況を見ただけで、その人物の圧倒的な実力の程が分かる。

そして、その人物についての情報は、あれ以来プッツリと途切れたままだ。

しかし、それでも彼らには確信にも似た予感がある。

――その人物は必ずもう一度、現れる。

それが一体いつなのかは分からないが、そう遠くない未来ではない。
その未来が今回のエヴァンジェリンが起こす事件を切っ掛けにするのかどうかは分からないが、もしも本当に現れるのなら蛮たちも関わらない訳にはいかないだろう。

（けど、本当に『雷帝』だったらどうなることやら…）

最悪、真っ向から戦うことも視野に入れなければならない。
こちらも、それを想定した上でそれなりの準備はしたつもりだが、どこまで想定通りに進むかは誰にも分らない。
そして、結果的には、彼ら3人が感じていた胸騒ぎは見事に的中することになるのだった。

◆

月光に照らし出された桜通り。
そこには空中から見下ろす少女の視線があった。

「27番、宮崎のどか、か……。悪いけど少しだけその血を分けてもらうよ」

黒マントを纏った何者かに夜空から襲われる宮崎のどか。
そして、月夜に彼女の悲鳴が響くのと、魔力の気配を感じたネギが駆けつけたのは、ほぼ同時だった。

「僕の生徒に何をするんですかーっ！」

ネギは今まさに自分の生徒を襲わんとしている影に向かって飛んでいった。
そして、彼はネギは現場に到着すると同時に呪文を完成させ、のどかを襲った黒マントの人物へと魔法を放つ。
「ラス・テル・マ・スキル・マギステル。風の精霊11人、縛鎖となって敵を捕らえろ（ウンデキム・スピリトゥス・アエリアーレス・ウィンクルム・ファクティ・イニミクム・カプテント）。魔法の射手・戒めの風矢（サギタ・マギカ・アエール・カプトゥーラエ）!!」
ネギが魔法で放ったのは捕縛属性を持つ風の矢。
「氷盾（レフレクシオー）」
とんがり帽子と黒マントを纏った謎の人物はなにやら液体が入ったフラスコを投げつけた。
すると、その人物の前に大きな氷の盾が現れ、ネギの放った攻撃魔法はすべて弾き飛ばされた。
氷の盾と風の矢は激突し、お互いを打ち消し、爆発のような衝撃と煙を残して消え去った。
「ぼ、僕の魔法を全部はね返すなんて!?」
ネギは驚愕した。
この事件は魔法使いによるものだったのだ。
「驚いたぞ、すさまじい魔力だな」
謎の人物はネギを賞賛する。
魔法の余波でその人物の帽子が吹き飛び素顔が現れた。

「えっ!?　き、君はウチのクラスの…、エヴァンジェリンさん!?」
「新学期に入ったことだし、改めてご挨拶と行こうか。ネギ・スプリングフィールド先生。１０歳にしてこの力…。流石に奴の息子なだけはある」

ネギは自分の父のことを言われて動揺したが、なんとか目の前の人物に意識を集中した。
気になるキーワードではあったが、それを問いただすのは後回しだ。

「どうして……どうしてこんなことをするんですか!?　魔法使いは人の幸せのために働くものでしょう!?」
「甘いね、ぼーや。世の中には良い魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ！」

エヴァンジェリンはフラスコと試験管を構えた。

「氷結・武装解除（フリーゲランス・エクサルマティオー）!!」

彼女は呪文を唱え、フラスコと試験管を投げつけた
月光に煌き、夜空に放物線を描きながら落ちてくる魔法薬のビンの数はおよそ１０以上。
しかし、すべてを凍らせ砕く氷の波動は、突然の乱入者の放った『雷』によって全て阻まれた。

「「なっ!?」」

驚愕したのはエヴァンジェリンとネギの両方だ。
その人物は瞬間的にネギを守るように間に割って入り、放った雷撃が氷の全てを一瞬で蒸発させていた。

「これで貰った名前の借りは返したぞ？　ネギ・スプリングフィールド」

そう言って、振り返った少女にネギは覚えがあった。
眼鏡こそ外しているが麻帆良の制服に身を包んだ姿形は、確かにネギのクラスの生徒である長谷川千雨のものだ。
だが、普段の彼女とはまるで違う、その険しく射るような眼光を帯びた金色の瞳は――――

「…長谷川、千雨か？　いや、違うな。何者だ、貴様は？」

エヴァンジェリンも眼前の人物が普段の彼女とは別人だということを見抜いた。
そして、千雨の姿をした少女は、エヴァンジェリンへ改めて向き直ると、言った。

「お察しの通り、俺と千雨は別人だ。はじめましてと言っておこうか、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。本来はこんなお子様先生を助ける義務なんて無いんだがな。一度だけ助けると言った手前、今回だけは手を出させてもらう」

どう聞いてもネギの代わりにエヴァと戦うつもりの台詞。
しかし、その次に彼女は、ネギとエヴァが全く予想していなかった行動に出た。

「ぶふぉッ!?」

なんと彼女は後ろに居たネギを蹴り飛ばしたのだ。
恐ろしく美しいフォームで繰り出された右の後ろ廻し蹴り。
その蹴りは綺麗にネギの顎を直撃し、脳を揺らされたネギは意識を失ってその場に倒れた。

「味方じゃなかったのか!?」

困惑するようなエヴァの表情。
ちょうどその時、近衛木乃香と神楽坂明日菜が駆け寄ってくる。

「何や、今の音!?」
「あっ、ネギ！　それに本屋ちゃんも！」
「くっ…、人が集まってきたな」

人が集まってきたことで、ハッと我に返ったエヴァンジェリンは人目を避けるために霧の中へ逃げていった。
千雨の姿をした少女は、気を失ったのどかとネギを木乃香と明日菜に預けた。

「近衛木乃香と神楽坂明日菜、そこの二人を任せるぞ」
「え？　だ、誰や…？」
「長谷川、さん、なの？　で、でも瞳の色が…」

木乃香も明日菜も、彼女が誰なのか確信が持てないようだ。
そんな二人を大して気にも留めずに、彼女は踵を返す。

「俺はさっきの吸血鬼事件の犯人にまだ用がある。お前たちはさっさと帰れ」

そう言い残すと、エヴァを追うべく彼女は地面を蹴る。
とても普段の千雨からは考えられないような速度で駆け出していった。

「うわ、はや!?」
「ち、ちょっと待ちなさいよ!!　」

少し遅れて明日菜が走り出す。
明日菜の運動能力も中学生としては相当なレベルではあるが、それでも前を行く二人の速さには及ばない。

（何よ、あの速さ…!?）

あっという間に小さくなっていく前の二人。
しかし、それでも追い縋るように明日菜は走り続けた。

◆

一方、先頭を行くエヴァンジェリンであったが、先ほどの人物があっという間に距離を詰めてくるのを感じていた。

（速い……！）

自分と同じように飛行の魔法を使って飛んでいる訳ではない。
だが、建物の屋根から屋根、壁から壁をジャンプで飛び回りながら移動する様子は、もはや空を翔けているに等しかった。

（本当に何者だ、アイツは……！）

まるで『スパイダーマン』か何かのアクションヒーローを思わせるような縦横無尽の三次元機動。
このまま行けば遠からず追い付かれると判断したエヴァは、自らの従者と共に逆に待ち構えることにした。
エヴァはある8階建ての建物の屋根の上に着地し、後ろから追ってきた少女へと向き直る。

「鬼ごっこは終わりか？」

「ああ、貴様が何者かは知らんが、ここまで追って来たのなら少しだけ遊んでやろう」

桜の舞う夜空を背景に対峙する二人。

そして、更にそこにエヴァの傍に侍るように現れた者がいた。

「紹介しよう。私のパートナー、〝魔法使いの従者〟（ミニステル・マギ）絡繰茶々丸だ」

現れたのはネギのクラスに所属していたロボットだ。

状況的には2対1だが、エヴァたちと対峙している少女は「それで？」とでも言いたげな無表情を保ったままだ。

その見下すような冷徹な瞳にロボットである茶々丸ですらも、ただならぬ気配を感じ取っていた。

「マスター、私のセンサーは間違いなく彼女を長谷川さんだと認識しています。けれど、彼女は本当に長谷川さんなのですか？」

「さあな。私にも分からん。だが、こうして追ってきた以上、どうやらヤツは私たちと戦うつもりのようだ」

決して剥き出しという訳ではない。

だが、彼女の佇まいからは内に秘められた静かな殺気が確かに感じられた。

「しかし、解せんな。何故、貴様はあの坊やを気絶させた？　私と戦うということだけなら、別にヤツを気絶させる必要は無かったはずだろう」

エヴァの問いはもっともだ。

だが、その問いに対する千雨の姿をした少女の答えはこうだった。

「別に大したことじゃない。単に邪魔だっただけだよ。俺がそれなりに本気を出して戦えば、近くにいる奴はそれだけで血液が沸騰して死ぬからな」

知らない者が聞けば、彼女が一体何のことを言っているのか分からないだろう。

当然、エヴァ自身にも彼女が何を言っているのか分からない。怪訝な様子のエヴァを無視して少女はさらに言葉を続ける。

「本当はこんなところで『力』を使うつもりは無かったんだがな。だが、どうせいつか知られることになるのなら、先延ばしにしたところで結果は変わらん。だったら、この世界の最強クラスの魔法使いというヤツの実力の程を知っておくのも悪くはない」

一歩、前に出る。

「光栄に思え、エヴァンジェリン。この世界では、アンタに初めて見せてやる。――――本物の、『雷帝』の力をな」

彼女がそう言ったその瞬間だった。

ドクンッ、という心臓の鼓動が彼女の身体を飛び越えてエヴァにも聞こえたような気がした。

「何……？」

その瞬間、麻帆良学園の全域が突然、停電に見舞われたのだった。

◆

突然の麻帆良学園の停電。

そして、その停電と共に強大に膨れ上がった気配が二人分。

片方は真祖の吸血鬼であるエヴァンジェリン。そして、もう一つは――

「蛮ちゃん、これって…」
「ああ…、ついに来たな…」

これだけ離れていても感じるこの気配。
やはり、間違いない。蛮と銀次の二人は揃って同じ結論を確信する。

「マリーア、俺と銀次は先に行くぞ」
「ええ、事前の打ち合わせ通りに進めましょう」

正直、これが予想通りの相手ならどこまで想定通りに進むかは分からない。だが、それでも動かない訳にはいかない。
銀次と蛮の二人は家から飛び出して駆け出したのだった。

◆

学園の電力がすべて落ちた為に、エヴァの魔力を封じる結界の効力も失われ、期せずして全盛期の魔力が戻る。
そして、エヴァの魔力が戻ると同時にそれは起こった。

――カッ!!!

突然、千雨の姿をした少女へと雷が落ちる。
普通なら生身の人間が落雷にうたれて生きているはずはない。
しかし――

(何だコイツはッ!? 全身に雷を纏って…!?『闇の魔法(マギア・エレベア)』か!? いや、違う!!)

目の前の光景に戦慄するエヴァンジェリン。
全身に雷を纏う少女の姿は、彼女が昔に開発した『闇の魔法（マギア・エレベア）』を発動させた状態に似ている。
だが、その本質がまるで違うことをエヴァンジェリンは見抜いていた。

「マスター、あれは…」
「…分かっている。あれは桁外れだ」

エヴァたちの眼前に佇む少女の予想もしない変貌。
停電させた地域から奪い取った電力を喰らい尽くし、強大すぎるエネルギーが彼女の中に渦巻いていた。
彼女の全身が帯電し、バチバチと音を鳴らす青白い稲妻が、まるで火花が散るように走っている。

「わざわざこの学園の結界を落としてアンタが本気を出せるようにしてやったんだ。簡単に倒れてくれるなよ？」

かつての無限城世界における最強の雷使い。
本当の全力を出せば、『本物の神』すら捻じ伏せることができる真の怪物――『雷帝』の降臨だった。